



室蘭工業大学研究報告. 文科編 第35号 全1冊

メタデータ	言語: eng 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-03-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2782

(ISSN 0580-2407)

室 蘭 工 業 大 学
研 究 報 告
文 科 編

第 三 十 五 号

昭和六十年十一月

MEMOIRS
OF
THE MURORAN INSTITUTE OF TECHNOLOGY

Cultural Science

NO. 35
Nov., 1985

MURORAN HOKKAIDO
JAPAN

Editing Committee

M. Murozumi	Prof.	<i>Chief Librarian</i>
K. Origasa	Prof.	<i>Electrical Engineering</i>
H. Kanoh	Prof.	<i>Industrial Chemistry</i>
Y. Sawada	Prof.	<i>Mineral Resources Engineering</i>
N. Nitta	Prof.	<i>Civil Engineering</i>
S. Hoshino	Prof.	<i>Mechanical Engineering</i>
Y. Tanaka	Prof.	<i>Metallurgical Engineering</i>
H. Watanabe	Prof.	<i>Chemical Engineering</i>
Y. Hanaoka	Prof.	<i>Industrial Mechanical Engineering</i>
K. Izumi	Prof.	<i>Architecture and Building Engineering</i>
H. Tazawa	Prof.	<i>Electronic Engineering</i>
H. Fujiwara	Prof.	<i>Applied Material Science</i>
H. Sakanishi	Prof.	<i>Literature</i>
A. Matsumoto	Asst. Prof.	<i>Science</i>
Y. Ueda	Asst. Prof.	<i>Electrical Engineering (Evening Session)</i>
I. Shirotani	Asst. Prof.	<i>Applied Science for Energy</i>

All communications regarding the memoirs should be addressed to the chairman of the committee.

These publications are issued at irregular intervals. They consist of two parts, Science and Engineering and Cultural Science.

室蘭工業大学研究報告 第 35 号

文 科 編

目 次

デュルケム「自殺論」における自己本位主義概念……………宇都宮 輝 夫	1
ドイツ民衆文芸の歴史について—研究資料・編訳：ドイツ民主共和国・ベルリン科学アカデミー・歴史学—民俗学中央研究所ヘルマン・シュトロバハ「ドイツ民衆文芸史」序文—……………坂 西 八 郎	29
民衆文芸を考えるための基準と民衆文芸の概念について—研究資料・編訳：ドイツ民主共和国・ベルリン科学アカデミー・歴史学—民俗学中央研究所 ヘルマン・シュトロバハ「ドイツ民衆文芸入門」序文—Ⅱ ……………坂 西 八 郎	51
ドイツ民謡の収集と研究について—研究資料・編訳：ドイツ民主共和国・ベルリン科学アカデミー・歴史学—民俗学中央研究所 ヘルマン・シュトロバハ「ドイツ民衆文芸入門」歌曲（1．収集と研究）—Ⅲ ……………坂 西 八 郎	61
Versuch der geschichtlichen und gegenwärtigen Übersicht des Haiku auf Hokkaidō JAPAN ……………坂西八郎・木村敏夫・ミヒャエル・グロイスマイアー	81
Body composition and three indices of physical fitness in freshmen: exercise is of no effect?……………谷口公二・清野市治・小成英寿	141
前思春期ヒステリー症例の心理治療過程と家族画の変化 ……………清 水 信 介	149
学術研究発表集録（昭和59. 4. 1～60. 3. 31）……………	187

デュルケム『自殺論』における自己本位主義概念

あるいは、目的のない生活とつづける疲労

宇都宮 輝 夫

Egoism in Durkheim's *Le suicide*

Teruo UTSUNOMIYA

Abstract

Some scholars have often passed the criticism on Durkheim's *Le suicide* that in his work the social causes of suicide were not definitely related to individual psychological motives of suicide. This paper aims to criticize these critics through exploring the deep meanings of *Le suicide* and making its true validity clear.

When a life-world doesn't last firmly, one totally loses sight of the significance of one's life and yields easily under the slightest misfortune. This state is the true meaning of the egoism, the key concept of *Le suicide*.

目的のない活動から来る疲れのために、私は皆が私にも仲間に入れ
とすすめる味のない快樂よりも孤独のほうを選んだ。私は誰に対して
も憎しみは抱いていなかったが、興味を私に抱かせるような人も殆ど
なかった。——コンスタン『アドルフ』

はじめに

デュルケムの『自殺論』は、個々の具体的自殺事例の研究ではなく、近代社会の病理診断であったと言える。自殺は、個人生活上の孤立した悲劇としてではなく、「全体としての社会における一層広範な病理的状态の一指標として」¹⁾

彼の関心を引いたのである。当初の関心の方向からしても、方法論上の観点からしても、彼が問題としたのは、「自殺の潮流」の社会的原因の分析であった。しかしそのために、『自殺論』に対しては、ある特定の批判が繰り返し提起されてきた。それは、彼が自殺の社会的原因を強調するあまり、自殺に対する動機づけ過程を等閑に附してしまった、という批判である。例えば中村一夫によれば、『自殺論』は、自殺を引き起こす社会状態の傾向は示すけれども、社会状態が個人に作用して、個人がいかに反応するかということを全く不問に附してしまった。つまり、社会には人を自殺に走らせる一定の傾向が客観的に存在し、それは個人がどうあるかとは全く関係がないということ、これこそ『自殺論』の主張であると中村は解釈するのである²⁾。私見によれば、これは言い掛りに等しい。自殺の潮流と自殺行為との間に、特定の心理状態が媒介項として存在するのは自明のことであり、デュルケムもそれについて沈黙しているわけでは決していない³⁾。とはいえ、それが十分明示的ではなかったという点は、やはり認められうる。本稿の目的は、それ故、動機論的側面から彼の主張を補完することにある。

この目的を遂行するために、本稿では現象学的社会学の諸理論が応用される。シュッツとデュルケム『自殺論』との結合は、一見奇怪に思われるであろう。しかしシュッツの理論は、デュルケムが十分説明し尽さぬまま残した、いわば「生きがい」の構造（＝生を支えてくれる基盤であり、従ってその喪失は自殺の心理的条件となる）を明らかにしてくれる。シュッツの最も意義深い功績の一つは、他者理解の基礎理論を構築した点に求められる。その出発点となった基本的問題意識は、人間が相互理解およびコミュニケーションをなすこと、有意味な行為を完遂すること、達成すべき目的によって導かれ動機づけられること、これらがいかにして生ずるのか、というところにあった。我々は、これらの問題意識を否定形に転換しさえすればよい。その時、自殺現象は、心理的・動機論的側面から照明を当てられるであろう。

I. 理論的視角 ——前提的予備的考察——

通常我々は、日常生活における知覚を単純な感覚呈示であると考えている。しかし、例えば、「私は庭に桜が咲いているのを知覚する」と言う時、それは知覚の記述というより、むしろ複雑な解釈過程の結果の記述である。現在の知覚は、以前に経験した諸知覚・諸思惟と結びつけられ、こうした関係づけの結果として、「庭に桜が咲いている」という解釈が成り立つ。従って、純然たる事実といったものは、厳密に言えば存在せず、それはすべて解釈された事実であり、精神の諸活動によって全体の文脈から選り出されたものである。言い換えれば、意識の中心を占める主題となった経験（「桜が咲いているのを知覚する」）は、ここで主題化されなかった以前の経験を背景としている。知覚作用によって捉えられるのは、事物のたった一つの相だけであるが、それが他の諸相を示唆するわけである。例えば、花の前面はその裏面を、樹皮はその内側を、幹は隠れた根を示唆する。シュッツはこれらをノエマの「内的地平」と呼ぶ。しかしさらに、木は庭を指示し、庭は町や国を、そして最終的には全宇宙を指示する。これが「外的地平」であり、個々の知覚はそこから選り出され、それに対して際立たされる。それ故、「いかなる対象も、一つの孤立した対象としては知覚されない。対象は、初めから＜対象がもつ地平のうちにある対象＞として知覚される」⁴⁾。

現在の知覚が前経験された諸知覚・諸思惟との関係づけによって可能になるということは、別の表現をすれば、すべての認識は認識対象の類型についての一般的な知識に基づいている、ということである。「この桜」の知覚が可能なのは、「この桜」が私に現われる類型的様式を知っているからであり、「この桜」という類型を「桜一般」、「植物」、「外界の対象物」等の諸類型と関係づけるからである。類型化は、過去の経験の沈澱として構成され、利用可能な知識の集積をなしている。我々はこうした知識の集積に基づいて過去や現在の経験を解釈したり、未来を予測したりしており、従ってそれは、世界を理解する際の準拠枠として機能する。

以上に述べたことはすべて、行為の認知についてもそのまま当てはまる。他の行為と無関係で、世界から分離している孤立した行為というものは存在しない。行為はすべて、他の社会的現実と関わる地平を持っている。シュッツによれば、行為の認知は類型化を前提とする。それは、類型的に類似の状況において、類型的に類似の仕方、類型的に類似の事態をもたすことができるであろう、という想定である。こうした類型化に基づいて、我々は、他者の外的行動を時間・空間内で生ずる単なる出来事としてではなく、人間の行為として経験する。すなわち、その動機と目標を引き合いに出してそれを経験する。諸々の文化対象についても、事情は同じである。例えば、ある道具は、外的世界の一物体としてではなく、それを考案した人々が抱いていた目的との関連で経験される。このように、さきに言及した知識の集積は、物理的世界ばかりでなく、社会文化的世界を解釈する際の準拠枠ともなっている。

知識の集積が世界解釈の準拠枠をなすということは、それが孤立した個々の知識の集合ではなく、相互に関連し合った全体的体系をなしていることを意味する。つまりそれは、一つの閉ざされた全体的意味連関としてある。このようなものとしての知識の集積は、個人の創造物ではなく、社会的な起源を持ち、社会的に受け渡されるのであり、従ってそれは社会的に共有されている。シュッツはこれを「内集団には、その成員が自明視しているような相対的に自然的な世界観がある」⁵⁾と表現している。

この共有された世界観の内にあるのは、個別的な存在である個人の個別的な行為は、類型的な動機に基づいて類型的な目的を果たそうとする類型的な機能として解釈される。従ってこの場合、世界観は解釈図式として働く。しかし同時に、それは表現図式ないし志向図式としても機能する。なぜなら、他者に自己を理解させたいなら、行為者は解釈者の解釈図式を自己の行為の表現図式として使用せねばならないし、類型的な状況で類型的な成果を得たいと思う者は、類型的な仕方で行為せねばならないからである。志向図式は、行為準則の役割を果たし、価値判断・制度・方向づけと指針の体系、すなわち文化パターンと考えることができる。

内集団の成員は、集団の文化パターンを信頼できる確かな志向図式として受け容れている。状況は何度も繰り返され、古い問題はこれまでも満足の行くように解決されてきているので、ほとんどの問題はこのパターンに従って処理できる。内集団の成員は、日常生活をこうした習慣的なパターンの下に送っており、そこでは目標も定まっていれば、それをもたらしすべき手段も定まっている。人は決まりきった仕事に従事する時にのみ幸福を得られる、とデュルケムが言うのは⁶⁾、不当ではない。なぜなら、高度の共通性を持つ文化パターンを内在化している時には（その時に初めて人は決まりきった仕事に従事できる）、人は他者を理解でき、他者によって理解されることもできるからであり、さらにまた、自分に対する他者の行為の予測に関しても、自分の行為に対する他者の反応の予測に関しても、主観的にも客観的にも十分なチャンスを持つことができるので、他者とうまくやれる、そしてこの世界と調和できる、妥当なチャンスを持つことになるからである。自然的態度で生きている人は、いわば自動的に、社会において妥当する意味連関を扱うコツを心得ているのである。

さてここで、以上の議論を要約する形で、四つのことが特記される。（ア）内集団の成員は、顕著な自発性・能動性を示す。有意味な行為とは、差し当たり、前もって考えられた投企によって動機づけられる行為である、と定義できよう。その際、投企されるものは、行為によってもたらされるはずの未来の事態である。人々は、こうした達成すべき目標を自己の内面的思索によって、いわば無から考案するのではない。内集団にあっては、人々は、特定の状況において何を、どのようにすべきかを「知っている」のである。（イ）内集団の成員は、相互理解の十分なチャンスを持つ、別言すれば、親密な社会関係に対する高い可能性を持つ。（ウ）理解、解釈、予測などと言っても、それらは反省とは何の関わりもない。それらは、世界観の無自覚的・無批判的習得の結果でしかない。実際、内集団成員の行為は、習慣性・自動性・半意識という特性を帯びている。以上（ア）～（ウ）の三点は、『自殺論』における自己本位主義（égoïsme）とは正反対の特質である。（エ）認知とか理解は、意味に相關する。

理解は意味をもつものに向けられており、理解されるもののみが有意味だと言える。さて、理解の対象が常に地平の中でのみ与えられるならば、個々のものは、それを包みこんでいる地平を背景にして初めて理解でき、十分な意味を持ちうる。例えば、日常的な言葉のやり取りも、暗黙の内に自明視された全体的世界を後ろ盾にして成立しており、それを含意している。このように、あらゆる個別的对象は全体世界の中で経験され、またすべての個別的经验において全体世界はともに経験されているのである。むしろ正確には、全体世界は一切の個別的经验に先立って与えられており、前者が後者のありようを規定しているのである。従って、いかなる対象も、その背後にある意味連関からのみ理解されるのであり、対象の意味は、対象それ自体に内在するのではなく、それを理解可能にする解釈枠組の中にあると言っても差支えない。

Ⅱ. 自己本位主義 ——その特徴・原因・本質——

本章では、デュルケムの『自殺論』を直接に論議の対象とするが、その際、考察の焦点は、専ら自己本位主義に当てられる。こうしたやり方には、批判もあるであろう。実際、例えばR・アロンはアノミー概念を重要視しているし、J・デュヴィニョーも、アノミー概念がデュルケムの初期の研究を解く鍵であると主張している⁷⁾。しかし、『自殺論』の中心概念は、明らかに自己本位主義である。『自殺論』が近代社会の病理診断である限り、デュルケムの次の言葉を一応の論拠とすることができる。「現在、最も広範に発生し、年々の自殺数の増加に最も大きく与っている自殺のタイプは、他ならぬ自己本位的自殺である」(334:406, cf. 337:409)⁸⁾。

そこでまず、このタイプの個人的・心理的レベルでの特徴として、どのような点が挙げられているかを確認してみよう。第一に、自己本位主義者の特性は、ものうげな憂鬱であり⁹⁾、全般的な消沈と意気沮喪である¹⁰⁾。彼は癒しがたい疲労と憔悴・倦怠とを覚え¹¹⁾、外部の世界に何ら興味を抱かず(242, 254:314, 325)、どのような活動と行為も、彼をただ無関心とよそよそしい感情にいざなうばかりである(242:314)。従って彼は、無気力であり¹²⁾、活動

力の完全な衰弱を示している（177：244）。この最後の点は、特に重要である。生きようとする傾向は、他のすべての活動傾向の総体であるが故に、もし後者が弱まれば、前者そのものも弱まらざるをえないからである（202：272）。ところで、行動への活力が弱められるのは、自己本位主義者が自己の活動力を有効に用いるすべを知らないためである（177：244）。言い換えれば、自己の活動と生活に方向を見出すことができないからである¹³⁾。そして、方向喪失は目的喪失と等しい。行為の目的は消失しており、それはいかなる目標にも向かっていない¹⁴⁾。その理由も、明らかである。人間が自発的能動的でありうるためには、自己の行為が無意味ではないことを感じていなければならない。しかるに自己本位主義者は、あらゆる対象と行為の存在理由を見出さず、それらに意味を認めることができずに、彼の目にはすべてが無価値なものとして映ずる（160, 218, 256：227, 288, 327）。「自分の努力を引きつけようようなものは何一つなく、自分の努力が無に帰してしまうという感覚が心をとらえる」（162：228）。こうして人は、自己の生に意味と存在理由とをものでは認めることができない（176 f., 218, 334, 357：243, 288, 406, 429）。これが、自己本位的自殺の心理的発生基盤である。

ところで、自己本位的自殺に関して、デュルケムが最終的に到達した命題は、次のようなものであった。「人々を生に結びつけていた絆がゆるむのは、彼らを社会に結びつけていた絆そのものが弛緩してしまったため」（164：230）であり、それ故、「自殺は、個人の属している社会集団の統合の強さに反比例して増減する」（156：223）。ここから、上述した心理的基盤には社会的原因があることがわかる。問題は、この個人心理的なものと社会的なものとのがどのようなにつながるのか、ということである。

この問題に関するまとまった形で一般的な論及は、『自殺論』の中には一箇所しかない（160 f.：227 f.）。それによれば、人間は、物理的存在の上に社会的存在が重ねられた二重の存在であり、後者としての人間の活動は、集合的な起源と目的とを持つ。ここで道が二手に別れる。第一に、社会が強固に統合されている時には、個人は社会と結びついており（換言すれば、個人は社会的存

在として確立されており)、従って社会的存在としての人間の活動の目的は、個人に無縁のものではない。この場合には、その活動には存在理由ないし意味と価値があると個人に感じられている。それに対して、社会が不統合状態にある時には、個人は社会から切り離されてしまっているのであるから、社会的存在としての諸活動の目的ないし存在理由からも切り離される。こうして個人は、個的存在として放置されて、目的を持った活動から切り離され、「いったい自分は何のために生きているのであろうか」と自問せざるをえなくなる。

こうしたデュルケムの簡潔な答えには、突きつめて考えれば、言われるべきすべてのことが含まれていると思われる。しかしそれは、あくまで含蓄ないし論理的内包としてであって、それ故、自殺を生み出す社会状態と自殺の心理的条件との間が適切に結びつけられていないという従来の批判は、あながち不当とは言いきれないのである。この批判に対して、「社会的凝集は、強い緊張や不安にさらされている集団成員に、心理的支えを与える」¹⁵⁾ことを、デュルケムは経験的に一般化しえたと言っても、それはさしたる説明にはならない。また、「デュルケムは、社会的単位の一員であるという感覚が決定的に重要であることを知っていた」¹⁶⁾と言っても、それは問題を別の問題で置き換えたにすぎず、何の解答にもならない。この感覚が個人に生の意味を感じさせるというのなら、なぜそのようなことが生じうるのか（また、この感覚そのものはいかにして生ずるのか）がさらに問われなければならないからである。さきのデュルケム批判を粉碎するためには、自己本位主義が何に関わる概念であるかを見定めることから出発せねばならない。

『自殺論』の目的が各自殺類型の社会的原因の探究であるからには、自己本位主義概念は、多くの論者によって既に指摘されてきたように、社会構造ないし社会類型に関わる概念である。しかし、詳細に検討するならば、自己本位主義概念は、まず第一義的には、特定の社会構造（社会無構造）に対応する社会の道徳的構造（道徳的無構造）を指す¹⁷⁾。それでは、自己本位主義が指し示す社会の道徳的構造とは何であろうか。

デュルケムによれば、人間の行為を導くのは、観念ではありえない。しか

し、その観念が集合的な精神的状態のことであると断れば、社会は本質的に表象から作られていると言ってよい¹⁸⁾。ところで、「一つの観念体系は、世界のそれ以外のものと何の関わりもなく存在」(373:445)するわけでは無論ない。むしろ、「表象は何よりもまず、[既に形成されている]実在を表現することを役目としている。表象が実在を作り出すのではなく、逆に実在から表象が生まれる」(178:245)。それでは、「実在」とは具体的には何であろうか。彼によれば、「一つの民族の精神体系は、社会的諸要素の結合や組織化の様式に根ざしている。ある一定の様式で配置された一定数の個人からなる民族が存在すれば、そこからは特定の集合的な観念や慣行の全体が生まれてくるが、それらは、依存している条件そのものが変わらない限り変化しない。実際、民族を構成している個人の数の多少に応じて、またそれがどのような設計によって組織化されているかに応じて、必然的にその集合的存在の性質は変わり、従ってまた、その思惟様式や行動様式もそれに応じて異なってくる」(374:446)。それ故、自己本位主義とは、簡潔に言えば、社会集団が解体の危機に瀕し、しかも新しい社会関係の確立がなおざりにされた時に生ずる、集合的道德秩序の動揺状態を指す。別の表現をすれば、それは、「表象的機能の上に作用」(368:440)した社会の解体現象である¹⁹⁾。

デュルケムは、この点を実に多様な形で表現している。例えば、自己本位主義は、「過去の諸制度を根こそぎにすることはできても、それに代わるものをもたらしことのできない病的な動揺」(350:423)である、と言われる。この場合、制度とは、最も広義に理解されねばならない。それは、生活の中で我々の行為を導いてくれる「社会的本能」(110:171)ないし「既成の習慣」(98:158)と同義である。従って自己本位主義とは、「それまで支障なく行為を導くことのできた無反省なある観念や感情が、その効力を失ってしまった」(98:158)状態を指す。このような集合的な観念や感情は、「通念」、「社会全体に共有されている観念」、「世論」などとも呼ばれる(98:158)。こうした多様な表現を総合的に考慮するならば、我々は、デュルケムがこれらの表現の根底において考えていたものを次のような現象学の術語によって翻訳できる。すなわ

ち、自己本位主義とは、生活世界の崩壊であり、また、そこでの生活様式に根差す「相対的に自然的な世界観」の失効である。次に我々は、このことを別の視点から裏付けよう²⁰⁾。

デュルケムにあっては、社会統合は、社会的連帯および社会的凝集と同義語である。社会的凝集は、差し当たり、社会の密度の高いことと考えられるが、しかし社会成員が単に空間的に共存するだけで、集合生活に参加していなければ、それは凝集とは言えない。しかしさらに、集合生活への参加だけでなく、role-distance (P・バーガー) に陥っている者も、行なっている。問題なのは、外面的行為ではなく、内的コミットメントである。それ故デュルケムにとっては、社会的凝集は、社会成員間に、共通なものがどれほど広汎かつ強固に内在化されているかに、よってもってかかっている。具体的に言えば、社会統合とは、集合的な信念や行動様式が共通の価値として分有されていることであり、それによって成員相互が内的精神的に連帯・結合していることである。これこそ、「世界観」の共有に他ならず、従って自己本位主義は、その反対である²¹⁾。

Ⅲ. 自己本位主義と生活世界の危機

さて、自己本位主義が生活世界——生きることに意味を与えてくれる秩序立てられた現実——の崩壊であるという主張は、個々の具体的な点において検証されなければならない。まず、社会のあり方と社会の意味構造との関係に、論議の焦点を絞ろう。

シュッツによれば、日常生活上の諸問題がこれまで有効であった仕方によって従来通り処理され、社会生活がこれまでと同じように今後も円滑に続くであろうと考えられる限り、世界観は自明視され、その効力を維持できる。言い換えれば、自らの生活世界の意味構造に関して、敢えて問いが提起されるには、特別な動機づけが必要なのである。例えば、動機づけとして、急激な社会変動が挙げられる。確かに、社会が変動しようとも、成員は変化と共に生活しており、世界観に改訂を施して変化に適応する。社会変動によって生ずる未知な、

それ故日常的知識の外に存在する事柄に出会えば、人々は探索を開始する。まず新しい事象を規定することから始め、その意味を把握し、それから——未知の違和的な事象とその意味を、これまでに経験してきた事象とその意味に照らして、両者が共に成り立ち、首尾一貫するように——世界解釈の一般解釈図式を徐々に修正し整えて行く。これに成功すれば、それまで違和的で理解不能であったことが、検証済みの知識の構成要素に変わる。知識の集積は、このようにして拡大され、再構造化される。この場合、内集団のあり方は変わっても、それは依然として内集団であり、人々は特定の生活世界の中で生きている。とはいえ、変化に対する適応が成功するという確証はなく、ただチャンスがあるにすぎない。深刻な変動が余りに短期間に生ずるなら、先行者が長い年月にわたって築き上げたものをごく短時間に改訂することなど、できようはずもない。外的環境が変わったからといって、これまで学習してきた解釈・志向図式が魔法のように消え失せ、別人に変身できるものでもない。このような場合、人は、従来の準拠図式が及ばない別の社会的次元に足を踏み入れてしまっており、そこでの新しい経験は、もはや旧来の準拠図式の内に統合されるべくもない。この時、人は、物事は従来考えていたのとは全くかけ離れていることを発見し、それは自明視していた世界観の妥当性への信頼を揺がすことになる。シュッツはこれを「危機」と呼ぶ。この危機は、個人の主観的意味構造の上に作用し、個人的レベルにおける自己本位主義の顕著な二特性となって現われる。

(ア) 志向図式の危機　それまで自明であった世界のごく僅かの構成要素が疑問視されるなら、危機は部分的であり、準拠図式自体が無効とされるようだと、それは全体的危機となる。自己本位主義において問題となるのは、言うまでもなく、後者である。危機において人間は、「日常的思考」の限界を垣間見るといふ、苦い経験を味わう。この経験から、人間は、習慣的な生活様式に浸っている内集団の成員には見過ごされてしまうものに、すなわち、通常的生活様式が見た目よりもはるかに頼りがいのないものであることに、慧眼にも気づく。こうして自明の解釈図式は、全面的に突き崩されて行く。そして解釈図式の無効化は、とりもおさず、志向図式の喪失を意味する（第一章参照）。

人間は行為を導く規準を失い、文化パターンは、検証済みの処方箋体系としてもはや機能しなくなる。デュルケムが自己本位主義の特性として剔出した、生の方向感覚の喪失は、ここにその淵源を有する。さらにまた、活動へのあの著しい無気力の原因も、ここにある。志向図式とは、語の定義からしても、何が活動の目標となるべきかを見定める基準である。すべての行為は、選択するということを含んでいるが、選択とは、目標と手段の見定めである。自己本位主義者には、それができない。つまり、彼には、そもそも何も欲することができない²²⁾。こうした自己本位主義の状態を、宮島喬は、有意味的連関を見失ってしまったアイデンティティの危機と呼んでいる²³⁾。これは、極めて的確な指摘である。というのは、客観的意味構造の内在化とアイデンティティの確立とは、同一現実の異なる二側面だからである。現象学は、以上のこと全体を次のような簡潔な形で表現した。「我々は、……常に受動的な世界保持を基礎にして、能動的なのである」²⁴⁾。

(イ) 知的反省の発達 デュルケムによれば、自己本位的自殺は、知識の発達と歩を合わせて増大するのであり、従って知的反省の発達は、この自殺のタイプの顕著な特性をなす。そして知的反省が要請される原因は、「それまで支障なく行為を導くことのできた無反省な観念や感情が、その効力を失い」、「既成の習慣がくずれ」てしまったことに求められる²⁵⁾。要するに、「漠然とした〔＝意識されず、明示的でない〕慣習がもはや新しい必要に応じえなくなるや否や、人々は理性の光を求める」(102:162) ようになり、ここに批判的反省が開始されるのである。

日常生活においては、人は通常、自分の歩みがどこに向かっているかを不安気に自問したりしない。この場合には、「伝統が知性の上に君臨して」(102:162) おり、それで万事こと足りている。一般的に言って、思考は、問題解決の一手段であり、それが必要とされる限りでしか、人々は通常思考しない。逆に言えば、人間が思考するのは、自分にとって問題的に思われる事態によって自分の日常生活が攪乱され、社会的経験の円滑な流れが遮断された時である。人間は、限界に突き当たれば、自省へと導かれざるをえない(cf. 225:325)。

「危機」は、まさにこのような限界である。行動や解釈の伝統的・習慣的パターンがもはや状況に適用不能であることが判明する時、これまで自明とされてきたものが、疑問にさらされる。具体的に言えば、自分のこれまで持っていた文化パターンは、信頼できる拠り所であるどころか、自分歩みの一步一步において、細心の検討を要するものとなり、終いには人は、文化パターンのあり方（どうなっているか）ばかりでなく、根拠（なぜそうなのか）についても、明示的な知識を要求するに至る。バーガーは、適切にも、こうした状態を「故郷喪失」と呼んでいる²⁶⁾。そして彼は、近代のアイデンティティの特異性として、異様に反省的であることを挙げる。「統合され、動揺していない社会的世界に住んでいるのであれば、人はいささかも反省なぞせず、生きて行ける。その時には、社会的世界の基本的諸前提は、自明のものと受けとられる。……〔しかし〕近代社会は、個人に決断と計画を強制し、……反省を強いる。世界も自我も、ともに徹底的な注視と、時には苦悩に満ちた詮索の対象となる」²⁷⁾。

動機論的側面からの『自殺論』の再解釈として語られるべきことは、もうあと僅かしか残っていない。それを論ずる前に、生活世界の崩壊の社会的（下部構造的）要因として、デュルケムがなおどのようなことを念頭に置いていたのかを考察してみよう。

Ⅳ. 生活世界の複数化と「危機」

デュルケムは、近代においては「一層完璧な分業と、それに伴って生まれた一層複雑な協業が、職業を無限に増加させ、多様化し」（372：444）たことを認める。ところが、彼にとっては、こうして進められた社会的分化は、正常とされる域を越えていた。つまり、部分が全体における一機能を代表しつつ、全体が統一を保つという状態（378：449）が、そこにはなかったのである。このようなことは、環節的社会では決して起こらなかった。そこでは、全体社会は、環節を大きく引き伸ばした再現にすぎなかったからである。ところがもはや、全体の統合は存在しない。「社会の規模とその密度が増せば増すほど、社

会は一層複雑化し、分業が進み、個人間の差異もいよいよ増大するようになる。やがて、同一の人間集団でも、全成員の間に、〔異質化が進んで〕皆が人間であるということ以外に、もはや共通点が何一つないような時期がやってくる」(311:382)。無論、この共通性が価値として信奉される場合には、新たな連帯が形成される、とデュルケムは考えた(『社会化された個人主義』——宮島喬)。しかし、それは理想にとどまり、現実には成員間の異質性だけが残ったのである。自己本位主義の苗床が、ここにあるように思われる。

シュッツによれば、近代社会の一つの特質は、自分たちの生活世界についての十分な理解がさまたげられるようになった点にある。知識の社会的配分が、近代と前近代とでは、大きく異なるというのである。内に分化を含まない社会が存在しない以上、前近代社会といえども、生活世界の異質性は、常に存在した。とはいえ、前近代社会にあっては、「社会生活の諸セクター間にどのような相違があろうとも、それらは、それらすべてを包み込む統合的な意味秩序の中で『辻褄が合って』いた」²⁸⁾。同一の統合的シンボルが社会の全体に浸透し、人々は同一の世界に住んでいたのである。ところが分業の極端な複雑化と共に、社会生活の各セクターは、部外者には理解不能で、異質な生活世界を築き上げて行った。バーガーは、近代社会のこうした細分化・異質化を生活世界の複数化と呼ぶ。ところで、デュルケムにとっても、シュッツにとっても、知識の権威とそれに対する確信の強さは、社会的承認に由来する。しかるに複数化現象の伸展と共に、人は、自分の信じるものを信じない他人や、自分のとは異っていたり、相反しさえする意味・価値・信念のもとで生きている他人と接触せざるをえなくなる。極端な言い方をすれば、近代社会は、マージナル・マン同士の単なる空間的共在体となってしまった²⁹⁾。このようにして、統一性に欠ける断片的世界観(客観的意味体系)は、相対化され、信頼しがたい不安定なものとなって、説得力を失って行く。

こうして生活世界の複数化から「危機」が生ずる。それがどのようにして自己本位主義として現出してくるかは、前章で見たとおりである。バーガーたちが近代社会の特質として明示的に描き出したものは、既にデュルケムによって

先駆的に注視され、考察の対象にされていたと考えられる³⁰⁾。

V. 最後のあがき

さて、我々は論議を再び、「危機」とそこから生じてくる知的反省の発達という文脈へと戻そう。「危機」において生の方角を喪失し、この空しい世界における一切の意味に絶望したからといって、人はその状態に甘んじてはいないし、少なくともラファエルやルネのような尖鋭的な自己本位主義者が顕在的な自殺志願者となるまでには、なおもう一つの最後のあがきが必要である³¹⁾。

(ア) 唯一の関心事 「危機」においては、人は、自分で自分の目的と手段を選ばねばならず、旧来の権威とその指導に頼ることは、もはやできない。意味構造は、もはや社会的に与えられるのではなく、個人的に獲得されねばならない。人は、生に意味を与えてくれる永続的・理想的存在を全く新たに創造すべく(256:327)、否応なく自己の主観性へと引き戻される。デュルケムの言葉で言えば、生活を導いてくれていた権威が失われ、それに代わるものを求めようとすれば、「人々に残される唯一の案内人は知性だけ」(110:171, cf. 102:162)となり、人々はそれによって主観的意味構造の再建を計らなければならないのである。ラファエルの極端な自己集中、内面への沈潜は、ここから生まれる³²⁾。こうして、自己本位主義者にとっては、——パウロが、十字架にかけられたイエス・キリスト以外のことは何も知るまいと心に決めたように——自己および世界の存在理由と意味とを探究することが、全生活の唯一の関心事となる³³⁾。彼は、人間と宇宙の新しい深遠な調和、自己と世界の全的で真実の関係を要求するのである。

ところで、自己本位主義者のこうしたあり方こそ、ウェーバーが預言者的体系構成、および就中、知性主義の救済要求と名付けたものに他ならない。彼によれば、預言者的体系構成とは、「世界に対する人間の関係を、究極的にして一元的な価値設定から統一する」³⁴⁾ことである。宇宙は、意味深く秩序づけられた全体を形成しており、従って生と世界、社会的事象と宇宙的事象は、体系的に統一された一定の意味を持つ。そして人間の行動は、この意味に定位され

ねばならないのである³⁵⁾。しかしこれは、一つの積極的な生活態度であり、それに対して知性主義は、人間のネガティブなあり方を示す。それ故、この方が一層自己本位主義と連関する。知性主義の救済要求とは、「特に精神の形而上学的要求であって、……世界を一つの意味深いコスモスとして捉え、そのコスモスに対して自らの立場を確立するという、自己の内的要請」³⁶⁾を指す。

「知識人が求める救済は、いつも『内面的困窮』からの救済であり、……知識人は自らの生活態度に一つの一貫した『意味』を与えんとする」³⁷⁾。世界の諸事象が、単に存在し生起するだけで、それ以上の何ものをも意味しなくなるにつれ、「世界と『生活態度』に対する要請は、これらが常に一つの全体として有意義にかつ『意味深く』秩序づけられるべきであるという方向に向かって、一層切実なものとなる」³⁸⁾。問われるべきは、このような要請は成就する見込みがあるのか否か、ということである。

(イ) 功利的個人主義 さて、相互主観的な世界が崩壊して行くならば、そこには、相互に孤立し、通底項のない個人だけが残されて行く。デュルケムが自己本位主義の特徴として、「常軌を逸した個人化」³⁹⁾を挙げるのは、このためである。従ってまた、バーガーが近代的アイデンティティの特質として、それが異様に個人化されている点を挙げているのは、当を得ている⁴⁰⁾。ところで、この個人化が社会化されるならば、換言すれば、個人そのものが共通の規範的要素として崇められる場合には、そこに一種の「市民宗教」が生まれ、近代社会特有の新しい連帯が生ずるはずであった。しかし実際には、個人化は功利主義的なものとして出現する。我々はさきに、人は「危機」においては、意味構造を個人的に獲得せねばならず、そのために自己の主観性に引き戻される、と述べておいた（デュルケムはこれを「道徳的個人主義 [=個人の知的反省による規範体系の再構築]」（109：170）と呼ぶ）。ところがここでは、社会的なものは既に消失しているのであるから、人は「この世に個人以外に何ら現実的な (réel) ものを認め」（176：243）えない。R・ベラはいみじくも、「功利主義的個人主義にとっては、究極的な存在論的实在 (reality) は、個人である」⁴¹⁾と言った。かくして「危機」の内にいる人間は、生活を津すべき行為準

則を自らの主観性ないし知性によって打ち建てようとする時には、「私的な利害関心に基づく行為準則以外の準則を認めなくなる」⁴²⁾。それでは、私的な利害関心に基づく行為準則は、実際に行為準則として機能するであろうか。ここに問題がある。

『自殺論』の中には、読みようによっては、この問いを肯定しているかのようには読める箇所がいくつかある。例えば、肉体的生命の維持は、個人にのみ関わりをもつ活動であり、それだけで自立し、充足しているなどと言われ (159 : 226)、純粋に個人的欲求にのみ由来する行為がありうるかのような主張がなされている⁴³⁾。しかし、こうした考え方は、功利主義的であり、総体主義 (ホーリズム) の立場に立つデュルケムの思想とは、全く相容れない。彼の立場は、人々が功利的 (とりわけ功利的経済的) に行為するのは人間にとって「自然」であるという、人間に関する古典経済学者の存在論的信念と真向から対立する。確かにデュルケムも、私的利害の充足に快が伴うことは認めているように思われる。しかし彼は、それが行為の一貫した動機づけになるとは考えない。そのためには、人は自分の行為の虚しさを感じることができないほど盲目的になっていなければならない。彼によれば、人は行為することにいかなる快感を覚えようとも、その上になお、自分の行為が無駄・無意味ではないことを感じていなければならない (204 f. : 274)。私的な利害関心が到達できるのは、せいぜい欲しいもの (the desired) であって、望ましいもの (the desirable) ではない。そして望ましさを規定するのは、デュルケムにとっては、社会の規範体系であるが、それは個人的傾向には全く由来しないのである。

再び、本稿の理論的枠組に戻って、この点を考察し直してみよう。個々の行為は、全体的な意味連関の中で初めて意味づけられる。ところが、それが見失われる場合には、個々の行為は、それ自体として意味を持つのでなければならない。あるいは、私的利害が行為に意味を与えるというのであれば、私的利害は単独で有意義なのでなければならない。しかしそれらはいずれも、実際にはありえない。個々の「欲求」は、全体的な志向図式によって方向づけられ、その中で初めて欲求として発動する⁴⁴⁾。デュルケムの言葉で言えば、規範は、

欲求を抑制するばかりでなく、それを型取り、喚起するのである。私利私欲に適合する行為が是認される時には、それは全体的な地平との連関においてである。従って、全体的地平なしには、個人は私利私欲に基づく行為準則に意味を見出すことができず、また、それは行為準則として機能することもない。

(ウ) 挫折と希死念慮　かくして、自己本位主義者が実践的な諸行動を一つの生活態度へと統括しようと試みても、それは徒労に終わる。それに加えて、主観的意味構造を再構築しようとする自己本位主義者の企てが失敗に帰ざるをえない理由として、デュルケムは、なおいくつかの点を考慮に入れていたように思われる。まず第一に、反省は人間を一層孤立させる、という点が挙げられる。自己本位主義者の「意識は、周囲のものをすべて遠ざけ、自らについて反省をめぐらし、自己をその固有な唯一の対象とし、これを観察し、分析することを主たる務めとする。しかし、この極端な自己集中の結果、意識は、自らと自余の世界の間を隔てている溝を一層深くするばかりである。個人がこの点で自分自身の虜になるや否や、彼はひたすら、自分自身でないすべてのものから今まで以上に身を遠ざけるようになり、自分が過ごしていた孤独状態をさらに強めつつ、それを神聖視する」(242:314)。社会的連帯の弛緩は、人に極度の知的反省を強い、それが翻って、他者に対する関与の破棄へと人を差し向ける。孤立が偏狭な内面集中を招き、それが孤立をさらに強化する。三つの項が、地獄の弁証法の中で互を支え、強め合うのである。

次に挙げられるべきは、生活と思维的思惟の関係についてのデュルケムの考え方である。彼によれば、「人間が反省的意識によって到達するような決定は、往々にして全く表面的なものにすぎず、それは、意識されない理由によってそれ以前になされていた決心をさらに固くすること以外の目的を持たない」⁴⁵⁾。つまり、概して言えば、思惟が生活を反映し、それを明示化することがあっても、思惟それ自体が生活を導き、それを形成するのは、ごく限られた範囲でしかない。従って、現に社会的に営まれている生は、それを正当化する世間の人々の論法がどれほど疑わしくとも、やはり正当化されえようし、それに対する人々の信念は、たとえその非妥当性が思维的に証明されようとも、

くつがえされることがない (110:171)。こうしたデュルケムの考え方の根底には、その論理的内包として、意味構造は妥当性証明を通じて個人的に構成されるのではなく、むしろ伝統としてたたき込まれるのであり、純粋なゼロ点から意味構造を創造するのは抽象的思惟の能力を越えている、という考えがある⁴⁶⁾。

最後に指摘されるべきは、自己本位主義者の懐疑の特異な性格である。本来、通常ならば、疑うということは、信ずるということを前提として初めて成り立つ。ところが、自己本位主義者の懐疑は、「すべての事柄に問いを発」し、「それを越えると自壊を起こさざるをえないような正常な限界をも踏み越える危険にさらされている」(246:317f.)。彼の反省は、積極的な思惟内容と対象とを失い、懐疑の深淵に落ち込むおそれがある (246:318)。デュルケムによれば、このような状態にあること自体が、既に否定的な解決 (=自殺) に傾いていることを意味するのである。かくして我々は、P・ティリヒの次の言葉によって、以上の議論を要約することができよう。「[個々のものに意味を与えてくれる] 精神生活の中心は、故意に造り出されるわけには行かない。強いてそれを造り出そうとする試みは、一層深刻な不安を生み出すばかりである」⁴⁷⁾。

自己本位主義者といえども、生に何らの希望も抱かぬわけではない。それは、いつの日にか生の真実に到達し、真理に即した生をわが手にしかと握みうる、という希望である。これがどれほどかすかな望みであろうとも、一時的にせよ人を支えてくれるということはある。「しかし、希望も、繰り返し経験によって裏切られた後には、限りなく生き続けるわけにも行かない」(205:274)。いつまでたっても生の充実に到達しえず、ほの見える理想にも近づきえない時、未来の展望は次第に閉ざされて行く。無益に存在し続けること、毎日ただ待ち続け、しかもそれを絶えず繰り返し、変わるという見込みも全然ないことは、人間を疲れ切らせる。「果てしなく何かを追い求めることは、いつかは空しいことと感じられるようになるので、つのる疲労は、それだけでも幻滅を招くのに不足はない」(216:285)⁴⁸⁾。生きるも無意味、死するも無意味、

すべては虚無だと感じている生に、もはや何ものも人を引きとめない。いつ果てるとも知れない生の意味の探求は、生を疲弊させ、やがては生の終末を心地良いしとねとして夢想させるようになる。この時、死は誘惑となる。「生は、私にはもはや余り快いものではなかった。それは私には増々色褪せたものに見えた。一切の未来が閉ざされたように思われた。……〔私は〕永遠なる休息の願望へ傾いて行った。……私は死を愛していた」⁴⁹⁾。「私があればこれ思い悩んできたことに、終わりがきたような感じがしました。私はもはや存在しなくなり、私の心はもうこれ以上痛みを覚えることもなくなるのです。光が見えてきたようでした」⁵⁰⁾。確かに、希望は生への絆となりうる。しかし幾多の挫折を経て、それは次第にか細いものとなって行く。かくしてデュルケムは、年令と自殺率との相関を次のように説明する。「人は齢を重ねるにつれて増々自殺しやすくなるが〔＝自殺へ駆り立てる集合的な力に敏感になるが〕、それは多分、自己本位主義的生活の全き空しさを身に沁みて感じるためには、幾多の経験を繰り返さなければならないからである」(297:368)。J・ヒントンの次の言葉は、ここでの論議にとって示唆的である。「死がもたらしてくれるかも知れない平安のことを考えるのは、自己自身に不満を抱き、日々の生活に満ち足りず、しばしば自己の内的葛藤に疲れ果てた人々である。しかし、死を受容しているように見えても、それはしばしば見せかけである。死の安楽を喜んで受けとろうとしていても、その安楽は、挫折という代償の上に成り立つ平安なのである。闘いを放棄したいと望んでも、この闘いは生における一層の充実を求める熱い願いから生じてきたのであるから、それは死ぬことによって叶えられない。辛い仕事からの休らいは、望ましいものではあろう。しかし死は、多くのことを道半ばにして、多くの志を果たされぬままに、打ち捨ててしまう。希望がすべて捨て去られる場合にのみ、人は絶望的に死と挫折を甘受しようとする」⁵¹⁾。

生のこうした状況に置かれる時には、僅かでも落胆を招くようなことがあれば、自己本位主義者は容易に絶望的な決断を下してしまう(162:228)。「生活の中での不満は、いかに些細なものであれ、いつ生を耐え難くしてしまうか予

断を許さない」(264:334)。生が耐える労苦に値しないとなれば、生を放棄する口実には事欠かないからである(162:228)。従って、「どんな事柄であれ、自殺への誘因になりえないものはない」(266:337)。それどころかすべては、たとえ最も相反するものでさえ、等しく自殺の口実になりうる(264:334)。自己本位主義者は、いわばダモクレスの剣の下に生きており、それを吊るす糸はか細く、いつ切れるとも知れない。彼が外部からのごく軽微な打撃にも容易に押し潰されてしまうのは、このためである(164:230)。無論、彼の悲哀の一部は、あれやこれやの外的出来事からももたらされる。しかし通常ならば、人はそうした不運に耐えるのであり、不運が人から何を奪おうとも、生から一切が失われるわけではない。ところが、自己本位主義者には肝心のものが欠けており、それ故、他の何が与えられようとも、彼の生は依然として空っぽなのである。彼の悲哀の源は、彼の内側にある⁵²⁾。

自己本位主義者は、自己の生活を導き、充実させてくれる真理、それによって生き、そのために死にたいと希う理念をおのが手にしうる明日に希望を託して生きる。こうして見果てぬ夢を見続けるうちに、自己本位主義者は、まだ遠い先のことのように考えていたあの終りの日に、一步また一步と近づいて行く。多分、彼の希望には、何年もたってから、恐らく老人になってしまった時に、一つの返事が与えられる。彼は、万事はだめになってしまった、おまえの一生はむだだった、ということを聞くのである。

ところで、社会的「大量」現象としての自己本位主義が特定の社会構造に由来するとしても、すべての自己本位主義がそうであるわけではない。そのことは、デュルケムも知っている(242:314)。それは、何時、何処でも生まれる。そして真の自己本位主義者は、本稿がなしたように、自己本位主義の発生過程を社会構造および客観的意味構造との連関で学問的に解明するなどという、愚劣な行為を決してしない。彼は、自己の悲しみをただ詩に結晶させるの

みである。詩聖は、凡そ人の口が発しうる言葉のうちで最も美しい言葉を語り、それを人類の記憶に永劫に刻み込んだ。

明日が、その明日が、そのまた明日が一日一日とゆっくり過ぎて、やがては時の最後に行きつくのだ。昨日という日はすべて、馬鹿者どもが塵にまみれた死にいきつく道を照らしてきた。消えろ、消えろ、はかない灯の光！人生は歩く影法師、あわれな役者だ。束の間の舞台の上で、身振りよろしく動き廻ってはみるものの、出場が終れば、跡形もない。白痴の語るお話だ、何やらわめき立ててはいるものの、何の意味もありはしない。

(註)

- 1) D. LaCapra, *Emile Durkheim* (Ithaca and London : Cornell University Press, 1972), p. 144. cf. W. Pope, *Durkheim's Suicide* (Chicago: University of Chicago Press, 1976), p. 9.
- 2) 中村一夫『自殺』紀伊国屋書店、一九八〇年、一〇三頁以下。
- 3) 『自殺論』第二編第六章では、いくつかの文学作品を手掛かりとしながら、自殺の形態論的分析が心理的次元で企てられている。
- 4) A. Schutz, *Collected Papers I* (The Hague : Martinus Nijhoff, 1962), p. 279.
- 5) id., *Collected Papers II* (The Hague : Martinus Nijhoff, 1971), p. 121. 桜井厚訳『現象学的应用』御茶の水書房、一九八二年、四八頁。(引用参照文献中、邦訳がある場合には、なるべくそれを参照し、尊重したが、適宜私訳を施した。)
- 6) E. Durkheim, *L'éducation morale* (Paris : Presses Universitaires de France, 1974), p. 35. 麻生誠ほか訳『道徳教育論・1』明治図書、一九七九年、七四頁。
- 7) R. Aron, *Main Currents in Sociological Thought II*, transl. by R. Howard et al. (London : Weidenfeld & Nicolson, 1968), p. 32f. J. Duvignaud, *Durkheim* (Paris : Presses Universitaires de France, 1965), p. 16.
- 8) E. Durkheim, *Le suicide* (Paris : Presses Universitaires de France, 1983). 宮島喬訳『自殺論』(『世界の名著・五八』中央公論社、一九八〇年所収)。『自殺論』からの引用等は、原語を示す必要がある場合や、引用参照箇所が多数にのぼる場合などを除いて、() に括って本文中に挿入する。宮島訳は大変優れており、その頁数を示しておいた方が適切であると考えた。() 内の数字は、最初のものが宮島訳の頁数を、コロンをはさんでイタリック数字が原書の頁数を表わす。

なお、原因論的観点からしても、自己本位主義がアノミーより重要な概念であると考えerべき十分な理由がある。しかしこの点に関しては詳細な論議が必要であり、それをすれば本稿の論題から大幅にそれてしまうので、機会を改めて展開したい。

- 9) *mélancolie* (177, 255 : 243, 325), *langueur mélancolique* (242, 248 : 314, 319), *mélancolie paresseuse* (261 : 332), *triste* (337 : 410).
- 10) *morne abattement* (177 : 243), *dépression générale* (248 : 319), *dépression* (334 : 406), *déprimé* (337 : 410).
- 11) *lassitude incurable* (177 : 243), *langueur et ennui* (334 : 406).
- 12) *apathie* (261, 334 : 332, 406).
- 13) 「方向」の原語は, *orientation* (357 : 429), *sens* (372 : 444).
- 14) 「目的・目標」と訳した語は, *but* (160 f., 176, 357 : 227, 243, 429), *fin* (161 : 228), *objet* (160 : 227) である。*objet et signification* が見失われている, という表現もなされている (218 : 288)。
- 15) R.K. Merton, *Social Theory and Social Structure* (New York : The Free Press, 1965), p. 97. 森東吾ほか訳『社会理論と社会構造』みすず書房, 一九七七年, 八九頁。
- 16) H.S. Hughes, *Consciousness and Society* (London : Macgibbon & Kee, 1959), p. 283.
- 17) *constitution morale* (266, 272, 344 : 336, 343, 417), *organisation morale* (343 : 416).
- 18) 281 : 352. cf. H.S. Hughes, *op. cit.*, p. 283.
- 19) 道德構造上の現象を上部構造上の結果と考えるならば, それと対比して, 社会構造上の危機を下部構造的な原因と称することができよう。デュルケムは, 自己本位主義を発生させる下部構造的な原因について, 多くの箇所さまざまな表現によって論及している。それを考察しようとするれば, 我々は歴史学の領域に足を踏み入れることになり, 本稿の範囲を越えてしまう。従ってここでは, それを割愛し, 機会を改めて論ずることとする。こうしたやり方は, デュルケムを非歴史化する釈義であるとして, 批判されよう。しかし本稿は, 『自殺論』を哲学的側面から一般化して解釈することが無益であるとは考えない。
- 20) 宮島喬『デュルケム自殺論』有斐閣, 一九八四年(本稿は多くのものをこの書に負っている)によれば, 自己本位的なプロテスタントの宗教生活は, 「既成の習慣や蒙昧な習慣が合理的精神の前に後退していくことによって, 登場してきた」(同書七六頁, 傍点引用者)。宮島の論旨全体は, 首肯されるべきなのであるが, それにしてもこの発言自体は, 余りにも不用意である。「世界観」は, 合理的・論理的な妥当性証明を通して獲得されるのではないし, またそれによって反駁されうるものでもない。少なくともデュルケムによれば, 前述したように, 一民族の精神体系が別の精神体系——それがどれほど合理的であろうと——それ自体に駆逐されることはありえないのであり, それが変化するには, それが依存している条件そのもの

が既に変化しているのでなければならない。

ところで、デュルケムのこの考え方は、翻ってデュルケム自身にも批判的に向けられねばならない。というのは、彼は、カトリック社会とユダヤ教社会の統合の強さを、基本的には、カトリックおよびユダヤ教それぞれの宗教としてのあり方自体のうちに求めているからである（97-100：157-160）。

プロテスタントが自由検討を認めているのが、社会的状況の反映であるならば、カトリックが従来通り無批判的に受け容れられているのも、何がしかの社会的状況と対応しているのでなければならない。カトリックという伝統的信仰体系が動揺せずにいたのは、実は、それが依然として生活世界の象徴的世界 (symbolic univers — P. バーガーと Th. ルックマン) として機能しえていたからであると考えられる。とすれば、カトリック社会の統合は、根本的には、生活世界そのものの統合に由来することになる。

プロテスタントにおいては、自由検討を教義上認めたから、信仰が動揺したのではないし、信仰に批判的反省を加えるようになったのでもない。それと同様に、カトリックにおいても、「信仰が相変わらずの強さで課されていた」(98：157) から、あるいは、「自由検討に反するような……行動様式や思考様式が数多く存在する」(99：159) から、あるいはさらに、「伝統を不易のものとすべく、教権の階級組織の体制が実に巧妙に組織されている」(97：157) から、信仰が揺らがなかったのでもなく、「原典（の解釈）が禁じられているため」(97：157)、信仰に批判的反省が加えられなかったのでもない (cf. 358：430)。「自由検討そのものは、ある別の原因のもたらした結果にすぎない」(97：157) ように、「極度に発達した伝統主義」(101：161)、つまり義務的強制的な信仰と儀礼も、別の原因の結果である。「たとえ人々を人為的に束縛してみても、彼らの独立への欲求を忘れさせることはできない」(111：172) のである (cf. 354：420)。

- 21) デュルケムによれば、諸個人間に絶えざる接触がある時には、「意見や心象」(147：214)、「観念や感情」(157：224) の活発な交流と伝達となされ、それが集合的状態の活性化を促す（この状態こそ、社会の統合である）。ここで我々が「世界観」という言葉を持ち出すとすれば、日常生活で世界観の交換・伝達など実際になされているのか、という疑問も生じてこよう。しかしそれは、世界観概念の誤解に起因する。確かに、自然的態度の内にある人間が世界観を明示的に表明したりすることはない。とはいえ、どれほど些細な行為や言葉のやり取りでさえも、世界の現実を確認し直し、再確認し合う機会となる。すべての個別的経験において、全体世界は共に経験されているからである。
- 22) デュルケムは（そして筆者の知る限り、後のデュルケム研究者もすべて）シャトブリアンのルネをアノミー類型に分類している（もっとも、デュルケムはアノミーと自己本位主義との接触領域ヘルネを入れている、と思われる箇所もある (253：324)）。この位置づけは、ルネ研究としては、話にならない。ルネは、見ま

ごうべくもなく、自己本位主義者である。ルネの欲求は、充たされることがない。しかしそれは、欲求がまずあり、しかるにそれに適合した手段がない（アノミー）、ということによるのではない。たとえ欲求が充たされたように見えても、そうした欲求充足には何の意味もないということを、ルネが感じとってしまうからなのだ。彼は、真に欲求すべきものを知らない。従って、手段の点でどれほどよい条件下にあらうとも、彼は決して満たされることがない。否、他のどのような欲求が現実には満たされたところで、彼の存在は満ち足りていない。外面的にはどれほどの幸運に恵まれようとも、彼の生は、原理的に充実されえない。彼のうちには、人が生を営む上で、大切なものが欠けている。確かに、彼には活動的側面があり、彼はあらゆることを試みる。しかしそれは、さまよえる青春が自己の存在理由と意味とを探し求める絶望的な挑戦に他ならず、結局ルネは一切において挫折し、疲弊して、すべてに対して意欲を失う憂鬱な人間となる。彼は明確な欲望を持ち、その追求に疲れた人間ではない。彼は、何を望んだらよいのか、何を欲すべきかを知らない、典型的な意味喪失・価値喪失者である。

欲求が欲求として完全でありうるためには、そこには、明確な対象と堅固な意志という二つの要件がなければならない。ところがルネの、あるいは一般的に言って自己本位主義者の「欲求」は、全く不確定な性質を持っている。それは、存在しないものへの欲求であるから、半ばだけ構成されたものにすぎない。それは、言うならば、どれほど熱いものではあっても、漠然とした一種の詩情的な憧憬であり、生に意味と方向とを与えてくれそうな理想的存在、つまり想像が作り上げたものしか対象とすることができない。ルネのさまざまな試みは、活動というよりも、むしろ、真に活動的で確たる目標を持った生活に向かおうとする途を探し求め、しかもまだそれを見出しえていないという内面的な動揺でしかない。従ってそれは、最も強い場合ですら、堅固で明確な欲求の力というものを持つことができないのである。

- 23) 宮島喬, 前掲書, 九六頁。なお, P. Berger et al., *The Homeless Mind* (New York: Vintage Books, 1974), p. 77, 高山真知子ほか訳『故郷喪失者たち』新曜社, 一九八〇年, 八五頁以下に展開されている, 近代的アイデンティティの異様に未確定であるという特質は, ここでの議論と緊密に関連すると思われる。

- 24) E. Husserl, *Husserliana VI, Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie* (Haag: Martinus Nijhoff, 1962), S. 110, cf. S. 145 f. 細谷恒夫ほか訳『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社, 一九七九年, 一五〇頁, 参照一九九頁以下。

我々は、「自己本位的自殺が抑止されるのは、人々が社会化されている限りにおいてである」(360:432) というデュルケムの発言をこのような連関で読まなければならない。

- 25) 97-99:157-159. さらに110:170f. などを参照せよ。

- 26) P. Berger et al., *op. cit.*, p. 82. 高山ほか訳, 九一頁以下。「近代人は、深まり行く『故郷喪失』状態に苦しんでいる。……このような状態に耐えるのが心理的に困難であることは、言うまでもない」。
- 27) *ibid.*, p. 78 f. 高山ほか訳, 八七頁以下。
- 28) *ibid.*, p. 64. 高山ほか訳, 七一頁。
- 29) 我々がここで、社会生活の細分化が生活世界に固有な世界観の異質化をおし進め、その統合を困難にしていると言う時、我々は、叙述の簡潔さを重んじたために、余りにも図式的になりすぎた嫌いがある。同一集団内の諸生活世界がどれほど異質化しようとも、そこにいかなる通底項もなくなるということは、ありえまい。さもなくば、そもそも言語すら存在しなくなり、人間は単なるヒトになってしまう。だから、例えば、「庭に桜が咲いている」という認知は、依然共通してなされるであろう。おそらく問題は、世界観がどのような構成要素から成っており、それらがどのように組織されているか、に関わる。世界観の複数化は、多分、「意味の二次的対象化」（バーガーとルックマン）に関係しているのであろう。つまり、諸々の意味を統合する高次の意味の体系の不在・欠如が、問題になるのであろう。
- 30) 周知のように、ポープ(W. Pope, *op. cit.*) は、宗教と自殺との相関の背後に、文明の水準という別の変数があると提唱した。バーガーの主張を念頭に置けば、文明の水準と社会の多元化との間にどのような関連があるかは、興味ある問題であるように思われる。
- おそらく、いかなる単一原因論も、自殺に関して近代社会で生じた変化を十分に説明することはできないであろう。技術的合理化と産業化、官僚制、都市化、社会移動、社会的世界の多元化、社会の機能的組織化、子供たちが社会化される家庭的・社会的環境の変化、社会変動の規模拡大と加速化など、一般的に予想されるほとんどすべての要因が、大なり小なり、この変化の過程にそれなりの役割を演じてきたと思われるからである。
- 31) ひとくちに自己本位主義と言っても、そこには種々の相違があり、デュルケムもそれを高次の形態とありふれた形態とに区別している(246:318)。前者をポジティブに死を希う自覚的な自己本位主義と呼ぶとすれば、後者は、いわば一般的な気分としての自己本位主義であり、ネガティブに生を厭うにすぎない。自己本位主義者といえども、人間の反省など所詮たかが知れているのであり、ルネラファエルのような人物が世にはびこるわけもない。(実際、よく知られていることであるが、自殺志願者の大部分は、生死について極めて曖昧な考えしか持っておらず、生死の選択に迷っていることが多い。キリーロフのような人物は、現実にはむしろ自殺しない、と言えるであろう。) その意味で、社会的自殺率に影響を及ぼす限りでの自己本位主義について言うべきことは、もう既に尽きているのかも知れない。しかし、自己本位主義の尖鋭な形態について述べることは、ありふれた形態にあっては潜在的なものを顕在化させることになるであろうと思われる。

- 32) 242 : 314. 254 : 325——「自分自身にすっかり心を傾注して」——。
- 33) 実存主義の原始聖典とも言うべき「ギーレライエの手記」は、生のこの状況を極めてよく表わしている。
- 34) M. Weber, *Grundriss der Sozialökonomik*, III. Abteilung, *Wirtschaft und Gesellschaft*, 1. Halbband (Tübingen : J.C.B. Mohr, 1947), S. 262. 武藤一雄ほか訳『経済と社会・宗教社会学』創文社、一九七六年、九五頁。
- 35) *ibid.*, S. 257. 武藤ほか訳、八一頁。
- 36) *ibid.*, S. 286. 武藤ほか訳、一五二頁。
- 37) *ibid.*, S. 289f. 武藤ほか訳、一六〇頁。
- 38) *ibid.*, S. 290. 武藤ほか訳、一六〇頁。
- 39) *individuation démesurée* (156 : 223), *individuation exagérée* (334 : 406).
- 40) P. Berger et al., *op. cit.*, p. 79. 高山ほか訳、八八頁。
- 41) R. Bellah and Ph. Hammond, *Varieties of Civil Religion* (San Francisco : Harper & Row, 1980), p. 181.
- 42) 156 : 223. この点において、エゴイズムは「利己主義」という意味合いを持つ。実際、『自殺論』においても、このニュアンスが比較的前面に出てきている場合がある。例えば、エゴイストは自己以外のものに愛着を抱かないとか (338 : 410), たとえ愛を抱くとしても、それは真に他者に向けられた献身的な愛ではない (242 f. : 314 f.) などと言われる。もっとも、宮島が指摘しているように、この意味は稀薄である (157)。
- 43) あるいはまた、人間は物理的存在に社会的存在が付け加えられた二重の存在である、などとも主張される (161 : 228)。これもデュルケムらしからぬ発言であって、物理的人間は社会的人間による何らの変形も伴わず、それと並存するわけでは決していない。
- 44) 我々はここで、人間が望ましいもの以外のものを欲しない、と言っているのではない。ここには、欲しいものと望ましいもの、カセクシスと価値、好み (preference) ないし欲求性向と規範、という伝統的問題が横たわっている。これは、本稿の範囲をはるかに越える問題なので、ここでは論及しない。この問題に関して包括的に論じ、かつ筆者の考え方とも比較的近い論考は、C・クラックホーンの論文である。C. Kluckhohn, "Values and Value-orientations in the Theory of Action," in *Toward a General Theory of Action*, ed. by T. Parsons and E. Shils (Cambridge : Harvard University Press, 1952), p. 388-433.
- 45) 263 : 334. 彼のこの発言は、ある特殊な文脈においてなされているが、このように文脈から離れて、一般的な形でも主張されうる。事実彼は、この命題を一般的な意味合いにおいても語っている。
- 46) この連関で今一度、世界の受動的先所与性というフッサールの概念を想起してみることが、有益であろう。

- 47) P. Tillich, *The Courage to Be* (New Haven & London : Yale University Press, 1952), p. 48. 谷口美智雄訳『存在への勇気』新教出版社、一九七五年、七三頁。
- 48) 『自殺論』からの以上の二つの引用は、第二編第五章「アノミー的自殺」からのものである。従って、この引用の仕方は原典の不当な引用ではないのかという浅薄な批判が予想されるので、予めそれに反論しておく。自己本位主義とアノミーにおいては、追求される対象こそ違え、いつ果てるとも知れない追求に自ら疲れ切り、そこから生を厭うに至るという形式的パターンそのものは、同一である。この点については、就中、251 f., 297 : 323, 368を参照せよ。
- 49) Ph. Ariès, *Essais sur l'histoire de la mort en Occident* (Paris : Seuil, 1975), p. 130. 伊藤晃ほか訳『死と歴史』みすず書房、一九八三年、一四八頁以下。
- 50) E. Shneidman, *Voices of Death* (New York : Harper & Row, 1980), p. 34. 白井徳満ほか訳『死の声』誠信書房、一九八三年、四三頁。
- 51) J. Hinton, *Dying* (Harmondsworth : Penguin Books, 1982), p. 46 f.
- 52) 我々はここで、美学の教祖、E・T・A・ホフマンによる、大学生アンゼルムスの人物描写に言及してもよいであろう（ホフマン『金の壺』中野孝次訳）。大学生アンゼルムスは、自分を最も不幸な人間だと見做す。それどころか彼は、自分が「ありとあらゆる悲惨と苦しみを受けに生まれてきたようなものだ」とすら考える。しかし、そう考えるに至った原因は何であろうか。「一度だって主顕節に豆のはいった菓子にあたったことはないし、丁半あてではいつだってあてそこなうし、パンを落とせばいつもバターのついたほうが床についてしまう……いったいほくが、着たそのとたんにとべとべとした獣脂のしみをつけるとか、あるいは意地悪く打たれている釘でいまいましい鉤裂きを作るとかしないで、新しい服を着たことがあるだろうか……」。こうして、ほろ苦くも笑いを禁じえぬ些細で愚劣な事柄が「悲惨と苦しみ」として姍々と書き記される。ところがまさに、こうした些末性こそが、アンゼルムスの人物描写に至高の輝きと美しさを与えているのである。アンゼルムスは、自分を不幸と見做す理由に事欠くことはない。どのようなことも、自分の凶星を確信させるに足る。それは、彼の「悲惨と苦しみ」とが、実際には外側からやってくるのではないからである。

付記：小論を孤高の哲学者、花田圭介先生にささげる。

さすらいが時として倦怠に導こうとも、倦怠は情熱より出づる、
そして情熱のあるところ、恒に可能性もまたある。

(昭和60年5月21日 受理)

ドイツ民衆文芸の歴史について

ドイツ民衆文芸の歴史について

-研究資料・編訳：ドイツ民主共和国・
ベルリン科学アカデミー・歴史学-民族
学中央研究所 ヘルマン・シュトロバハ
「ドイツ民衆文芸史」序文-

坂 西 八 郎

Geschichte der deutschen Volksdichtung Übersetzung aus dem Buch:

„Geschichte der deutschen Volksdichtung“
(Hrsg. v. Hermann Strobach, Akademie
Verlag 1981, Berlin)

Hachirō Sakanishi

Abstract

This paper is a translation from the preface of the following book: Geschichte der deutschen Volksdichtung (ed.: Hermann Strobach, Akademie Verlag 1981, Berlin). My main reason for translating it is to introduce the author's way of thinking to Japan. The author, Hermann Strobach, has outdated the standpoint of the idea of the "Grundschrift"; he proposes a new thought: the creative of the people in the "Grundschrift" is also the most important moment for the development of the formation of the variations in the field of "oral tradition". Predominantly there has been an fixed idea of jōmin (people in the "Grundschrift") in Japanese folklore. And there is no clash with the classic image of jōmin. I hope that this translation will raise earnest discussion about it.

1). - i. 歴史的研究をはばむ二つの原因

-とくに「基層」論について-

ドイツ民衆文芸の端緒から現代にいたるさまざまな発展傾向について、歴史的な概観を一卷本におさめてみた。われわれには本書を最初の試みにとどめるつもりはないし、またそれも許されぬであろう。ドイツ民衆文芸の歴史的研究をするために必要な資料の状況をみてみると、15世紀中葉まではわりと密度のたかい文献があり、中世中葉までは価値のたかい個々の証拠文献がかなり多くあり、またきわめて少ない証拠文献をもってではあるが、われわれは中世初期までさかのぼる。けれども個々のジャンルの歴史、またとくにドイツ民衆文芸全体の歴史をあつかった総合的論述はほとんどない。いままでの歴史的研究はもっぱら個々のテキスト、テキストのタイプ、あるいはテキスト群の変転を問題別に研究することを目標にしてきた。個々の地方の伝承を歴史的に比較することも、いまだなお充分に注意をはられないままである。

その原因はおもに二とおりあったとおもわれる。まずとくに後期ブルジョア的研究においては、民衆芸術および民衆文芸をなすものは、ほとんど変ることのない「基層」の実体であるという観念が支配的であった。このような見解は歴史的研究をほとんど促進しなかった。

民衆の伝承のなかの散文やうたの伝承が、しばしば何世紀にもわたり保持されてきたのは事実である。それにもかかわらず不変の諸伝承ということは考えられないことである。諸題材、諸タイプは多種多様できわめて長期にわたり保たれうが、その表現内容と形式はつねにかわってゆくのである。民間伝承の全文化財は継続的な変化にさらされる。その結果どれをとっても互いにちがう個々のテキスト型が無限に生ずる。さらにまた諸題材と諸タイプも歴史的伝承過程であらたに生じ、あるいはあらたに民間伝承にとりあげられ、そして多くのものがふたたび消え去ってゆくのである。民衆文芸の社会的・文化的機能もおなじように歴史的な変化と発展にゆだねられる。時代を個別にとりあげてみた場合、ある一つの時代における民衆文芸の社会的・文化的機能は、ことなる

階級と社会層のもとにあっては非常にちがうし、さまざまな時代全体を通じてみた場合にもおなじことがいえる。たとえば民衆文芸の濃密な歴史的伝承がはじめてわれわれの手にとどく15世紀と16世紀初期の資料をみよう。これによればこの時期には、うたと物語りの伝承、箴言財やさまざまな言語・詩形式に形づくられた人生経験が、農村と都市市民のわりとひくい階層の精神文化の重要な構成部分となった。それにたいしてその頃すでに都市市民中間階層、とくに手工業組合や同業組合の親方たちと小商人たちにとっては、これにくわえて文学的な題材やその造形が重要となった（たとえば職匠歌人のうた）。ものを読む力がますます広まるにつれ、すでに16世紀には都市市民中間層のなかで、のちには下層のなかでも、そしてとくに19世紀以降にはついに農村住民のなかでも、人びとの精神文化における民衆文芸の伝承ジャンルへの関与はますます後退した。そのかわり一方でさまざまな異なる由来と種類をもつ読み物が登場した。また民衆文芸の個々のジャンルも、内容と形式のみならず、そのもつ社会的意義という点でも歴史的にかわってゆく。19世紀におけるドイツの口頭による物語伝承をとってみると、童話および宗教的伝説は後退し、笑劇伝承と一般むけのコミックな娯楽もののジャンルとタイプが優位を占めてくるという特徴がみられる。童話のみならず、たとえば多くの歌謡群についてみると、とくに19世紀と20世紀の初頭には、成人の世界から児童たちの世界へと移っていったということが知られている。伝承はますます口頭・記憶伝承ではなされなくなり、書物でなされるようになり、今日では文字と技術を駆使した媒体によって広くなされている。そのため民衆文芸ないし民衆文芸のある一定のジャンルの保持者も伝承形式もかわる。それゆえ民衆文芸は、つねに変らない単一の構成物とはみなされえない。それは歴史的に発展する、多様に構成された、そして多層的な現象なのである。

歴史的につねに変化するテキスト内容とテキスト形式が莫大な量に達すること、また社会的・文化的な関連や機能がきわめて多いこと、このことが歴史的な総合的論述にあえてとりくもうとする人がまれにしかあらわれないことや、このような仕事は時期尚早の企てだとたびたび言われる第二の原因となる。

- ii. 歴史的研究所の困難性

事実どのような試みも、つまり民族的・国民的伝承における民衆文芸の総体を歴史的に分析し論述しようとするどのような試みも、ややこしい問題の前に立往生する。これらの問題のすべてを概略的にせよ論ずることは不可能である。とはいえ民衆文芸の歴史的論述を理解いただくため、とくに重要な三つの問題領域について二・三の所見をのべることにしよう。

2). 典拠資料の問題性と方法論

まず典拠資料の問題がある。これは歴史的・民俗学的研究と論述など、いずれの研究のはじめにもある問題である。この典拠資料の問題は、三つの言葉をもって特徴づけることができる。すなわち豊富さ、欠除性および信憑性。第一は、歴史的資料のほとんど使いこなしかねない豊富さ、第二は、この豊富さにもかかわらず集めた資料には欠落性があること。第三には、使用に供せられる資料の大部分には信憑性がないことである。

いずれの分析と論述も問題としうる資料の全体に関係をもとうと試みるであろう。しかし最後にはいつも、使用に供される証拠文献の全体のなかから必然的になされるべき選択に基礎をおくことができるだけである。この選択の基準が、歴史的論述のさいに、とりあつかわれる対象の歴史的発展因子を決定するにちがいない。この因子が発展の傾向と方向をきわだたせることを許す。こうした手続きによって成立した歴史像は、民衆文芸にふくまれる個々の諸現象が現実には多様であることにくらべ、貧しい。この多様性も民衆文芸には近似的に掌握され再現されているにすぎない。けれども一方では、さまざまな現象の多層性と多様性にもかかわらず、歴史的発展の決定的一般的特性と傾向をあきらかにすることに成功すれば、この歴史像は現実より豊かであろう。だから結局は、資料をあつかう困難性が問題なのではなく、方法論が問題なのである。これについては、ここに吟味すべき第三の問題群にふくめてのべることにする。

3). 資料の定量化とその問題

豊富な資料を自由に使いこなすために、定量化の方法の適用についていろいろに論議され、一部はもはやすでに導入されている。将来定量化の方法は「拒否されえないであろう。なぜなら莫大な量の原典資料がますます数字化され、パンチ・カードに収められ、コンピューターの表やプログラムにくみこまれるからである」。だが定量的方法にたいする価値評価は、絶対的な懷疑から過剰な期待におよぶ。こうした極端な考え方のゆれの原因は、歴史的・民俗学的意識過程の内部における定量的方法の位置が不明なことである。この位置を正確に決定することができるためには、定量的方法が以下の4点にのべることを前提としているということから出発しなければならない。

1. 歴史的・社会的現実と学問的認識の到達した状態によって決定される課題・問題設定。
2. 方法的に定量的分析におきかえうる学問的にたしかな理論。
3. ひきつづき資料批判の伝統的方法が必要な現存する典拠資料の批判的精選。
4. 研究されるべき対象に関してすでにえられた知識の批判的な考慮。

その結果、定量的方法は万能薬でもありえぬし、価値に中立あるいはイデオロギーに無関係でもない。むしろ定量的方法はモデル設定ないしコンピューター処理の外にある理論的・方法論の原理に基いている。定量的方法にあたえられる場が補助学の場とされることはきわめて明らかである。この役割りのなかに定量的方法の価値があり、将来は確実に利用度がたかまるであろう。しかしまたこの方法の限界もある。豊富な資料がこの方法の助けをかりてよりよく概観されうるであろう。この資料の豊富さそのものもまたむづかしい問題でありつづけるだけではない。ますます多くなる資料の量を技術的に処理しうる可能性があり、これはより総括的になる原典の領域、典拠資料を包括してゆくと

いう傾向をつよめる。この傾向は、とくにいづれの総合的論述の構想のなかにもすでにあらかじめ存在するが、それは必要な一般的言明をできるだけ大きな典拠基盤によって証明するためである。

4). 資料の欠落性

同時に典拠資料の欠落性も歴史的研究につねに付随する問題である。現実には生きている莫大な量の現象のなかのほんの一部が学問によって捕捉され手をくわえられうるのがつねのことであるから、この欠落性はまずすべての民族学的・民俗学的分析の根本的にもつ困難な問題である。たとえばある一定の地方と時代の民謡の大河の溢れるような豊富さをもった、実際にうたわれたうたのヴァリアツィオンのなかから、最大の努力をして収集活動をおこなっても、ただ例歌、いわば抽出調査的資料しか捕獲されなかった。これはいわゆる「コンテキスト」についてもなおさらあてはまることだ。つまり社会的および文化的諸関連の全分野についてあてはまる。その全分野の場にはある任意のテキストが歴史的・具体的に存在するけれども。この事実ははじめからすべての研究に認識をたすける原理として入りこみ、相応な原典批判的、分析的装置を要求し、その結果、一般化しうる言明が獲得されうる。たとえば（民俗学）地図作成はつねにこの課題と対決し、解決のための重要な方法論的基礎を獲得した。さらにくわえて第二の限界が生ずる。これは - 歴史的に制約されるのであるが - 収集と研究の方法と目標設定のなかにある。ドイツ民衆文芸にかんする証言の収集は、ゲーテがヘルダーの影響によって1770年エルザスでおこなった民謡の初期の記載以降、豊富な典拠をあらゆる地方であつめた。これは、ある一定の地方の、ジャンル別の、またテーマ群による、あるいは個別の歴史的時期の、または一般的な、と銘うたれる民謡集や論文の無数の刊行物となっている。さらに広範囲にわたる手稿の資料がとくに民俗学アルヒーフによって把握されている。200年にわたる、部分的には集約的な活動による内容豊富な意義のある収集にもかかわらず、資料はやはり欠落があり、非統一的で、その信憑性の点ではさまざまである。

5). 加工された資料と資料収集の一面性および不統一性

まず多くの伝承テキストと伝承メロディーがとくに印刷された民謡集に手をくわえられた形で再現された。この加工は、個別テキストを損傷から修復することにはじまり、原テキストの復元の試みまで、さらに往々にして断片として保存されている記載にまでおよぶ。しかも編著者が過度に創作の手をくわえるということが、学問的であることを要請される出版物においてすらある。

また収集者は、自身のそのおりの民衆文芸観に照応して、しばしばただ一定の断面、かたられ、またはうたわれた文化財の実際上の一断面に関心をもつだけであった。つまりその文化財は「古い」のか、「真なるもの」とみなされるのか、あるいは一定のジャンル、たとえばバラード、また風習とむすびついたうた、童話など。収集者の先入観のため、とくに印刷された刊行物にあっては、春歌は極度にさけられた。さらに大ていの記載では、語りとうたの文化財の機能、伝播およびこの文化財を保持する社会層すら記入されていない。地方的収集もまたきわめて偏している。かなりおおくの地方、たとえばアルペン、または幾つかの低地ドイツ地方などは他の地方よりも根本的に集中的に研究された。個々の地方の内部では、収集活動はほとんどもっぱら農村か、ときにより小都市にむけられることもあった。大都市または中都市はほとんどふくまれなかった。

この多かれ少なかれ組織的にくだてられたすべての研究と収集は、さらにくわえて本質的に収集者や研究者の社会的な位置や政治的立場により影響をうけた。この影響は、とくにドイツの19世紀中葉以降における諸収集に作用し、反政府的なうたや物語りの文化財、あるいは労働者歌曲や散文伝承は、ほとんど記載されなかったか、記載されたとしてもほんのまれである。さらに語る人、うたう人は収集者に照会された場合に、既成の社会組織やその制度やイデオロギーに対抗するか、国家によって禁じられている物語り・歌謡財をさしひかえた。

欠落性と信憑性の問題は、一部は以上にのべた形で存在する。しかしまた他

に、手書きか印刷された歌集、ビラ、年代的記録、文学的作品などや、またその他の典拠資料、すなわち無自覚的な収集・研究活動に由来するというよりも、実目的をねらった資料などをもちいるさいにもちあがる。ドイツ民衆文芸の歴史的研究のために、われわれが、重要ではあるが長い間完全には理解しつくしていない、しかも比較的古い時代の典拠資料の在庫をもっている、ということはすでに指摘されている。とくに15世紀中葉以降はさまざまとなる種類の手稿が、また16世紀初頭以降になると、印刷された歌集、単独の印刷物、文学作品なども、民衆の物語・歌謡財を大量にわれわれに伝えてくれる。もちろんこれらの典拠すべてについて顧慮すべきことは、これらは決して記録にとどめるためや、いわんや学問的問題設定にしたがって作成されたものではないということである。このことはとくに明らかに歌謡財について言える。通常、収集者と出版社はかれらの歌謡財を直接的な使用か商売目的のためあつめるか印刷したのである。手稿も印刷物もほとんどいつもその一部には民衆間にうたわれていた歌曲を載せており、他の資料もまた載せている。他の一部はもっぱら市民や都市に関する典拠資料で、都市と都市周辺の歌謡財のみを伝えている。これらの資料によっては、全地方的・農民的諸伝承は歴史的にみてきわめて僅かしかカバーできないし、全体を掌握することはむづかしい。このことは15世紀後半の有名な手稿集についてもあてはまる。すなわちロハーマー歌集からはじまり、クララ・ヘツレリーンの手稿歌集、そしてロシュトッカー、グローガウアー歌集にいたるまで。また、原典を提供する信頼性のたかい形というものではなく大い芸術的に手をくわえられ、16世紀の市民的作曲家（フィーク、ラオ、オトマイアー、フォルスターなど）の作品のなかに、当時流行した歌謡財が存在し、われわれのまえにたち現われる。

物語財についても状況は似ている。たとえば年代記、実務冊子、教会の戒律集などにおいて、民話の題材が歴史的事件のイラストにそえて再現された場合、その民話の文章は大い個々バラバラな偶然的なものであった。テキストは、一定の民衆層における、それぞれの伝承の伝播と機能についてはほとんど何も語らない。しかし大い形式も内容も報告者や編集者により変更をくわえ

られ、年代記報告や教会文書などでは書記や委任者の立脚点から、支配勢力のイデオロギーの利益にそって解釈されている。状況がいくぶんか好いのは滑稽話・笑劇の場合である。16世紀と17世紀の収集は、無数の民衆文化財をふくんでいる。しかしここでも伝承はつねに文化財と混合し、通常は文学的に手をくわえられている。

6). 資料の妥当性についての問題

もっとも重要でありながら、その一部はきわめて困難な、そしてしばしば完全に明確には答のえられない原典批判上の問題が、これらの歴史的資料をあつかう場合にはある。それは、これらの伝承資料のなかで、何が一般に伝播し、あるいはある一定の社会層や一定の地域で実際に伝播し、そしていかなる形式をとっていたのか、確定できないということである。だが流布していた同時代のできるだけすべての典拠の比較をすることやまた民間伝承の後の時代の記載の助けをかりて、予見どおりそれ相応の結論をひきだすことができる。いかに注意ぶかくそのような結論がひきだされなければならないかは、バラード伝承を参照しただけでわかるであろう。あらゆるドイツのバラードの圧倒的な数を、われわれはヘルダー以来、農村の伝承からあつめてもっている。けれどもこのことから、ドイツのバラードが歴史的に農村・農民的民衆文芸のジャンルに入るという結論をひきだすことはできない。ドイツのバラードの発生を後期中世の都市的關係のなかに求めるべきであろう、という見解もある。事実、伝承された歴史的典拠資料は、このテーゼを支持する。けれどもこの歴史的典拠資料は教育施設から入手したものであり、それもほとんどもっぱら都市の文書伝承に由来する。バラードは、おそらく僅少量とはいえ、まだ支配的であった文字を媒介としない農村の伝承を包括したであろう。われわれは結局、テーゼと資料状況が最終的には同じであるような環のなかにいる。これはまた、原典資料を引受けただけでは、発生と伝承問題の判断に充分な基礎すら提供できない、ということを意味する。内容に関連するテキスト解釈がこれにくわわらなければならないし、これが断定を可能にする。たとえドイツのバラードが都

市市民に由来するというテーゼが正しいことがわかったとしても、いままでの典拠資料は、やはり何時・いかにしてバラードが農村に移っていったのかということについて、正確な歴史的言明をあたえはしない。

7). 補助的資料ということ

物語り、うたなどのテキストについては、はるかに広範な領域にわたる他の種類の典拠資料が考慮されなければならないということを簡潔に指摘するのにとどめよう。物語りとうたの出現およびその機能に関する重要な証言を、同時代のさまざまな文書、年代記、風土・旅行記などは提供する。禁止令、警察令、検閲令、説教、世俗歌の批難が書かれている宗教冊子などもまた民衆間に生きた物語り・歌謡財の重要な解明をあたえる。15世紀にいたるまでの全中世について、間接的な証拠、たとえばあるうたを禁ずる規則や禁止令、とくに教会の委員会などによって発せられたるものなどは、ほとんど唯一の証拠文献であった。これが民衆の歌謡-、箴言-、物語財に関するきわめて僅かな-しかもつねに批判的な吟味をうるべき-情報を提供しうる。すでにヘルダーは年代記や類似の歴史的文献の意義を指摘した。アルニムもブレンターノもこうした文献類をいちじるしく評価して「魔法の角笛」にもちい、この文献類からテキストをとりだしたか-しばしば大きく手をくわえて-編集した。ヤーコブおよびウィルヘルムのグリム兄弟は、「ドイツ民話」の大部分を同じような文献をもちいて創作した。民衆文芸のテキストをもちいるというこの資料の利用の仕方には、以後ながい間こうした典拠資料がくみこまれるおまな形になっていた。やがて次第に、また多かれ少なかれ散発的に、人びとはこの文献を民衆文芸の生産や機能、そして伝承条件の認識のためもちいた。組織的な利用はやっと最近になって大きなアルヒーフ（文書館ないし研究所）や、国際民俗音楽評議会の研究グループがはじめた。ここには広大な研究領域が開けていて、民衆文芸の歴史的研究のための大量の資料がある。未印刷の、これから発見されるべき手稿集、あるいは比較的古い印刷されたる抜萃などの出版と解釈がすすむにつれて、歴史的論述のための資料的基盤は改善されるであろう。欠落のない

歴史的な資料基盤などというものは、それにもかかわらず絵空事である。したがってどんな歴史的論述も現存の典拠資料の限界を勘定に入れなければならない。そして資料の言明が堪えうる能力と結論にたいして相応に安全策を講じ、はっきりとさせておかなければならない。

8). 資料をもちいる側の立場

—資料のもつ社会的機能の発見—

典拠資料の性質と、第二の、方法論的課題とは関係がある。ドイツ民主共和国の民間伝承研究はとくに集中的にドイツ民衆文芸における民主的で革命的な伝承を研究することに努力をかたむけてきた。ヴォルフガング・シュタイニッツは、1945年以後のドイツ民主共和国における民俗学研究のあらたな組織にさいし、この課題を設定した。かれはまた自身、有名な民謡集「6世紀間における民主的性格のドイツ民謡」のなかで、このテーマの論述にとって最も重要な刊行物を入手している。一連の広範な出版物がこれまでこの道標となった作品にひきつづいて著わされた。ドイツ民衆文芸の歴史的な総論を試みた本書では、この民主的および革命的諸伝承が民衆の伝承の全関連のなかにくみこまれた。このような企てにあたっては、民衆文芸のなかにある社会批判、社会的な不満と告発の問題をあつかうこと自体が一つの社会的機能の問題となる。テキストの社会的言明は、非常に異なる程度に、またまったくさまざまな異なるやり方でなされうる。階級の対立するさまざまな社会における社会批判の言明をふくんだテキストは、支配的な不公平な関係、抑圧と搾取にたいする不満、そしてこの関係にたいする告発を媒介するものである。ある一定の状況と関連においては、そのおなじテキストは一般的な気分の表現としてのみ使われるか、または社会的娯楽のためにうたわれるか、語られる。他面、それ自身としては全然明らかに社会批判を強調していないテキストも、ある一定の状況のなかでは抑圧された大衆の社会批判を表現し、大衆蜂起の発火信号にさえなる。これに関しては歴史的に証明ずみの諸例がある。一般的にいて妥当する方法論的原理としては、社会批判・不満と告発は、むしろテキストに機能をあたえ、

ある一定の歴史的・社会的現実にたいする機能的関連として、そのときどきの伝承の担い手によって理解されうる。

9). 保守性と変化性

ところが歴史的典拠文献においては、民間伝承のなかで記載された機能についての指示はまれにしかない。われわれがアルヒーフや出版物で自由に使用できる資料のほとんど大部分は、ただテキストの記載である。特殊な分析がはじめてそのテキストの社会的機能の認識えと通ずる。そのための重要な -しばしば唯一つ可能な- 補助手段は、民間伝承におけるテキストの保守と変化の調査である。一例をあげて明らかにしよう。

非常に美しいドイツのパラーデの一つとして、すでに15世紀の文献がのこっている二人の遊び友達のうたがある。その初行の多くは次のごときものである（-以下に直訳）。

二人の幼な友達がいた、
二人は散歩に行った。
一人は元気で、
いま一人は泣きくずれている。

（シュタイニッツ「6世紀間における民主的なドイツ民謡」第1巻。ベルリン 1954年。182頁）

内容は以下のとおり。一人の「少年」、若い男が、金持の少女か貧しい少女かのどちらかと結婚をする決定をしなければならなくなった。かれは、愛している方の貧しい娘に決めた。もちろん社会的な考慮からであることは大事な点である。16世紀のテキストは以下のごとくである。

そして金持ちも財産を食いつくせば、
愛も終りだ、

わたしたちはまだ若く強い、
働いて大いなる富をえようじゃないか。

(アムブラーザー歌集 1582年。ベルクマン編。シュトゥットガ
ルト 1845年。53番 47頁)

この歌謡には自負心が読みとれる。ドイツにおける宗教改革と農民戦争、すなわち初期市民革命によって造りだされたあの世紀に、都市の手工業者-市民階級にふさわしく現われた自負心である。

19世紀に由来するあたらしいテキスト型においては、この社会的傾向は特徴的な変化をしている。すなわち、

そしてわたしはお金持の娘を去らせ
貧乏な娘の方に心を向ける
わたしたち二人はまだ若く強い
わたしたちはもう食ってゆけるだろう！

(エルク・ボエーメ「ドイツ民謡集」 第1巻。ライプツィヒ
1893年。第70番C)

ここではもはや、到達可能な人生の目標に働かせることは、16世紀のテキストにあるごとき「大いなる富」ではない。二人の若い人間の希望は、仕事によって共同に暮し、生活の基礎を創りだすことはできる、ということにある。

このテキストのヴァリエーションは、バラードが他の貧民的・プロレタリアートの層、あるいは農村で使役されている層へと移行していくことに照応している。そこではいまやかれらの実際の生活状態や生活の希望がうたに現わされている。テキストが歴史的・具体的に变化した社会関係にそのように順応してゆくことから結論がえられる。つまりこのテキストは伝承の過程で現実にたいする関連を保持し、そしてテキストの言明に妥当する社会的機能をはたした。この種の分析を基礎として、伝承された民衆文芸の社会的機能と諸機能一

般を歴史的に理解し論述しようとすることができる。

10). 民衆文芸理解の方法的態度 —弁証法的構造と過程の把握—

ここで結論的にもっとも困難なる方法上の問題になお二・三の覚書を付したが、それは民衆文芸の即応した理解と論述ということである。民衆文芸は、社会的・文化的生活の領域に属すが、その内部では多様な形態をとり、矛盾にみち、歴史的にもさまざま異なり、矛盾にみちて発展するものである。民衆文芸はまず何といってもさまざまな種類の多くのジャンルによって構成されている。このジャンルはさまざま異なる構造、機能、運動の経過をとまなう。すなわち歌謡、民話、童話、諺、笑話など。そして第二に民衆文芸は全体としても各ジャンルにおいても、またもやたがいに関連し、相互作用をなし、たがいに影響をあたえて変化をおこし、たがいにことなる発展をたどるところの個々の諸経過、諸過程、諸現象、諸要素などの多数から構成されている。伝承された資料をあつかうときいつも係わりあう題材、タイプ、個別のテキストは、あるものは何世紀以上にわたりゆっくりと次第に変化し、あるものは急激な変化にさらされている。また長期にわたり民衆文芸のなかに生きつづけているものもあれば、短命のものもある。さまざまな歴史的時期にかなり明瞭に登場するが、他の時期には民衆文芸の全レパートリーにおいて形を結ばない、というジャンルやタイプとも関係する。民衆文芸の歴史的発展は、かくて連続性と非連続性の弁証法的経過をたどる。すなわち、何世紀にもわたっての題材、タイプ、機能の恒常的な変化と保守の統一において。またジャンル、テキストにあらわれる内容、あるいはかなり強く、あるいはかなりゆっくりと変化するテキストの機能、および様式などの関連と区別において。また同時に、すべての時代と、すべての歴史的時期における勤労する階級と層の民衆文芸にあっては、つねに同時的・多層的な構造が問題となる。少なくともわれわれが典拠資料をもつようになって以降は、それは風俗習慣に結びついたものから社交的娯楽のための物語り、うた、諺にまでいたる。またさまざまな内容上、審美上の主

張をもったテキストや、共同で、あるいは一人でうたうたもふくむ。

民衆文芸の歴史の論述は、ゆえにそのときどきにあらたに発生したタイプ、テキスト、テキスト群の知識をえようとするのみではない。民衆文芸の歴史では、小部分は発生史であり、はるかに優勢なる部分は民衆文芸の活動と伝承の歴史である。あらたに生じたテーマ、題材、タイプ、ジャンルの年代的順番は、民衆文芸の歴史的現実に対応した記述を生まなかった。そのような記述を試みたいならば、むしろ「並べること」や「順次にする」との弁証法に気をつかうことを試みるべきである。しかるのちに、歴史的発展過程において、生きつづける諸伝統と革新の間の弁証法的交互作用がなされたのか否か、いかなるジャンル、歌謡群、題材が生じ、何が消え去り、何がつよく発展したのか、他が変化し、何が相対的に恒常的に保たれていたのかなどについて問うべきである。

ここで問われる理論的- 方法的課題は、構造と過程の関係である。構造的な観点と動的な観点を統合的に結びつけることは、あらゆる歴史科学的認識におけるもっともむづかしい課題の一つである。まず民衆文芸はその全体として、個別ジャンルであろうと、個別のうたのタイプであろうと、おなじくまた各個別のテキストのタイプであろうと、たがいに関係している多数の諸要素が複合し、からみ合ったものとしてわれわれの前にたちあらわれる。つまり民衆文芸は、社会生活の、ある一定のやり方で構造化された領域としてたちあらわれる。われわれはこれらの資料をその資料のもつ関連にしたがって関係づけ整理する。発生的に依存しているものを諸タイプに接合し、モティーフ（動機）間の諸関係を確立し、たがいに違うものを違うタイプ、題材、モティーフに区分けする。要するにわれわれは、タイプ、ジャンルなぞの諸構造をうる。結局ある任意の時点の民衆文芸の全構造をうる。この仕事によって、諸要素やその関連はつねに変わるものであることがわかる。民間伝承の現実を模写する実際の資料のなかに、運動が優勢なものとしてあらわれる。ゆえに構造と発展を歴史的現象の対立する規定として考察することは、方法的なあやまりである。むしろ社会的諸現象はつねに発展する構造として存在する。伝承された資料の全体

性のなかに、動力となる要素と固定を保つ要素、優勢な要素と劣勢な要素など、現実のなかに存在する弁証法的な交互作用とその諸関係を、運動する構造として、事実即して模写することに成功するならば、民衆文芸の歴史的論述は、はじめてなされうる。これはもちろん抽象を要求する。入手された全資料はただ基礎であって、歴史的論述の内容ではありえない。それどころか、分析と記述がはじめて実際に資料の歴史的な解明、つまり発展を究明し論述するものであり、あたえられた事実から歴史的傾向、歴史的諸法則をつかみだす。

11). 部分性と全体性

そのための基本的な前提として、次の事実に注目しなければならない。すなわち、社会的現実性のいかなる領域にも、つまり文化のいかなる分野にも、絶対的な独立性、さまざまな種類の部分領域の絶対的な自律性というものとは存在しないのである。それどころか、すべての部分領域と現象は全社会の全体性のなかに秩序づけられている。何重かの多種多様な相互依存と相互作用の関係をなすこの秩序は、かなり多くの連結項によって媒介されていることはたしかである。しかしながら全社会の全体性、その構造・および発展の諸関係と法則性がつねに最終的な決定的判断をくださるのであって、それによって個々の社会的領域の構造の- および発展の関連と運動形式の具体性が決定される。結局その根拠は、社会的生活の諸現象はそれ自体のみによって存在したり、あるいは運動するものではない。すなわち民衆文芸は決して「民衆文芸」、つまりそれ自体のため、またそれ自体によって発展する事物ではなく、すべての歴史は、「自らの目的を追求する人間の営為以外のものではない」のだ。しかしながら人間は自身の目的をたがいに孤立して追求する。その歴史的構造のなかで一定の社会的諸領域が最終的に優勢を占める。直接的にあたえられた諸事実が法則的に構造化され、そして運動する社会の全体性のなかの特殊な関連において考察されるならば、民衆文芸の研究は歴史的認識という結果に到着する。社会的全体性は、すべての社会層のなかでも、またこの社会層の相互のあいだの関係においても、対立しつつ、つねに運動し発展する社会的基本構造をもつ。われ

われの考え方によれば、社会全体のなかのすべての部分領域は、結局は生産力と生産関係の弁証法によって決定される。「この弁証法との関連において、経済的、政治的、イデオロギー的形式と領域における階級関係の全体が発展する」。その帰結として、われわれは資料が媒介するすべての事実を構造、運動、上記の社会的基盤構造の認識などとの関連において観察することができるし、しなければならない。この社会的基盤構造をわれわれは経済的社会構成とよんでいる。この -すでに述べたごとくたいはいは幾重にも媒介された- 関連において、はじめて事実は歴史的なものになり、事実の比重は測られ、評価をうける。この関連において社会的生活の何らかの領域の歴史的事実の本質がはじめて認識され、人間社会の構造と発展における法則的なものの要因となる。

12). 位置価 Stellenwert の概念

こうして民衆文芸の歴史的な機能・運動・発展、とくにその諸条件と諸原因は、結局はそれぞれに具体的歴史的な社会的基盤構造にたいする関連によって説明されうる。その方法的な手掛りとして、われわれのもちいることができるのは「位置価」の概念であろう。民衆文芸とその部分領域、すなわち個別ジャンル、テキスト群、テキストのタイプなどのそのつどの位置価を、文化と社会の全過程のなかで決定し、社会の全構造とその発展にたいする関係において、この位置価の変転を跡づけるように歴史的論述はこころみるであろう。これによつてはじめて発展の諸傾向は認識可能となり、また発展傾向はその諸条件の省察によつても説明可能となろう。具体的な研究と論述における、この方法的諸原理の実践的実現は、もちろんまだまったく複雑であり、問題は山積みとなっている。これは現実の研究活動とそのつど必要な論述方法において、つねにあらたにためされ、解答されなければならない。しかし問題の解答ということでは、われわれは民間伝承のまったく初歩にいる。とくにこの理由から、本書「ドイツ民衆文芸史」は、はじめての試みの一つという性格をもっている。

13). 民衆文芸における並起・継起、伝統・革新と保守・変転

民衆文芸は、歴史的分析のしめすところによれば、つねに「並起」と「継起」の、また伝統と革新、保守と変転によって特徴づけられていた。いかなる時代においても、われわれが民衆文芸史のための典拠資料をもって以来、伝統的な要素とあたらしい要素は並んで存在したし、また同時にともに変転をとげ発展してきた。この問題は、現代に目を向けると、民衆文芸は死滅するのか、あるいは、変化した諸条件のもと、おそらく完全に他の諸形式において実現をみる発展傾向のさまざまな可能性をもつか、というインターナショナルにおおく論議されている問題にいたる。われわれの論述は、現実の歴史的発展によって決定されるべきこの問題をすでに解決しよう、とは要請しない。けれどもこの問題を自らに課し、あたらしい過程を注目することによって、問題を指摘しおきたい。

14). ドイツ民衆文芸を考えるドイツ社会主義の立場

それゆえ、われわれの論述のための本質的な出発点をなすのは、次の認識である。歴史的な過程にある社会主義社会の、変化をとげた生活方法と向上した教育水準および恒常的に発展する勤労人民の社会的および文化的意識は、文化的生産性と文化遺産を獲得する可能性と能力において、質的にあたらしい段階にいたった。この基礎のうえに伝承された民衆文芸は変化した位置価をうる。階級の対立するこれまでの社会においては、革命的プロレタリアートの文化運動創出の以前には、民衆文芸は民衆の優勢の多数、すなわち搾取され抑圧される階級と層が言語・芸術的領域においておこなう創作活動と文化生活がほとんど唯一の表現であった。それにたいして社会主義社会においては、搾取と抑圧から解放された勤労階級と層は、かれら自身の文化的諸伝統そのものを教養財と文化的遺産として採りあげ継続する。勤労人民は民衆文芸のなかに、生活と芸術的創造の証拠を、また階級対立社会においてなされた、人民大衆の何百年にもわたる自由と公正のための格闘の証拠をみとめる。この証拠を勤労人民は

自らの階級意識を豊かにし、積極的な文化活動をおこなうためにもちいる。このことがとりもなおさず歴史的過程の構成要素となる。この過程において、勤労人民の自ら創造する芸術的活動は、労働者階級、その党、また発達した社会主義社会の教育・文化施設を基礎とする大衆組織の指導によって、国内および国際的な専門的芸術と緊密にむすびついて、歩一歩と展開する。それゆえ民衆文芸の発展の傾向と諸形式について論述するとき、必然的にあつかうべきことは、社会主義的な民衆芸術の創造およびこれが民衆文化の歴史的伝統にたいしてもつ関係、そしてその質的にあたらしい、特殊な個性などにみられる萌芽と要素である。

15). 本書の主眼点

この理論的および構想的観点から出発し、本書の論述で努力したことは以下の点である。

1. ドイツ民衆文芸を文化的現象として論述し、その特殊な発展傾向を、歴史的に変化する社会的諸関係を基盤とし、かつ全文化の発展にたいする関係において解釈する。
2. 民衆文芸の諸現象においてみられる継続的な発展をとりあげる。これは、文化における、また言語・詩作上の自己活動というあたらしい形の姿をもつところの、資本主義社会組織とそこにある支配的文化にたいして、労働階級と他の勤労階級と層がなした斗いにおいて到達したものであり、またさらに社会主義社会の建設のなかで到達したものである。
3. 諸ジャンル、内容、タイプ、題材、機能と形成方法などの多様性と歴史の変転を提供する。これはドイツ民衆文芸の歴史において、はじめから現代にいたるまで創出され、展開され、一部はまた消え去った。

4.階級対立社会における生活の困難なる諸条件のもとでなされた、このドイツ民衆文芸の歴史の道における、民衆の創造的活動を評価し、この創造的文化的活動の歴史的に限定された可能性と限界性を評価する。

5. ドイツ民衆文芸の発展を諸民族間・諸国家間においてみる。

言うまでもなく、この構想的観点をわれわれの研究状態を基礎にして実現するためには、多くの問題が未解決である。たとえば、民衆文芸に関する民族間・国家間の関係はいまだなおほとんど研究されていない。この関係は本書ではただしばしば展望として、そして一般的な関係として暗示されうるだけである。少なからざる歴史的時期、おおくの専門分野、無数の課題群（とくに美学上の問題）が、われわれによってはまだ手をつけられていない。また他の問題では、ほんの部分的成果にとどまっている。とくにこれは歴史のもっとも早い時期と現代の過程について言える。ながい歴史的時間にわたる、民衆文芸のごとききわめて多層的な構造物の論述をしよう、しかもポケット版として構想された本におさめようというのであるから、歴史の初めから現代までの発展傾向の記述と説明は、梗概にとどめなければならなかった。著者たちはこの論述の不充分さと缺落を自覚している。ドイツ民衆文芸の歴史的過程に関する情報は一般の人々には欠けている。しかし民衆文芸の諸伝統にたいする社会的関心は増大し、情報に対する需要が多くなっていることに直面して、著者たちはすでに現在到達した研究状態にもとづいて、歴史的概観を執筆し、公衆に委ねる気になった。著者たちは、批判的指摘を感謝をもって受け入れ、次版が刊行される改訂のさいには良心的に利用させていただくであろう。

索引は読者を助けるであろう。横断的な連携を探しだし、異なる歴史的時期における一定の現象とジャンルの記述間に、たがいの関連をつけることができよう。付録の精選文献目録は、重要文献である民謡集と研究活動を歴史的に記録し、学徒と興味をもつ読者にたいして、ドイツ民衆文芸、またかれらが関係する民衆本と大衆文学の一層の研究のために指示をあたえるようにしてある。

ドイツ民衆文芸の歴史について

本としての完成のため、一定の領域ごとに資料と参照指示が役立てられ、そして相応する文献目録が作成された。ウルリヒ・ベンツィエン（なぞ）、ヨハンナ・ヤエネッケ（呪文、祝詞、誓文）、ハイナー・プラウル（大衆文学）、フリードリヒ・レートリヒ（諺）、アンネリーゼ・シュミット（民衆本）が担当者である。ヘルタ・ウールリヒは文献目録と注釈の通読をもって著者をたすけ、また索引を作成してくれた。インゲボルグ・ミュラーは校正刷りを読んでくれた。著者たちは、ドイツ民主共和国・科学アカデミー・歴史学中央研究所・文化史・民俗学部門の同僚たちから、かなり多くの価値ある指摘をうけた。御支援と共同の仕事をしてくださったすべての方に、心より御礼申しあげる。

（昭和60年 5 月21日 受理）

民衆文芸を考えるための基準と 民衆文芸の概念について（続）

-研究資料・編訳：ドイツ民主共和国・
ベルリン科学アカデミー・歴史学-民俗
学中央研究所 ヘルマン・シュトロバ
ハ「ドイツ民衆文芸入門」序文-

II

坂 西 八 郎

Kriterien und Begriffe der deutschen Volksdichtung^{*)}

Übersetzung aus dem Buch:

„Deutsche Volksdichtung. Eine Einführung“

(Hrsg. v. Hermann Strobach, Leipzig : Ver-
lag Philipp Reclam jun. 1979)

Hachirō SAKANISHI

Abstract

There have been many standpoints from which to observe the phenomena of folklore. Hermann Strobach from the standpoint of Marxism analyzes the relationship between social development and folklore. He finds that the creative activity of the people is the most important moment for the formation of the variations in the field of "oral tradition".

*) This paper is a translation from the book : Deutsche Volksdichtung (ed. : Hermann Strobach Leipzig : Verlag Philipp Reclam jun. 1979)

23). 民衆文芸発展の可能性

民衆文芸の本質とはなにか。この現代でも民衆文芸が発展する可能性はあるのか。いままでは伝承における口承性と文書性を区別すること*がとくに重視されてきたが、これは解答をあたえない。解答をうるためにはむしろことなる社会秩序においてそれぞれの発展段階にある一定の階級・社会層がとる姿勢をみるのがよい。ある一定の階級の歴史的立場とむすびついた客観的生活条件が、その社会の階級・社会層に属する人びとの精神的・文化的展開にみられる歴史的な可能性・形式・限界を決定しているのだから。

24). 封建制度と民衆の「口伝 - 記憶伝承」

封建主義のもとにあって抑圧され搾取される勤労階級・社会層、とくに農民の諸伝承と文化的な営為は、対立する階級とのあいだにかなりの相互作用がなされるのにもかかわらず、支配階級にとって役にたつ支配者自身の文化とは対立的な関係になっている。支配階級は教育を独占し、独占によってこれまで発展した人類の文化的進歩を自分のものとし、自分のために役立てようところをみた。封建主義から資本主義への移行においてブルジョアジーの上昇・形成と文化的進歩はむすびついていった。搾取される勤労階級・社会層のこの文化的進歩にたいする参加は限定されていた。しかしかれらは経済的・政治的に限定されたこの制限のもとでも、自分たちの文化的伝統を発展させたのである。かれらはひくくおかれた自分たちの教育状況にもかかわらず、またこの時代の精神的生産・消費の優勢な諸形式を基礎としながら、かなり広い範囲にわたって言語文化財の口頭・記憶による伝承方法を活用した。このさまざまな限界のなかにありつつ、かれらはおおきな創造的能力と行動力を展開した。とくにかれらの文化的伝承のさまざまな変種をともなう形式の豊富さは卓越しており、あら

* Wolfgang Steinitz : Arbeiterlied und Volkslied; in : Deutsches Jahrbuch für Volkskunde 12, 1966. —ここに基本思想が示されている（訳者）。

ゆる国民的文化の重要な遺産を形成した。

25). 資本主義の発展と大衆娯楽小説の発展

結局のところ資本主義は、労働者大衆を資本主義的評価と搾取の過程にくみこみ、その度合に応じて、勤労人民が文化を創造するこうした諸活動の存在の基盤をひろい範囲にわたって破壊してしまう。資本主義的社会秩序は都市と農村の労働者大衆、とくに工場労働者大衆をとらえ貫徹する。これはもちろん生活方法を根本的に変化させ、文化生活を決定的に変化させる。いわゆる「家父長的」な、つまり個人的直接的な諸関係の特性をそなえ、生産活動の原始自然的な限界性をもつ、田舎の労働者と手工業者や手工業徒弟と都市の他の層にとっても特徴的である、労働- および共同体生活における緊密な結びつきというものは、加速度的に解体した。それと度合をおなじくして勤労人民の精神的・文化的生産の諸形式と、生活の諸関係に照応した伝承- および創作方法の土台はますますとりはらわれた。そのためとくに、急速に成長した工業地帯のプロレタリアートと半プロレタリアートが、みずからの創作活動によって文化的・美学的要求をみたそうとする諸活動、この何百年にもわたって発展してきた諸活動は中断されてしまった。しかし他方、資本主義生産にとって必要な最小限の学校教育が拡張されたため、読書能力は人びとのあいだにゆきわたる。この二つの傾向の進展とともに文学受容の要求が高まり、それを満足させるために大衆娯楽小説が発展した。資本主義社会が独占段階にはいる発展過程で、この文学的生産は反動的帝国主義的「大衆小説」に発展した。この文学は通例もっとも貧しい美学的水準にまとを合わせ、読者にイデオロギー的影響をあたえることをおしすすめた。そして大衆が美的な要求をもたないよう、精神的文化的に受動的なままであるようつとめた。

26). 伝統的民衆文芸の後退とあたらしい形式の獲得

勤労する階級と社会層のおおくの部分、とくに農村労働者および小農民、農村と都市の手工業労働者・徒弟たちのなかには、なおおびただしい量の民衆文

芸の伝承、そのジャンルと創作方法が生きた形で保持されていた。資本主義、とくに帝国主義の国家における教育状況や、主として小・中規模の工業・農業の経営により形をあたえられた従属的な階級状況、その生活方法は、これらの社会層に属する人びとが、人文的・文化的遺産の全体と接する道をとぎし、社会的・文化的進歩をになう勢力とむすびつくことをむずかしくした。民衆文芸の伝統的な題材と表現方法は変化した社会的諸関係に適合することにより、人びとの文化的要求とコミュニケーションを満足させた。この文化的要求とコミュニケーションは、うえにのべた社会諸層の具体的な生活関係から生じ、その意味することの重要であることが感得されたから、少なくとも部分的には民衆がみずから創造する文化活動や自分たちの生活を表現することを可能にした。その当時とくに農村・小都市といった交通の上でもまた工業からも離れた地方で伝統的資料の大収集をすることができたのはそのためである。ブルジョアの収集家はおもに過去に視点をさだめていた。だから進行していた諸変化がレパートリーの全体においても、また個々のタイプ・題材においても現れていたのにほとんど充分には収集されなかった。歴史的に貫徹する傾向だが、オリジナルな民俗的諸伝統は、社会辺境、発展の少ない層、とくに雇用関係のよりまずしい農村住民のなかへ、そして遠隔地域のなか、また単独の現象へとおしやられた。この事実は理論的に一面化され、民衆文芸は没落するというテーゼに通ずるものとなった。

だが、こうした一面のみを見ることはよくないであろう。

資本主義的發展は、近代の労働者階級、つまり資本主義の墓をほる者を生みだしただけではなく、そもそも搾取社会の墓をほる者を生みだした。労働者を搾取から解放し、階級のない社会を生ぜしめることが労働者階級の政治的歴史的使命であるが、これは文化的な側面をもっている。労働者階級はいままで達成された人類の文化でかつ将来にわたり効力をもつ諸業績や、たかく発展した文化の諸形式・可能性の成果を自分のものとする。このことによって資本主義のもとにありながら、すでに社会主義文化の諸要素をつくりだす。労働者階級のなかでは、言語文化の民俗学的存在形式を基礎とした創造性は後退するかも

しれない。しかし支配的な搾取者組織に対抗して、みずからの創作活動と革命的階級としてのたかい発展を求める斗争において、潜在する創造的能力は他の文化の領域と形式によって実現し、拡大する。だから民衆文芸の領域にかんしても、創造性の没落を意味することはなく、他のよりたかい形式の文化的生産性を獲得し、それを自由に使いこなすことによって一層の発展にたつするであろうことを意味する。

27). 文学による伝播の獲得と素人の創作の発展

工業労働者も、とくにその発展の初期にもまたあとにも、特別な目的をもって、また特別な状況において、伝承された民衆文芸の形式・ジャンルを活用しはした。しかし組織をつくり教養を身につけようとする労働者階級は、歴史のおよび文化的に限定された勤労者の自己活動という芸術活動のやり方にとどまっていた。プロレタリアートが支配階級にたいしておこなう階級斗争において、かれらが歴史的使命を自覚した度合に照応し、また革命的な政治・文化政策をもった組織に結集した度合に照応して、勤労人民がアマチュアとしてする芸術創作をよりたかく発展させるための出発点と基礎がつくりだされた。プロレタリアートはあたらしい生活関係にはいり、あたらしい社会的・政治的課題をもったから、芸術・文化の領域においても、あたらしいさまざまな内容・ジャンル・創作上の方法、またコミュニケーションと伝播のあたらしい手段を獲得し駆使したいとおもうようになった。いままで支配的であった口頭・記憶によって、ヴァリエーションをうみだす伝承や、そのシステムにより決定されたジャンルのかわりに、発展した文学上のジャンルや創作方法、発展した媒体、特殊な生産性をもつ諸形式、また文字を媒介とする伝播・伝承がみなものとなるようになった。階級斗争の要請に応じ、あたらしい作戦的な文学的ジャンルと伝播方法が発生した。革命的な労働者文化運動の構築と発展とともに、労働者階級の進歩的部分は、すでに資本主義のもとにあって、発展した形式と媒体をものにしたアマチュアとしての創作の重要な出発点と要素をつくりだすことに成功した。こうして勤労者のアマチュア的創作と職業的芸術のあい

だにある歴史的対立を克服する道の第一歩がふみだされる。労働者階級と進歩的芸術家のあいだのさまざまな結合がはじまり、これは共同の斗争によってより緊密なものとなる。そして労働者階級自体のなかから芸術家や作家がうまれてくる。

28). 芸術家と一般民衆の対立の解消

労働者階級と革命的政党の指導によって勤労人民が搾取と抑圧から解放されたのち、これらのさまざまな要素やまた発端としてのみ存在したものが完全に展開されるようになる。そしてやがて苦心してつくりだされる社会主義文化の支配的な現象形態に発展してゆく。芸術家と民衆の対立、「芸術歌曲」と「民謡」のごとく概念のうえで一般化された対立は、階級の対立する社会の精神的文化の特徴であり、ブルジョア的民間伝承研究にとっては絶対的な対立とみえていた。しかしこの矛盾は階級的な制約のため橋渡しすることのできない矛盾というものではなくなる。社会主義は、芸術家と民衆が次第に接近するための経済的・社会的な諸前提をつくりだす。もちろん社会主義社会の文化財 -たとえば歌謡財のあいだにはひきつづき相違はのこる。ゆえにさまざまな機能の、さまざまな美的水準のうたが存在しうるであろう。人間社会の階級や社会層がもつ文化的可能性の社会的限界と制限は、原理のうえでは止揚され、歩一歩と克服されるであろう。

29). アマチュアによるあたらしい内容・形式の創造

芸術活動・創造のための物質的・精神的な諸条件は量的にかわる。すると必然的に精神的生産の形式と実現の仕方もかわる。歴史的にかなり早い時期の段階の民衆文芸にくらべ、アマチュアによるあたらしい創造は、伝承資料の変化性や恒常的なつくりかえによって本質的に特徴づけられるのではなく、つねにあたらしく、ますます拡大してゆく内容と形式によって特徴づけられる。その伝承・伝播は、おもに口伝 - 記憶伝承によって規定されるのではなく、文学的・文献的、また視聴覚的技術 - つまり民衆にありあまる量で使用に供せられ

ている現代的コミュニケーション手段の拡大によって規定される。ここに発生する物語りないし歌謡財は、各ジャンルやタイプの比較的安定した規範によるよりは、民族的・国際的な進歩的文化のジャンルとその形成方法の習得により、よりおおきく性格づけられるようにおもわれる。

30). 社会主義社会の発展と勤労人民の文化活動

ここでは、もちろん民族的なさまざまな特殊性が後慮されるべきである。この特殊性は歴史的・文化的発展のさまざまな過程が民族により不均等であることにより生ずる。K・V・ツイストフは、この過程について、こう判断している。「とくに重要なことは、ソビエト連邦で文化革命が遂行されたのが、ソビエト連邦内のたいていの民族で一定ジャンルの民間伝承がまだ生きている時点であったことである。ある一定の年令・社会層の人びとのあいだでは、まだ民間伝承は生産的にもちいられていた（民俗学・文化史 新版・第5巻・1977年・76頁）」。

創作方法としてのヴァリエーション形成、口伝によるコミュニケーションの諸形式と伝統的なジャンルは、いかなる民族文化の発展においてもまったく消えてしまうということはない。ドイツ民主共和国における60年代半ば以降の歌唱運動- さまざまな経営体における集団的な歌唱、団民軍の歌唱、祝典、祝祭や社交会などで、有名なうたをもじってうたっているおおくの事例を観察し、あるいはまた社交会や企業の文化サークルであつかわれる物語りの諸形式を観察してみるとこのことがわかる。内容と形式のうえで - テキストのつくりかえと新作に特徴的な- かなりおおくの比較的古い民衆文芸伝承が、従来みられたよりもおそらくおおく、創作における生産性のありとあらゆる可能性を展開するためにもちいられている。社会主義社会では、アマチュアが詩的・文学的創作にたずさわる機会と創作方法があらたに優勢を占めるようになり、またこれは社会主義の特徴をそなえている。本質的には民衆文芸のさまざまな伝承はそのかげに後退した。社会主義社会秩序の建設によって労働者階級と他の勤労する階級と社会層は社会的に解放される。その基礎のうえに創作におけるこのあたらしい内容と形式が勤労人民の文化活動のなかで展開される。

こうしてはじめて労働者階級と勤労する社会層に属するすべての人びとにとって、教育・文化水準を恒常的に向上することが可能になった。それと同時に芸術創造力のこのあたらしい諸形式はよりたかいさまざまな要求をもつようになる。これらの形式は伝承的なものよりいろいろな点で複雑にみえる。だからこの諸要求は、教育の水準と文化意識のたかまりの成果であるにとどまらず、社会の全構成員のあいだに展開される恒常的に前進するたかい発展を前提としている。勤労人民の芸術活動のあたらしい諸形式が一般的に実現され展開されるということは、かなり長期にわたる歴史的過程の結果としてのみ可能である。この過程は、社会主義から共産主義への法則的な移行において、社会主義的文化革命、つまり社会主義的な生活形式と人格をつくりだす重要な構成要素を形成する。だからはたして社会主義民衆芸術の運動内部でおこなわれている労働者の著作活動や歌唱クラブ、また演劇クラブその他の諸活動など、この方向でなされた進歩は、社会主義社会秩序の諸条件のもとにおける民衆文芸発展のさまざまなあり方を示している。

社会主義文化と伝承文化

社会主義文化の発展との関連においても、伝承された民衆文芸のさまざまな伝統やジャンルにおいては、占める位置による価値の変化が生ずる。階級の対立するさまざまな社会においては、人民の優勢な多数をしめる搾取され抑圧された勤労階級・勤労する社会層にとって、革命的プロレタリア的文化運動が創出されるにいたるまで、さまざまな伝承は言語・芸術領域における創作的活動と文化生活のほとんど唯一の表現であった。それに反して、社会主義社会においては、さまざまな伝統は、人間文化の文化的芸術的諸価値の全財産の一部をなす。だから諸伝承を保持し、みずから批判的・生産的に獲得し、さらに発展させることが、労働者階級と全勤労人民の歴史的課題となった。

諸問題点および結語

ここにのべる理論や構想における諸観点を上梓するにあたって、なおおくの缺けている点や未解決な点があることは、われわれの研究段階に照らしても当然のことである。たとえば民衆文芸にかんする国内的・国際的関連については、まだ充分には研究されてはいない。ここでは展望としてまた一般的な関連として暗示されたのにすぎない。中心にはドイツの民衆文芸の論述がおかれ、なされた一般化と理論的帰結はこの論述についてのみにあてはまるだけである。しかしここでもなお研究のうえで重大なる缺落がある。50年代のなかば以降、この分野を専攻しはじめた研究者の小さなグループは、ドイツ民衆文芸の分野における民主的・革命的諸伝承をあつめ、そして研究することに集中した。一定の展望をもって学問的处理と文化政策的実践のため膨大な資料を開明し、あたらしい本質的認識をえた。けれどおくの専門分野と無数のやっかいな問題が複合をなし、その間まだ手つかずのままにのこった。本書に示されたジャンルでは、いわゆる伝統的ジャンルが支配的である。これはドイツ領域における封建主義の創出以降、1000年以上にわたるドイツ民衆文芸の歴史的発展というはじめからの全歴史をかんがえたならば、あたりまえのことである。もちろんここにあつかわれた全ジャンルは「伝承的」であるのみならず、その一部はなおきわめて活発である。たとえば「うた」、「アマチュア演奏」およびその他。ゆえに執筆者はそれぞれに論述を現代にいたるまでのさまざまな発展とさまざまな変転に関係づけることに努力した。にもかかわらず、その民俗学的研究はなお不十分であることを認めざるをえない。「民衆本」と「大衆小説」の章では、民衆文芸の多様に接しながら、かつ性格的対照をなす特殊な文芸の諸形式をあつかった。これは初期資本主義発展の歴史的時期にみられた書物印刷の展開以降、民衆のなかにますます大量にもちこまれ、「ポプユラーな読みもの」としてひろめられた。「初期労働者自伝」の章では、継続的発展のさまざまな傾向をあきらかにすることをこころみた。われわれの構想からみて特殊な章「労働者がペンをとる運動から生じた文学」があつかわれなければならないこ

とには疑いの余地はない。けれどもわれわれの研究上の諸観点からみて、この重要な諸分野の研究にとって発端となりうるものはほとんどなかった。そのため概括をこころみる民俗学的論述はいまだ不可能である。のちの版においてこの章をつけくわえることは必要な課題であり、できればそうしたい。

広範な読者に全体の俯瞰をあたえるというのが本書の性格になっている。そのためさまざまなその他の制限をうけることになった。民衆文芸は、そもそもきわめて多層的な領域である。ゆえに完全性を追求することも、それを果すこともできない。であるから民衆文芸の内容・形式の点でジャンルの多面性と変遷は、結局のところただえらばれた領域と例をてがかりとしてあきらかにすることができただけである。

以上の限定性にもかかわらず、われわれとしてはこの一卷本の論述において、広範な読者にたいしてドイツ民衆のジャンルと問題について、必要な情報と文化政策のうえで役立ちうる資料を提供できるようねがっている。

全巻の完成のため、全執筆者がその担当する特殊な章をこえ討議または文書により関与した。フィリップ・レクラム社（ライプツィヒ）、原稿審査員アイケ・ミッデル氏にたいし、本書のため理解あるお世話をいただき心からお礼をのべる次第である。

（昭和60年5月21日 受理）

ドイツ民謡の収集と研究について

-研究資料・編訳：ドイツ民主共和国・
ベルリン科学アカデミー・歴史学—民俗
学中央研究所 ヘルマン・シュトロバ
ハ「ドイツ民衆文芸入門」・歌曲（1.
収集と研究）-

Ⅲ

坂 西 八 郎

Sammeltätigkeit und Erforschung der deutschen Volksdichtung^{*)}

Übersetzung aus dem Buch:

„Deutsche Volksdichtung. Eine Einführung“

(Hrsg. v. Hermann Strobach, Leipzig: Verlag

Philipp jun. 1979)

Hachirō Sakanishi

Abstract

There have been many standpoints from which to observe the phenomena of folklore. Hermann Strobach from the standpoint of Marxism analyzes the relationship between social development and folklore. He finds that the creative activity of the people is the most important moment for the formation of the variations in the field of “oral tradition”.

*) This paper is a translation from the book : Deutsche Volksdichtung (ed. : Hermann Strobach Leipzig : Verlag Philipp Reclam jun. 1979)

1). ヘルダーの民謡・民衆観と国民文学

「民謡」という概念は、この概念によって特徴づけられる現象よりは本質的にあたらしい。というのはこの概念を鑄造したのはヨーハン・ゴットフリート・ヘルダーで、これは18世紀の70年代はじめてになってからのことである。ヘルダーの基本的立場をみれば、かれが民謡をどう理解していたのかはわかる。かれの言葉によれば、その立場は「思弁によるよりも行動により教育された」人びと、かれにとって「尊敬する大部分の大衆」との間柄に根ざしている*。ヘルダーはある社会的諸勢力を想定した。この勢力が-そもそもヘルダーの感化を受けて- 発達しつつある革命的な時代意識を理解し、その勢力のなかのブルジョアジーが主導して封建的絶対主義勢力に反対し、国民を形成することをねがった。このような社会的勢力全体のなかに勤労者の諸層、つまり民衆を編入すること、ヘルダーの民衆概念の歴史的意義は、さまざまな曖昧さにもかかわらず、ここにある。ここしばらく、「人びとが目覚めてうまれかわる、という考え以外、わたしをはげましようかしたものはない」**、とかれは言っている。当時18世紀の最後の三分の一、社会は進歩し、封建的諸関係を克服して市民国家を形成することが必要であった。民衆に目をむけることは、ヘルダーにとって、こうしたことのための必要な条件であった。「われわれが民衆をもたず、公衆をもたず、国民をもたず、われわれのものであり、われわれの内にあって生き働く言葉と詩芸術をもたなければ、すべてはこのまま永久にかわらない」***ヘルダーはこの過程において文学におおきな意義をあたえた。文学は、もし歴史的課題をはたそうとするならば、民衆に関係しかつ民衆的でなければならぬ。あるいは「古典的な気泡」****でなければならぬ。かく

*) Herder の引用は「ヘルダー全集」(Suphan 版), Bd. 5, S. 182 および S. 200.

また Hermann Strobach, Herders Volksliedbegriff. Geschichtliche und gegenwärtige Bedeutung, in: Jahrbuch für Volkskunde und Kulurgeschichte, N. F. 6, 1978, S. 9~55.

**) 同全集, Bd. 28, S. 556.

***) 同全集, Bd. 9, S. 529.

****) Klassische Luftblase, 同箇所.

てヘルダーは民衆にむすびついた現実的な国民文学のプログラムを展開する。かれの見解によれば、この国民文学は民衆の歴史と生活にむすびつき、自国民の伝統に立脚しているときにのみ生じうるのである。かれは丁度このようなプログラムが自分の世紀の支配的な文学のなかにあるとはおもわなかった。かれの時代の文学は「国民という幹から芽のごとく生じたもの」*ではなく、他の諸民族の模範をまねていた。とくに、絶対主義の方向を目指していたフランス古典主義の模範と、具体的な歴史的生活諸条件から離れて抽象的な規範によって絶対化されたギリシャ・古代の詩という模範をまねていた。しかし英文学のなかならば、詩芸術にもとめるこの民衆との密接な関連を確認できる、とヘルダーはおもった。これは「自国民自身に根ざし、国民によって書かれ、民族の信仰と趣好、昔からの遺産にもとづいて形成された」文学である。「これによりイギリス人の詩芸術と言葉は国民のものとなった。民族の声はもちいられ重ぜられている」**と。

2). 模範としての英文学

英詩、なかんづくシェクスピアの詩と「民族の声」をそのように重視する状況を通じ、ヘルダーは民族のポエズー観と創造すべきドイツの国民文学にとってふかい鼓舞となるものをイギリスから知った。ヘルダーは、「オシアンと古代民族のうたにかんする往復書簡抜粋」-ここにはじめて「民謡」という概念があらわれた-という論文を、1771年に執筆して1773年に刊行した冊子「ドイツ人の本性と芸術」のなかに発表した。この論文と、1777年に発表した小論文「中程度の英語とドイツ語の詩芸術の相似について」のなかで、ヘルダーがこうした考え方を被露したことは、特徴的なことである。1760年にスコットランドの詩人ジェームス・マクファースンは、「古代詩の断片」をガリア地方の盲目のバルデ詩人オシアンの歌唱として出版した。これらはもともとわりとあたらしいスコットランドの伝承をもとにしたもので、マクファースンが創作し

*) 同全集, Bd. 9, S. 529.

**) 同個所.

たものであることが明らかになった。5年のちにイギリスの牧師トーマス・ペルスィーが「古代英詩の遺物」をもってこれにつづく。これは3巻本のイギリスのパラード集で、とくに15世紀から16世紀までの古いものである。大部分は1650年頃に編集された原稿による。ペルスィーはこのパラードに手をくわえ、さらに後の時代の英詩人の数編の作品をくわえたのであった。

3). 古い民謡の収集

イギリスの模範に勇気づけられて、ヘルダーは熱心にドイツの歌謡をあつめることをよびかけた。「ドイツの祖国愛が、たとえ灰と泥にまみれようとそこには火種となってくすぶっているであろう」、*と。当代の詩にあっては、この「国民的な考え方」は広い範囲にわたり生き埋めにされているとおもったので、かれは前世紀の歌謡のなかにこれをもとめた。そしてかれは、芸術と民衆の伝承が今ほどおおきくかけはなれることのなかった昔の時代の詩をあつかった。17世紀中葉以後、後期封建主義的絶対主義のおよぶ範囲のなかで、またその影響により、このかけはなれ現象が生じたのである。同時にかれは、この「今生きている姿の民謡の名残」**にある民衆の「考え方や感じ方」を、町や田舎、「小路や魚市場で、民衆が教育をうけないやり方でうたいあっているなか」***にさがしだすことを要求した。自国民がかれにとっては全人類の一部であったように、かれの視野は自国の民衆のみに限定されてはいはしない。「オシアン、野蛮人の、奴隷のうた。ロマンツェ、田舎の詩などは、われわれをより良い軌道にのせてくれるのではなかろうか」、とオシアン論の結論にのべられている。****

*) 同全集, Bd. 25, S. 7.

**) 同個所

***) 同全集, Bd. 5, S. 189.

****) 同全集, Bd. 5, S. 203.

4). ハーマンの影響

すでにリガ時代の1764年から1769年まで、ヘルダーはケーニヒスベルクの先生ゲオルク・ハーマンから影響をうけ、レット人農民の歌唱を研究した。以来かれは文献によって、民衆のうたや「教育によってそこなわれていない」民衆の歌唱についての報告を、入手しうるかぎりあつめた。北欧古代スカンジナビアの吟唱詩人の詩、レット人の、リトワニア人の、ラブラント人の愛の小曲、そして最後にはアメリカ・インディアンの歌謡その他もあつめた。

5). モンテーニュの影響

ここに16世紀アメリカ原住民のポエズィーの発見者たちにさかのぼる一本の線がある。フランス人の哲学者ミシェル・ドゥ・モンテーニュは1580年に「エッセイ」のなかで、一つのブラジルのうたを報告し、その詩的な美しさをヨーロッパ人の芸術詩と比較したのみではなく、自分の国の民謡、ガスコーニュのヴィラネラのうたを想起している。かれはブラジルの例から推論して、学問も文字も知らない民族のなかにもポエズィーは存在するとのべている。おなじ考え方をおなじ頃イギリス人のフィリップ・シドニーは「詩の防衛」のなかでくわしくのべた。すぐ後1609年、スペイン士官とインカ族出身のペルー婦人とのあいだにうまれたガルシラソ・ドゥ・ラ・ヴェーガは、インカ帝国とペルー人の征服の叙述のなかで、二つのペルーの歌謡を報告している。

6). 諸民族のうたについての関心

ヘルダーは、これらすべての提起をうけいれ、ひきつづきおこなった民謡研究に関連する自分の見解の全体の中にとりいれた。1773年、かれは「古い民謡」の印刷原稿をまとめたが、これは4巻のうち数編のドイツのうたとともに、イギリスのバラード、シェークスピアのうた、ソルブ、リトワニア、レット、エストニア、ラブラント、グリーンランド、アイスランドおよび古代スカンジナビアの吟遊詩人たちのうたをふくんでいる。印刷工程の遅延と面倒さ

のため、また自分の民謡論にたいして攻撃がはじまったため、かれは民謡集をひっこめる気になった。論文「英国とドイツの平均的な詩芸術の相似について」によせた序文をかれは書きかえた。やつと1778年から1779年にかけて民謡集は二部編成で、「民謡集」と題してライプツィヒから出版された。これにとりあげられたうたの量はいちじるしくふえた。とくに最初の原稿ではみられなかったデンマーク、フランス、イタリア、ギリシアその他の民族のうたがふえたのであった。「古い民謡」の民族学的整理は断念された。そのかわり美学的諸観点が読者を考慮して前面にでてきた。テキストはおおくの点でより慎重にひかえめになり、またある部分は委細もらさぬという忍耐づよさで書かれている。シェクスピアの歌謡もとりあげられた。しかしいまやゲーテやマティエース・クラウディウスなど、同時代のドイツの詩もそえられてある。

7). ヘルダーの民謡概念

こうして民謡とは、ヘルダーにとっては -民族の本性、考え方、国民的特性、そしてまたこれらをむすびつける自然的- 人間的なものであった。歴史的・具体的な姿で特徴的に表現する、そのようなものであった。「諸民族の生きている声、人間そのものの声」*であった。そのようなうたは民衆のなかから生じえたか、あるいは民衆とむすびつき、国民としての自覚をもった詩人たちによって創作されうるのである。ホメロスとダンテをかれは最大の「民衆詩人」となづけた。ここに、かれが発展・進歩の可能性をもみとめたことは、かれがマティエース・クラウディウスの夕べのうたに付した注をみればわかる。かれはその注を「最上の民衆とはどのような内容をもつのか、そしてもちつづけうるのか暗示するため」、**民謡集にとりいれた。

*) 同全集, Bd. 24, S. 226.

**) 同全集, Bd. 25, S. 544.

8). 概念の具体的内容

i) 美学的・文学的観点

民謡の本質にかんするこの考え方からする論理的帰結として、ヘルダーは、そのようなポエズイーはとくに生き生きとつよく、以下のうたのなかに実現されているとおもった。まず、15世紀と16世紀のドイツにおける初期のブルジョアの高揚期のうた、それから「むしろ働らくことを通じてよりつよく」教育された自国や他国の素朴な人びとのうた、そしてまたとくに対立的階級関係や分業の展開が充分に醸成される以前、社会的発展の初期の歴史的段階にある諸国民の歌謡財のなかなどに実現されているとおもった。これらの民族、また自国民族の素朴な人びとのうたは、そのまま人間の歴史、生活、ものの見方とむすびついているようにおもえた。これらの民族の文化の段階ないしは階級や社会層の文化の段階に照応し、うたは主として口頭伝承により伝達された。だからヘルダーによってとくに重ぜられた標識、対比・繰りかえし形式・跳躍・投げかけ・逆転などの点で秀でている。かれはルターやクロップシュトックや他の詩人の詩についてもこの点をほめている。これらの視点のなかに、かれの民謡観の美学的・文学的な諸相がうかがえる。民衆にむすびついた、生活に即した文学の模範として、さまざまな民族の伝承のなかから最上のものがえらびだされなければならなかった。形式の点で、言いまわしの点で、言葉の点で表面的に模倣するためのみならず、「うたの内部の精神・内部の翻案」*がそこからまなばれうるのである。それにより「われわれの時代のものが、われわれのために、まことに自然に、高貴な簡潔さをもって、投げかけと進行」をもってうたわれうるであろう。「これらの民謡が、その時代のためにうたっていたように」。**だから、かれにとっての重要事は、より昔の時代にかえること、また単なる再生やものまねではなく、自国民や人類の歴史からもっとも価値あるも

*) 同全集, Bd. 5, S. 332. 原文 innerer Geist...

**) 同全集, Bd. 25, S. 12.

のを生産的にとりあげて発展させることであった。

ii) 文化史的・民族学的観点

ヘルダーの民謡観にとっておなじく重要であったのは、文化史的・民族学的観点であった。さまざまな国民のポエズイー、うたや「民話、童話、神話」は、人びとが歴史をただ「頭の生理学」として認識するのではなく、「ものの考え方や肉体の陶冶の歴史」として認識するために力を貸さなければならない。***この学問的課題のために、かれはすでに研究者に方法的プログラムを指示した。これが実現されうするためにはなおながい時間またなければならなかったし、このプログラムは今日もなお通用する。「諸民族のうたはあるがままになければならない。原語のままで、とはいえ充分な説明をつけて、批難されず、さりとて美化もされず、できるだけ旋律とともに民衆の生活に属するすべてとともに」****、という言葉は今日も通用する。民衆の伝承と生活の現実にたいする市民的ヒューマニストのこの正直な見方は、民衆文芸における諸機能をもみのがしはしなかった。それはエストニアの「圧政をうったえる農奴のうた」をかれが「民謡集」のなかにとりいれたことからわかる。そしてかれのコメント、とくにかれの「献辞」(1803年印刷)からもよくわかる。かれは死の直前に、あらたにうたの量をふやし、かつおなじように民族学的な観点をふまえ整理をした民謡集の出版を計画したが、そのときにこの「献辞」を書いたのであった。

9). ゲーテにたいする影響

ヘルダーの理念は、同時代の人びとのうちでも、ゲーテにたいしてもっとも持続的にゆたかな作用をあたえることになった。ブルジョア的研究文献では、しばしばヘルダーとゲーテの民謡概念を対立的にえがきだす。^{*}しかしすべての本質的な点で、ゲーテの民謡観とヘルダーの民謡観とは充分に一致する。

***) 同全集, Bd. 25, S. 65.

****) 同全集, Bd. 9, S. 533.

*) Paul Levy, Geschichte des Begriffes Volkslied, Berlin 1911.

ゲーテもまた生涯にわたり民謡をとりあつかった。ゲーテの視野もヘルダーと同じく世界的ひろがりを持ち、自国と他国の伝承を俯瞰した。ヘルダーにとってもそうであったように、ゲーテにとっても、民衆のうたは民衆の生活と個性のあらわれである。それが民衆のなかから生じようと、「秀でた個人」によって創作されたものであろうと。 **ゲーテはこの民謡の「由来問題」で - とくに「少年の魔法の角笛」書評で- すこし強調しつつうたの民衆外的発展を書いたとしても、それはその頃目立った神秘的・ロマン主義的諸観念に反対するものであった。民衆とその精神的・文化的創造力にたいする関係の決定的な点を、かれはヘルダーから熱心にとりいれた。盲目的に民謡を理想化はしない詳細な観察が、かれをヘルダーにむすびつけている。とくにかれはヘルダーによって、シュトラースブルク滞在時代に民謡収集の刺激をうけた。エルザスでかれはドイツのバラードを記録した。それをかれは1771年にヘルダーにおくり、ヘルダーはこれを民謡集にとりいれた。

10). ビュルガーにたいする影響

ゴットフリート・アウグスト・ビュルガーもそのころ民間伝承と、とくに故郷ハルツ地方の民話にもとづき、民謡風バラードを創作した（もっとも知られたるものは「レノーレ」）。かれは熱狂的にヘルダーの唱導をとりあげ、1776年にあらわした論文「民衆のポエズィーにたいする心からの挨拶」に「ダーニエル・ヴンダーリヒの本から」と題して書いている。しかしヘルダーの民謡観のごとき歴史的で詳細な具体性をもって仕事をやりとおしたわけではなかった。

11). 否定的なニコライの立場

その直後、標題からみるとビュルガーに反対していることがわかるが、ベルリンの作家・出版家フリードリヒ・ニコライは、1777年と1778年に、二冊本の民謡集「すばらしい小年鑑、美しい、真に愛らしい民謡集…、デッサウの街道

** *) Goethe, Dichtung und Wahrheit. 10. Buch; Goethe, Werke, Weimarer Ausgabe I, 42, 1, S. 306 - 307; I, 37, S. 229 f.

歌師ガブリエル・ヴンダーリヒによりうたわる」を出版した。この題の付し方からも、またとくに序言と本の内容からも、この本は興隆してきた民謡熱を引きおろそうという冷笑的な風刺であったであろう。この年鑑は、16世紀の「鉾山歌集」を消化して生かしたものである。ヘルダーが「英国とドイツの平均的な詩芸術の相似」の論文のなかで痛烈にのべているごとく「泥を一杯にもりこんであるが」、ドイツ民謡のはじめての、そして重要な部分の一つである。しかし風刺的・意図的な「どぶ川の民謡」との混合や、民謡集に付した序文は、ヘルダーの市民的・進歩的基本構想に反対するのを目的としていた。ヘルダーは民衆を尊重し、民衆にむすびついた創造すべき市民的国民文学にとって、民謡は重要な意義をもつもの、としていた。争点は、(民謡が)ブルジョアの啓蒙より出発し、民衆にむすびついた民主的なさまざまな立場に発展しようとするものか否か、である。もちろん改革はもとめようとするものの、社会組織としての絶対主義は問題にはしない、という穏健な啓蒙的立場から斗争がいどまれている。レッシングは、この民謡集に参画することをニコライから要請されたが拒否した。1777年9月20日にしたための返書で、かれはちょうどこの核心をついている。かれはヘルダーとおなじ考えで、「(価値ある民謡)を賞揚することは、きわめて重要なこと」であろう。「しかし、あなたはまさに事の重要さを風刺している…。すべての風刺は烏合の衆と民衆をとりちがえることになっている」、とのべている。

12). ヘルダーから「少年の魔法の角笛」へ

ヘルダーは、1778年と1779年に民謡集を出版したが、これはニコライの「年鑑」にたいする答えでもあった。だがヘルダーの民謡集が提供するドイツ民謡の量はまだすくなくすぎたから、ドイツ民謡がいかに豊かで多様性に富むものであるか、この書は読者に正しい想像をあたえることはできなかった。しかし民謡にたいする関心を持続的にひきおこすことはできた。文学・美学・音楽理論のうえのディスカッションにおいて、この書は以後一つの結節点をなした。しかしドイツにおける収集活動はそれから何十年かあとになって、ためら

いながらゆっくりとすすんだ。年鑑で、新聞と雑誌で、ばらばらに個々の作品がとりあげられた。そのうち挙げるべきものは、フリードリッヒ・ダーヴィド・グレーターの「ブラゲーア」である。ヘルダーの本のまる30年あと、アヒム・フォン・アルニムとクレメンス・ブレンターノが、この分野におけるおおきな仕事、3巻の民謡集「少年の魔法の角笛」を公にした（1806～1808年）。かれらがヘルダーの民謡観をうけつぎ、ヘルダーの要請をうけいれていることははっきりしている。かれらはとくに16世紀と17世紀にひろまっていたうたに注目し、印刷文献を典拠にして創作をおこなった。そのうえかれらは民衆に知られていなかったこの時代の無数のドイツ抒情詩をとりあげた。だが比較的あたらしい作品や自分自身のいくつかの作品もとりにれた。かれらは民衆のなかにいきている歌謡、友人と援助者によってあつめられたうたをはじめて再現した。その大部分は手をくわえた、そして恣意的に加工された形のうたではあったが。

13). 「角笛」とその後の諸民謡集の刊行

ヘルダーの世界的視野とくらべると、この本の視野は、ドイツの歌謡財のみにむけられていた。国民的であろうという理念が「角笛」の構想をきめている。編者たちはナポレオンのドイツ占領時代に国民的伝統の一例をしめし、国民を団結させる文化的遺産を紹介して国民的自覚をよびさまそうとしたのであった。ついでこの国民的であろうという理念には、明確に反封建主義を強調しているヘルダーの市民的民主主義の立場とはことなり、社会的対立に目をつむる傾向、つまりドイツ・ロマンティクのイデオロギーが表現されている。これによりナポレオンの外国支配に反抗し対抗するきわめて愛国的な熱狂をかきたてることはもちろんできたが、18世紀の後半におけるもっとも進歩的な市民的諸勢力のもっていた、つよい反封建的国民意識を発展させようとする志向にとつては、後退を意味した。これに関連して第三に、その副題がしめすごとく、「古いドイツのうた」をよびもどそうとしているが、これは意識的なうしろむきの解釈とむすびついている。この歌集における「古いドイツの変遷」*の反

映を「角笛」の編者たちは「あたらしいもののつむじ風」**と「あたらしい時代とその主義が暴力的におしよせてくること」***をふせぐ遮蔽と評価した。二人のロマン主義者は、反対すべきこの「あたらしいもの」がフランス革命中のできごとやその成果のなかに体现されているとおもった。アヒム・フォン・アルニムは直接これをくわしく論じている。また民衆の生活条件と生活方法にたいしてあたえる資本主義の作用、つまり「家父長的、田園的關係」****や人間的個性が、資本主義的疎外と労働の分化によって破壊されること、ここに「あたらしいもの」が具体的にあらわれているとおもった。この疎外と労働分化は、英国やフランスなどのすすんだ国にも、またドイツ領土にも、昔のヘルダーの時代とくらべよりはっきりと現象となってあらわれてきた。こうして「魔法の角笛」編者の民謡観は、大部分のドイツ知識人の矛盾にみちた意識、つまりあたらしい歴史的段階において、社会的進歩の道とその内容にたいして態度をしめすことを要求されたドイツ知識人の意識、これを反映している。フランス革命は勝利した。しかしドイツの諸関係はブルジョア的・資本主義的転換への革命的移行ということでは十分に成熟していなかった。くわえてナポレオンは独裁をおこない、膨脹政策をとっているという印象をあたえていたのであった。

同時代の、あるいはまたそれにひきつづく民謡研究も-資料のあつかい方にたいして異論をとなえている研究すら-「角笛」から決定的な影響をうけた。とくに「ふるい」歌謡財をもとめる志向は、なおながいあいだ決定的なものであった。いまや地方地方ではじまった「生きている」民間伝承を収集することも、「ふるい」うたをこのんだ。その大部分は、15世紀と16世紀のドイツのう

*) Achim von Arnim, Nachschrift an den Leser; in: Des Knaben Wunderhorn, I. Teil, Heidelberg 1806, S. 474.

**) 同, Von Volksliedern, 同書 S. 438.

***) Clemens Brentano, Zirkular von 1806; R. Steig および W. Grimm: Achim von Arnim und die ihm nahestanden, Bd. 1: Achim von Arnim und Clemens Brentano, Berlin 1894, S. 177.

****) Karl Marx und Friedrich Engels, Manifest der Kommunistischen Partei; in: Marx/Engels, Werke, Bd. 4, S. 464.

たに特徴的なジャンルと題材である。ヨーゼフ・ゲオルク・マイナートの包括的なはじめての地方民謡集は、クールレントヒェンの方言で「古いドイツの民謡」を提供した（1817年）。このやり方は、根本的にルイ・ピンクの編んだロートリング地方の「消える曲」（5巻、1926年 - 1962年）までつづき、たいていの似た企画の地方民謡集までつづいている。

歴史的な研究が民謡の文学的再生とますますいれかわっていった。1844年と1845年に、ルートヴィヒ・ウーラントは「古高地・低地民謡集」を出版した。かれはこの書を「道徳的なあるいは美的な模範的民謡集ではなくて、ドイツの民衆生活の歴史への寄与」*としたかった。このことをかれは序文で強調している。ひろい範囲にわたる問題をあつかった論文をかれはいくつか載せているが、そこでかれは自分の歴史的知識を展開している。またくわえて、かれは30年代に構想をたて、やっと1845年に完成した序文のなかで民謡にかんする諸観念をのべ、民謡史を概括している。かれの典拠は、主として16世紀の印刷されたか、あるいは手稿のままの民謡集、ピラかあるいは個人の収集であった。ほんの僅かな「比較的ふるいスタイルの作品」**をかれは当時の口頭伝承からとりいれた。しかしまたふるい歌謡財からもえらびだした。しかも様式と美学のうえからみて、単純・素朴ということを標識にしたのであった。うたは主として口頭 - 記憶伝承によるから伝承過程でそこなわれはしまいか、「真なるものが削りとられ」はしまいか、その点を注意ぶかくみてそのようなものを除去していった。かれはこうした批判・選択的なやり方によって原型を創出しようとした - 「民謡をその眞の要素に還元する」***こと。伝承に対抗して歴史学・文献学的忠実さをめざす熱烈な信仰告白にもかかわらず、この民謡集には「ポエーティッシュ（詩的）な時代」の構成が宣言されている。ウーラントはこの時代を、ドイツにおける初期市民革命に通ずる、かつその文化的影響の支

*) Ludwig Uhland, Alte hoch- und niederdeutsche Volkslieder, hrsg. von Hermann Fischer, Bd. 1. Stuttgart und Berlin o. J., S. 13.

**) 同書, Bd. 2, S. 262.

***) 同書, S. 263 f.

配する時代、と詩的に神聖化した。「封建的騎士階級の支配のもっとも輝ける時代はおわり、蘇生した民衆歌唱と…歩をあわせ、市民階級の、地方によっては農民階級の自覚がつよくなって」いったというのである。ウーラントによれば、この時期に花をひらく民謡は一つの全体をなし、そこに一つの音調が貫通する。精神は解放され、「さまざまに分かれた身分階級が国民として一つにあつまり、理解しあう」*。

14). ウーラントの立場の変遷

ここでは歴史的認識と幻想がまざりあっている。三月前期にはドイツの市民階級の経済的基盤は、工業革命の前進によって急速につよまり、階級対立はするどくなった。その時期にウーラントの作品は、ドイツのブルジョアの階級発展の初期の重要な文化遺産、そして反封建運動のはじめの時期の文化遺産をおさめている。このころかれは、まだなお民主的・進歩的な、市民的国民といった統一的単位の前進を強調する幻想をもってこの遺産を受容していた。だが1848年以降、この受容の態度は変化し、国粋主義的性格がきわだってきた。そしてリーリエンクローンの「1530年頃のうたにおけるドイツの生活」(1884年)もおなじ態度をとるようになった。「ツップ・ガイゲン・ハンスル」(1909年)の青少年運動は、とくにこのふるい歌謡財にたちかえたものだが、さらに社会の帝国主義的發展に背をむけた小市民の反応を表現する形式として役立った。

15). 三革命の時代と民謡集

ウーラントの時代には、この進歩的な市民的民主主義にきわだってあらわれた進歩的傾向が広範囲に形成され、ふるいドイツのうたの評価と、ウーラントに近親して市民的民主的であるという基本的立場が民謡研究に形をあたえた。

*) Uhlands Schriften zur Geschichte der Dichtung und Sage, Bd. 3, Stuttgart 1866, S. 4.

三月前期と1848年の革命の政治的發展とあきらかにむすびついて、とくに19世紀の中葉おびただしい地方民謡集が発生した。市民的愛国主義者ホフマン・フォン・ファラースレーベンは、1842年「シュレーズィエンの民謡」を刊行した。15世紀ないし17世紀のうたも出版された。ルートヴィヒ・エルクは、もっとも成果をおさめた19世紀の収集家で、二万曲をこえる記録がのこされている。かれの仕事そのものは、1864年の出来ごととむすびついている。ルートヴィヒ・パリール・ズィウスは、1864年に民主的な態度をとったため郡司法官の職を去らされたが、50年代にアルトマルクで収集をおこなった。フランツ・ウィルヘルム・フライヘル・フォン・デイトフルトの「フランケンの民謡集」(1855年)もまた、かれのおおくの歌集ともども反封建的歌謡財とあまたの「歴史的民謡」をおさめている。かれは16世紀と17世紀の歌謡財の研究に没頭したのであった。

16). ドイツの帝国主義的發展と民謡集

ドイツのさまざまな状況にとって特徴的である反動的なユンカー的・プロイセンの軍国主義と融合しつつ、資本主義的な生産関係と社会関係が完全に貫徹してゆくのにともない、とくに世紀のかわりめにおける帝国主義的段階への移行にさいしては、民謡研究にも反動的で反民主主義的な、排外的なさまざまな傾向が発生した。その特徴として三巻の「ドイツの歌の宝」をあげることができよう。これはフランツ・マグヌス・ボエーメが、エルクの収集・刊行をもとに1893年 - 1894年に刊行したものである。それまでおこなわれた収集成果の編集・刊行で、なお依然としてドイツ民謡のもっとも包括的な出版物である。この書では、ただ単におおくの学問的になげやりなやり方がこびりついているというだけではなく、反体制的・反軍国主義的歌謡財を意識的に抑圧し、伝承を直接改悪することがおこなわれている。無数のドイツ民謡集が、とくに1900年以降、反動的・排外的な、直接的に帝国主義的戦争準備に幾重にも役にたつドイツ民謡像の改悪に寄与した。1908年にあらわされた二冊のハントブーフ、オットー・シェルの「民謡」とオットー・ボエッケルの「ドイツ民謡ハントブーフ」

フ」にはじまり、かつての東ヨーロッパのドイツ植民地域やドイツ言語語島地域の、とくに20年代、30年代における収集にいたるまで、-重要なふるい伝承歌謡財の本質的部分をもたらしたとはいえ- すべてますます排外主義的志向をおび、ファシズムの時代にはついに公然と人種政策の諸目的に役にたつものにさせられた。

17). あたらしい民謡観の発展

世紀のかわりころの発展にとって特徴的なこととなったのは、あたらしい民謡観が普及したことでもあった。ブルジョアの書物ではこの民謡観の普及ということは、学問に内在的な事態の進行だけに帰せられる。地方でおこなわれている歌唱をおさめた一般の民謡集が増加したこと、とくに前世紀90年代に地方とむすびついた民俗協会や民俗学会が設立され、-とくに田舎では、その時代にうたわれていた歌謡財の収集がふえた。よりふるいうたはレパートリーとしては僅少となり、大部分は18世紀、19世紀の第二、第三級の詩人のうたであることがわかる。

18). ジョン・マイアーの「受容説」

ジョン・マイアーは、「ドイツの芸術歌曲と民謡」と「民衆の口にうたわれる芸術歌曲」(両者とも1906年)の二書において、この認識を一般化した。かれは歌謡財の一つ一つの由来を重視して民謡概念を構築し、民謡をまず(民衆により)拾いあげられた芸術歌曲(受容説)とした。これは民衆のなかにひろまるとき、一人一人の著作権や作者は無視される、という(民衆が主人公である)「支配関係」にもとづき、音楽的・歌詞的な姿はつねに変化する。しかしこの民謡観の核心には、民衆は精神的に非創造的であるというテーゼがある。かれは各所で以下のごとくのべている、「民衆、すなわち国民の下層は、純粹に時間的发展についていえば、つねにあとからついてくる。精神王国のテーブ

*) John Meier, Kunstlieder im Volksmunde, Halle 1906, S. XII ~ XIII.

ルからおちこぼれた残りかすで生きていくのだ」。^{*}ここには、ただ文献学のうえでの成果が一般化されているばかりではないことがあきらかにわかる。帝国主義の完成段階において、広範な民衆層の水準を奇形なものにする資本主義の影響力を絶対化する民衆観がむしろ表現されている。しかも革命的な労働者階級の戦斗的な文化運動が、これにたいして積極的に反対したという傾向を無視している。これは反動的・エリート的な、客観的には帝国主義的ブルジョアジーの利益を反映する民衆概念へとゆきつく。この概念は、広範な民衆層の文化的悲慘さの責任を、民衆を支配する社会組織ではなく、組織そのものの犠牲者へと転化する。1918年以降ハンス・ナウマンはこのような民謡概念の基礎のうえに、民衆を軽蔑する沈降文化財理論を一般化した。^{**}

19). 「ドイツ民謡文庫」の設立と活動の展開

ジョン・マイアーは、文献学的研究をすすめたが、とくに1914年以降ブライスガウのフライブルフに「ドイツ民謡文庫」を設立し、これによりドイツ民謡の研究に重要な功績をのこした。この文庫は今日まで三十万編以上の歌謡の記録をあつめているが、マイアーは収集につくし - その一部はマイアーの理論と対立するものであるが - とくに民謡の歴史的研究に功績をのこした。マイアーはのち、自分の一面的な立場からはなれ、ふたたびつよく、まさにこの伝承における民衆の創造的能力を強調した。だが受容的側面を強調した民謡概念ははじめ広範囲に影響をおよぼしたので、これはオーストリア人のヨーゼフ・ボンマーによっておなじく世紀のかわりめに絶対化された民謡観の一面性を代表する創造説にたいしても反対の立場をとった。この創造説は民衆のなかから生じたうただけが民謡であるとしている。この民謡観をおしすすめた帰結は、民謡の決定的な標識としてなりたつものとして、口頭 - 記憶による伝承のみを考えることになる。ジョン・マイアーは、この標識が唯一の正当性をもつという考

^{*} ^{*}) John Heier, Balladen, Teil 1, Leipzig 1935, S. 33~34; 同, Zur Überlieferung eines Testamentsliedes; in: Beiträge zur sprachlichen Volksüberlieferung, Berlin 1953, S. 13.

えに反対はしたが、いわゆる「支配関係」にもとづくかれの伝播・恒常的变化の定義は、結局のところこの標識にかえてゆく。しかもその結果おおくのブルジョア的研究者たちが結局は民謡を「農民のうた」に限定してゆくということが生ずる。すなわち農村にのみ生きているうたである。そしてふたたび、とくにふるい実用歌に限定してゆくことになる。というのも、その当時において、伝承歌謡においてのみうたい替え現象が一般的に構造にかかわる本質的な重要要素とみなされていたからである。シュヴィーテリング学派（シュヴィーテリング、ゴエッティング、プリングマイアー）は、理論的・実践的にこの考えを一貫した。そしてたいていの民謡収集がこの方向をたどったのみではなく、民謡を紹介する仕事ももっぱら農村（たとえばエーリヒ・ゼーマン「民謡」1926年など）に方向を定めている。これとむすびついていたのは、惰性と耐久を特徴とする歴史をもたぬ農民層という亜歴史的教義であり、これにより、歴史的現象としての民謡を具体的にまた歴史的に研究し論述することはむつかしくさせられた。ファシズム前期とファシズム期のイデオロギーにおいて、そのような教義は結局のところ直接的に一つのイデオロギーとして、帝国主義から社会主義に移行する歴史的時期に、学問的理論であるマルクス・レーニン主義と対立せざるをえないことになる。

20). 第二次大戦後の西ドイツの民謡研究

1945年以降、西ドイツの民謡研究は、歩一歩すすんだ独占資本主義の復興との関連において、1933年までブルジョア的研究を本質的に支配してきた計画と方法を継続したのであった。この復興とともに帝国主義的ドイツの社会と歴史の発展という危険なる循環のための全能力が保持されたが、このことはしばしば意識されなかった。民謡そのものおよび民謡研究において、ファシズムの墮落からの転換がはっきりとあらわれているところでは、意識的に社会的基盤を反映しないか、あるいは問題にしない、という実証的・歴史的ファクトロジーへの限定という方向にはもはやすまない。収集と認識における進歩を決定しているのは、長期にわたるブルジョア的民謡研究の歴史によっては幾重に

もためされた確実な文献学的伝統にたいする結合である。この文献学的伝統は、レコード採録のあたらしい補助手段により発展させられた。この方向における収集と研究は、主として「ドイツ民謡文庫」の仕事で、第一にバラード研究に捧げられている（エーリッヒ・ゼーマン、ロルフ・ヴィルヘルム・ブレードニヒ、ヴォルフガング・ズッパン）。理論的・方法的にかれらのよってたつ本質的な立場は、最終的に修正されたジョン・マイアーの諸民謡観である。ヴァルター・ヴィオラは、ヘルダーの民謡観のヒューマニスティックな内容を取りあげ、絶対化された受容説の立場を克服しようところみだが、抽象的でうしろむきな・田園的な観念にとらえられていた。40年代のおわりから50年代にかけ、西ドイツではひきつづき反動的・報復的な傾向、いわゆる「亡命した人びと」の民俗学が前面におしだされた。この発展にたいする批判はまず60年代に、学生たちの自由・左翼的反体制的グループよりもちだされた。もちろんこの一部は文化遺産にたいする非歴史的・否定的な態度とむすびついていた。西ドイツの歌謡生活の現代の発展過程にたいする研究は、最近では主としてブルジョア的グループ社会学理論（エルンスト・クルーゼン）の方法によって占められている。これによれば、現実の階級関係は解消され、階級関係に照応した対立は、結局は同格的なグループ関係に「解消」されなければならない。西ドイツの民謡研究に特徴的なすべての傾向が、最近の集団的作品「民謡ハントブーフ」にはっきりと反映している。

21). ドイツ民主共和国の民謡研究

ドイツ民主共和国では、民謡研究の領域の仕事は1945年にはじまった。ヴォルフガング・シュタイニッツは、マルクス主義的民謡研究の基礎をおいた。かれははじめの目的として、民主的で革命的な諸伝統の研究と出版をおこなうことをきめた。これによって、かれはこの領域におけるドイツ民主共和国の社会的発展のあの時期、当時は急を要した社会的・イデオロギ的・文化的・政治

*) H. Strobach, R. Weinhold, B. Weisel, Volkskundliche Forschungen in der DDR; in: Jahrbuch für Volkskunde und Kulturgeschichte 17, N. F. 2 (1974), S. 11 ff., 1855.

的なさまざまな要求にこたえたのであった。*友好的な社会主義国の専門研究所、とくにソビエト連邦の研究所と連携をたもち、そしてその研究経験をまなび、かつとくにかつてのドイツ民主共和国アカデミー・ドイツ民俗学研究所に、現在の歴史学中央研究所文化史・民俗学部門が設立された。ここから民謡研究のテーマに関連する一連の出版物が刊行されている。重点をなしているのは、労働者歌曲の収集と研究であり、そのため1955年にベルリンのドイツ民主共和国アカデミー労働者歌曲文庫に中央研究所が設置された。その資料は5,000曲の労働者歌曲、850冊の労働者歌集、何千点という資料となり、全部で50,000曲の記録となっている。

22). シュタイニッツとマルクス主義民謡観

シュタイニッツは、このマルクス主義的な立場からする研究との関連において、民謡観をもまた発展させた。かれはすべての文化的諸現象の根本的な階級的性格から出発して、民謡を勤労する階級と社会層によってになわれたうたであり、おもに口頭伝承的・集团的伝承を基礎として、つねに変化するうたい替えによって、創造的に形づくられたもの、と規定した。この明確な階級的な民謡概念の規定のなかに、ブルジョアの民謡観を決定的にこえる進歩がある。この民謡観は、ドイツ民主共和国における民謡研究のマルクス主義的な出発にとって、方向を決定するものであった。口頭伝承的・記憶的うたい替えを民謡の標識とみなすとともに、この民謡観は初期の歴史的時期における勤労する階級と社会層の歌謡伝承のもつ本質的な、創造的な面をとらえている。創造性と伝承の可能性のあたらしいさまざまな形式とむすびついている進歩的な社会主義革命の過程における勤労人民の文化的活動の一層の発展は、民謡概念の更新と、あるいは生じうるこの概念の拡大の問題を提起する。この更新は、あたらしいさまざまな発端・変化・傾向をうけいれるのである。

(昭和60年5月21日 受理)

Versuch der geschichtlichen und gegenwärtigen Übersicht des Haiku auf Hokkaidō Japan

Hachirō Sakanishi
in gemeinschaftlicher Arbeit
mit

Toshio Kimura*) und Michael Großmeier**)

Abstract

This paper is the first attempt to report the Haiku of Hokkaidō JAPAN in one of the world-languages. We try to give a detailed description of the history of and the present situation about the Haiku in Hokkaidō.

The essential core of "Northern Haiku" or "Hokkaidō Haiku" has been formed as a protest against the Haiku in Honshū, the Main Island of Japan, where the Hototogisu-group leads from the standpoint of the traditional aesthetics. The characteristic of the aesthetics of "Northern Haiku" consists of, for example, many kigoes (symbol-words for the seasons), which are different from those of the Haiku in Honshū. The kigoes in Hokkaidō find the various connections between the free mentality of the people and the northern-countryside in this island. In the year 1955 the Haiku Society of Hokkaidō started. We now have a lot of well-known haijins who issue Haiku-Magazine. In this paper of famous haijins appear with their Haiku poems.

*) Toshio Kimura: wohnhaft in Sapporo, Ständiger Direktor des Hokkaidō-Literaturarchivs, Verfasser der „Geschichte des Haiku auf Hokkaidō“ (Sapporo 1978, 332 Seiten).

**) Michael Großmeier: wohnhaft in Dachau bei München, Dichter, Verfasser verschiedener Gedichtbände, darunter die international bekannten Haikubücher: „Mit Schneemannsaugen“ (St. Michhael 1980, 180 Seiten) und „Haiku“ (Pfullingen 1982, 180 Seiten, Deutsch, Englisch u. Japanisch).

Die japanischen Personennamen, die im folgenden im I. Teil Geschichte, im II. Blüte im Alltag der Gegenwart und in den Registern angegeben sind, werden in der in Japan üblichen Reihenfolge angegeben: zuerst der Familienname und daran anschließend der Vorname bzw. Dichtername, z.B.: Matsuo Bashō.

I. Geschichte

Haikai, eine der traditionellen japanischen Gedichtformen, erreichte und beeindruckte auch Neusiedler auf Hokkaidō, der nördlichsten Insel Japans, die-
ser durch die Meerenge von Tsugaru vom Hauptland getrennten Landschaft. Das
dürfte ungefähr um 1600 gewesen sein.^{1u.2}

Die Übersiedler stammten von Fischern, Bergleuten, Holzfällern und Kauf-
leuten ab, nicht zuletzt aber von dem Kriegeradel (buke), der herrschenden Klas-
se. Allmählich gründeten sie Dorfgemeinschaften an der Südküste. In ihren
Haiku-Versen drückten sie die tiefe Sehnsucht nach ihrer früheren Heimat aus
wie eine, solche sich auch in späteren haikai oft zeigt.³

Die kulturelle Tätigkeit der Neusiedler läßt sich leicht an der Tatsache erken-
nen, daß schon im Jahre 1766 dem großen haikai-Meister Matsuo Bashō (1644 –

-
- 1 Damals fand schon das haikai no renga (aneinandergereihte haikai-Verse), ein Teil
von haikai Literatur, große Beliebtheit. Zum Studium des haikai möchte ich hier
zwei wichtige Werke angeben: i) Horst Hammitzsch, das Sarumino, eine Haikai-
Sammlung der Bashō-Schule (in: Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völ-
kerkunde Ostasiens 77/78 Wiesbaden 1955, Seite 22 – 37, 44 – 60) ; ii) Horst Ham-
mitzsch, das Shiroshōshi, ein Kapitel aus dem Sanshōshi des Hattori Dohō. Eine Quel-
lenschrift zur Poetik des haikai (in: Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen
Gesellschaft 107/2 Wiesbaden 1957, Seite 495 – 510). Sieh. Anm. 10.
 - 2 Als Nebenbeweis möchte ich angeben, daß Matsumae Yoshihiro (1550 – 1618)
und dessen Nachkommen, eine Landfürstenfamilie in Matsumae, selbst als haikai-
Dichter eine Kulturpolitik entwickelten, in deren Mittelpunkt die Pflege der haikai-
Dichtung stand.
 - 3 Shōsō Otsuni (1756 – 1823), ein buddhistischer Mönch, war es, der zweimal, 1810
und 1818, Hakodate besuchte und sich um die Verbreitung des haikai Verdienste
erwarb.

Der Frühlingsregen –
zwischen den Bäumen schimmert
die Schiffahrtstraße.

Dieses Gedicht ist ein hokku; hierzu s. Anm. 5. Außer einigen eigenen Gedichtbän-
den hinterließ er den ältesten Kommentar zum haikai von Yosa Buson (1716 –
1783) : Buson hokku kai 1883, der von einem seiner Schüler zusammengestellt und
herausgegeben wurde.

1696) ein Denkmal in Hakodate errichtet wurde⁴.

Ab 1868 begann die Meiji-Regierung planvoll mit der Erschließung Hokkaidōs. Zu diesem Zweck wurde in Sapporo eine Entwicklungsbehörde gegründet, der die systematische Besiedlung oblag; im Zuge der früheren Erschließung seitdem 16. Jahrhundert war zwar schon eine Kette von Dörfern entlang der Küste entstanden, in denen besonders das Fischereigewerbe⁵ ausgeübt und die zugleich Stationen zur militärischen Überwachung der Küste waren.⁶

Von 1868 an aber wurde eine drastische Kolonisation des Binnenlandes betrieben, die von der genannten Behörde geplant und ausgeführt wurde. Haikai aber schon bald in der Form des selbständigen Haiku⁷ wurde von den Leuten wie selbstverständlich als literarisches Hilfsmittel übernommen, um sich im harten und eintönigen Alltag der Neusiedlungen zu zerstreuen.⁸ Überall auf der Insel findet man heute literarische Überbleibsel.⁹

Masaoka Shiki (1867–1902), der sich nach der Öffnung Japans zum Westen hin in den 70er Jahren des 19. Jahrhunderts aktiv mit der Erneuerung des Kurz-

4 Das erste Denkmal des Dichters wurde im Jahre 1766 errichtet, das zweite 1773, das dritte 1814, das vierte 1822, das sechste 1863, das siebte 1889 usw. Hier handelt es sich um einen Gedenkstein (kuhi) mit einem eingemeißelten Haiku.

5 In seinem „Eine Reise mit dem Volks-Haiku“ (Tōkyō 1978) berichtet Moriyama Gunjiro über ein sehr interessantes renku von Haneda Seiyō. Seiyō arbeitete im Jahre 1801 auf der Insel Kunashiri (ostrov kunasir) auf den Kurilen (kurilskije ostrova) und wurde später Kommissar in Hakodate (Hakodate-bugyō). Hier möchte ich das erste Gedicht (hokku) und das diesen folgende, zweite (wakiku) aus seinem renku im Jahre 1801 in Kunashiri angeben. Zum renku sieh. Anm. 10.

Unser erster Lachs!

Reich ist die Ernte Ezos

im Kurilenherbst.

Tief in den Boden reicht Tau–

hier wird ein Blockhaus gebaut.

6 Nach Moriyama kann man noch heute einige Gedichte finden, die von Kriegen (bushi) im Jahre 1856 in einem der Insel Karafuto (ostrov sakhalin) gegenüberliegenden Hafendorf an die Wand ihres Quartiers geschrieben worden sind.

7 Sieh. Anm. 10.

gedichts beschäftigte, pflegte die Haiku-Form¹⁰. Haiku als Bestandteil des neuen literarischen Genres sollte fortan in den modernen Strömungen der japanischen Literatur eine wichtige Rolle spielen. Übereinstimmend mit der Shiki'schen Bewegung entstanden auch in Hokkaidō Gruppen, die dem Haiku zum Durchbruch verhelfen¹¹.

„Das Haiku in Hokkaidō“ -diese Benennung vermittelt uns eine besondere Vorstellung, auch wenn sich das Hokkaidō-Haiku weder durch einen besonderen Stil oder eine besondere Tendenz von der Vorstellung eines Haiku auf dem Hauptland Honshū unterscheidet. Das Hokkaidō-Haiku ist jedoch eigenständig in der Thematik und besitzt ein unverwechselbares Lokalkolorit. Begriffe wie „Hokkaidō-Haiku“, „Haiku im Norden“ oder „haijin“ (Haiku-Dichter) im Norden“ haben Tradition.

-
- 8 Von einer Haiku-Gesellschaft in Obihiro in Mittelhokkaidō ist eine gemeinschaftliche Dichtung erhalten, die den Leser in humoristisch-heitere Stimmung versetzt:

Ganz zu Anbeginn

fraßen Menschen und Schweine

aus demselben Trog.

Kōtensha (Gruppe

Stürmischer Himmel)

- 9 Moriyama berichtet auch über eingerahmte Haiku, die den Gemeindeschreinen gewidmet wurden. Die Schreine waren von den Übersiedlern aus dem Hauptland mitgebracht worden, um die Zugehörigkeit zum gemeinsamen Ursprung zu bewahren. Darüberhinaus entwickelten sich die Schreine zu Kulturzentren.

Ein Beispiel eines gerahmten Haiku im Schrein des Dorfs Urausu in der Ishikari-Ebene:

Den Frühlingsregen

zu sehn, gehe ich hinaus

auf das Weizenfeld.

Selbstverständlich sind auch haikai von Beamten der Entwicklungsbehörde dokumentiert erhalten, z.B. solche, die im Jahre 1876 gedichtet worden sind.

- 10 Vgl. auch die Anm. 1, 5 und 7. Das haikai no renga seit der Meiji-Zeit kurz als renku bezeichnet, eine Bezeichnung, die sich erstmals bereits in dem Namboku-shinwa des haijin Takebe Ryōtai (1719–1774) findet. Die Kette wird durch den Wechsel der Silben- und Zeilenfolge von 5 : 7 : 5 und 7 : 7 und dessen von den Regeln bestimmter Wiederholung gebildet. Auch die Verwendung des Jahreszeitworts (kigo) und der zäsursetzenden Wörter wird durch ein eingehendes Reglement

Bei der Installierung des Haiku in allen Teilen der Insel spielten die Tageszeitungen eine entscheidende Rolle¹². Fast jede Zeitung stellte -wie auch heute noch- auf der Feuilletonseite großzügig Raum zur Verfügung, damit Leser ihre eigenen Haiku veröffentlichen konnten¹³.

Ein geschichtlich wichtiges Ereignis der damaligen Zeit ist, daß sich die

vorgegeben. Auf die Einzelheiten dieser Regeln soll hier nicht eingegangen werden. In diesem Zusammenhang sei auf die Arbeit von H. Hammitzsch, Das Sarumino, vgl. Anm. 1 verwiesen, die zu allen Fragen des renku eingehend Stellung nimmt (S. 27–37). Nach der Bashō'schen Periode in der Geschichte des haikai war eine Kette von 36 Versen –kasen– üblich. Die Kittendichtung wird zumeist von einer Gemeinschaft Gleichgesinnter, die sich zu diesem Zweck versammelt haben, gedichtet. Masaoka Shiki lehnte das renku ab und verselbständigte den ersten Vers. Er nannte ihn haiku statt hokku. Das Wort haiku wurde auch in Deutsche übernommen.

- 11 Die Neusiedler in der Meiji-Ära brachten das neue Haiku mit, während die älteren Siedler an Südküste der Insel das haikai bewahrten. Schon kurz vor der Jahrhundertwende gab es in den Städten Otaru, Sapporo, Asahikawa (chup-pet, der Fluß im Osten; Chiu-pet, der Fluß mit Wellen) und Kushiro usw. mehrere Haiku-Gesellschaften, die sich intensiv mit der Shiki'schen Haiku-Anschauung beschäftigten. Auch auf den nördlichen Inseln Rishiri und Rebun gab es schon Haiku-Gesellschaften.
- 12 Um die Jahrhundertwende gab es etwa 50 Zeitungen.
- 13 Ein anerkannter haijin in Hakodate, Kozandō Mugai, wurde im Jahre 1882 Auswähler (senja), der die Gedichtqualität der von den Lesern eingesandten Haiku beurteilt und eine Auswahl trifft, an der Hakodate-Zeitung (Hakodate shimbun). (Shimbun: Zeitung auf Deutsch).
- 14 Im Februar des Jahres 1907 wurde Hekigodō von einem Arzthaijin in Nemuro in Osthokkaidō, Hata Baisō, freundlich empfangen. Er blieb etwa 30 Tage. Hekigodō bereiste danach die Städte Kushiro, Obihiro, Asahikawa, Otaru, Sapporo und Hakodate und verließ im Mai die Insel. In diesen Städten wurden Versammlungen abgehalten, bei denen unter anderem folgende Haiku entstanden:

Da man im Garten
durchaus nicht Schnee räumen will,
bleibt er dort liegen. Baisō (Nemuro im Februar)

Den Fußwärmer fort!
Die Feuerstelle im Raum
genügt zum Wärmen. Tōroku (Asahikawa im April)

großen haijin Kawahigashi Hekigodō (1873 – 1937)¹⁴ und Takahama Kyoshi (1874 – 1955)¹⁵ nacheinander nach Hokkaidō begaben. Angelockt von der vom Hauptland abgetrennten Landschaft, unternahmen sie eine Rundreise durch die Insel. Sie wollten das Hokkaidō-Haiku kennenlernen und versuchten, ihr eigenes -modernes- Haiku auf der Insel einzuführen. Sie richteten hier auch ihre eigene Haiku-Schule ein.

Hekigodō und Kyoshi waren beide hochbegabte Schüler der Shiki-Schule. Ihre Gedichtanschauungen unterschieden sich jedoch und standen sich später in großem Abstand gegenüber. Die ästhetische Einstellung Hekigodōs bezeichnete man zuerst als Neue Tendenz (Shinkeikō), dann im Laufe der Zeit als Haiku im freien Stil (Jiyūritsu haiku). Hekigodō wollte das Ergebnis der Betrachtung eines Gegenstands beim Gestalten eines Haiku „subjektiv-dynamisch“ rekonstruieren: eine subjektiv-dynamische Skizze entwerfen. Diese Tendenz hatte schließlich die Ablehnung der strengen traditionellen 5 : 7 : 5 Form zur Folge, die den Anfängen der japanischen Literatur entstammt. Nach 1904, etwa 10 Jahre lang, stand die ganze Welt der Haiku-Dichter (haidan) Japans unter dem Einfluß der Hekigodō'schen Idee, auch Hokkaidō¹⁶.

Kyoshi dagegen versuchte, die objektiv-optische Darstellung eines Gegen-

Der Ackerpflüger–
ein Soldatenlied singt er
bei seiner Arbeit. Hekigodō (Hakodate im April)

Gestreift vom grünen
Schatten, zieht die Schafherde
die Zäune entlang. Matsumura Gimpō (Sapporo im April)

15 1919 und 1920 besuchte Kyoshi die Insel Hokkaidō.

Takahama Toshio, ein Sohn Kyoshis und als Haiku-Dichter Nachfolger des Meisters, studierte im Jahre 1919 in Otaru. Die Haiku-Gruppe an der Handelshochschule in Otaru empfing den Meister. Auch in Sapporo fand eine Haiku-Versammlung statt.

Eine einzige
Ershütterung– und alle
Eiszapfen fallen. Toshio (Otaru im Januar 1920)

stands zur Grundhaltung der Haiku-Dichtung zu machen, nachdem er sich im Jahre 1911 entschlossen hatte, die Haiku-Zeitschrift (haishi; im folgenden „haishi“ genannt) „Hototogisu“ (Der kleine Kuckuck; cuculus poliocephalus) zu erneuern.

Da auf Hokkaidō wenig von der alten, konservativen Wertvorstellung übriggeblieben war, konnte Hekigodō die neuen Dichter leicht beeinflussen. Damals war Izumi Tenrō (1887–1948) eine zentrale Figur, die sich mit Neuer Tendenz Neuen Haiku-Bewegung (Shinkō haiku undō) usw.¹⁸

Im Gegensatz zu Tenrō ging Ishida Uhoishi (1884–1951) denselben Weg wie

- 16 Die Anhänger Hekigodōs verteilten sich damals über die gesamte Insel : Sie wohnten in Hakodate, Iwanai, Yoichi, Suttsu, Kuromatsunai, auf der Insel Okushiri, in Otaru, Muroran, Asahikawa, Takasu, Sapporo, Kushiro usw.

Der Frühlingsabend –
ein Gemälde, das alle
atemlos anschauen.

Chōu in Muroran

Im Klassenzimmer
eine Libelle – wie der
Herbst die Kinder freut!

Ōsui in Okushiri

Gealtert der Mond –
du siehst den Wind die fernen
Bäume verlassen.

Tatsuji in Otaru

Ein Duft nach Erde
umgibt den Lauch – angenehm
ist er zu schälen.

En'u in Takasu

Im Jahre 1927 unternahm Hekigodō seine zweite Hokkaidōreise. Dieser große Theoretiker, Journalist und Dichter wurde in Sapporo sehr herzlich empfangen; es fand aber keine Haiku-Versammlung statt. Hekigodō stand zwar in sehr großem Ansehn, aber schon abseits der allgemeinen Dichtervelt. Ein repräsentativer haijin auf dem Gebiet des Jiyūritsu haiku, Ogiwara Seisensui (1884–1976) übte zusammen mit Hekigodō einen großen Einfluß auf die haijin in Hokkaidō aus. Seisensui ging noch einen Schritt weiter als Hekigodō, der noch unter den Einfluß des Naturalismus stand. Seisensui machte im Jahre 1931 auch eine Hokkaidōreise. Die kleine Hafenstadt Mashike war lange Jahre nahezu ein Zentrum der Jiyūritsu Gruppe auf Hokkaidō. In diesem Zusammenhang möchte ich Imazato Chikucha (? –1929) in Mashike und Shichinoe Mokuto (1890–1933) nennen.

Zu Schnee verweht die
Wolke – rings im zweiten Stock
geht Licht um Licht an.

Chikucha

(Shinkeikō) befaßte.¹⁷

Die Lotosblumen -
eine rote Behausung
jede einzelne.

Die Mondsichel blinkt.
Grünzeug sucht sie sich, sagt man-
wie beim Einkaufen.

Izumi war als junger Mann von 1911 an als Auswähler für die haishi Shuzaya (Die zinnoberrote Scheide) der Hekigodō'schen Schule tätig. Damit zog er die Aufmerksamkeit des ganzen Landes auf sich. Als Arzt-haijin kehrte er bald von Tōkyō nach Iwanai in Südwesthokkaidō zurück, wo er eine Klinik gründete. Dort lebte er bis zu seinem Tod. Der Stil seines Haiku war immer klar, erhaben und einzigartig. An seinem Lebensabend kehrte er aber von der Shinkeikō zur traditionellen 5 : 7 : 5 Form zurück.

Shinkeikō bzw. Jiyūritsu, die zur damaligen Zeit dem Fortschritt huldigten, erreichten um 1920 ihren Höhepunkt und verloren allmählich an Frische und Glanz, bis sie zum Schluß ganz verschwanden. Das freie Haiku führte später zum Entstehen des zur Links-Ideologie tendierenden proletarischen Haiku oder der

17 Im Jahre 1929 begründete er eine haishi Fumoto (Der Fuß des Bergs). Als Hekigodō 1929 nach Hokkaidō kam, empfing ihn Tenrō und veranstaltete einen Vortragsabend. Ein bekannteres Haiku von Tenrō sei hier genannt:

Ruhetag heute –
allein in der Fabrik ein
weißer Schmetterling.

Von ihm stammen die Haiku-Sammlungen Tōgoku (Ein Land im Osten) und Izumi Tenrō kushū (Haiku-Sammlung des Izumi Tenrō).

+ + +

Hier sei angemerkt: Eine Haiku-Gruppe bzw. Haiku-Gesellschaft trägt den Namen der haishi, die von ihr herausgegeben wird. Eine haishi zu gründen bedeutet also, eine Haiku-Gruppe organisieren und leiten zu können. Der Gründer soll dann auch „literarischer Lehrer“ der Gruppenmitglieder sein.

Kyoshi:

Vom Oakan-Berg*

hob sie ab und schwebt vorbei,
die Frühlingswolke.

* 1371 m.; ein tätiger Vulkan

Herbstliche Wolke –

über dem Daisetsu-Berg**
bewegt sie sich kaum.

** 2290 m.; ein tätiger Vulkan

Uhoshi, ein buddhistischer Missionar, lebte zuerst auf Hawaii. Nach seiner Rückkehr nach Japan wurde er Oberpriester der zweiten Generation im Kōjōji-Tempel in Asahikawa. Anlässlich des Hokkaidō-Besuches des Kyoshi gab man ihm die Möglichkeit, an der Kyoshi'schen haishi Hototogisu mitzuarbeiten.¹⁹ Nebenbei gründete er im Jahre 1923 seine haishi Sesshū (Der Kahn im Schnee) und im Jahre 1929 Kinome (Der Trieb), später, im Jahre 1934, Ishikari (Ortsname

-
- 18 Kuribayashi Issekiro (1894 – 1961) war einer der Begründer des Puroretaria haiku (Proletarisches Haiku) und war in den Jahren 1941 bis 1944 von der Geheimpolizei inhaftiert.

Dieser Schneeschipper
gehört zu den wenigen,
die Arbeit fanden.

Shinkō haiku undō: s. Anm. 24 und 25.

- 19 Im Zusammenhang mit Anm. 15 ist noch zu erklären, daß Kyoshi im Jahre 1933 nach Asahikawa kam, wo er an der „Großversammlung der Hototogisu in Nord-japan“ teilnahm, die von Uhoshi organisiert und geleitet wurde. In seinem Vortrag, den er dabei hielt, dokumentierte Kyoshi die strenge Disziplin der Hototogisu-Gruppe im Bereich der Ästhetik. Er forderte, ein kigo müsse sich nach den klimatischen Verhältnissen in Kyōto oder Tōkyō richten. Am Beispiel der Kirschblüte sei dies näher erläutert: Die Kirsche blüht nach unserem kigo-Kalender im April. Wer ein haijin sein wolle, müsse den Zusammenhang von Kirschblüte und April wahren, wenn auch die Kirsche auf Hokkaidō erst im Juni blühe. Weiter werde der Gegenstand der Betrachtung auf die Natur beschränkt: Das nannte er kachōfuei (Besinnung auf Blumen und Vogelgesang), Ketzerei sei streng ächten. So gewann

in der Umgebung der Stadt Sapporo) betitelt. Er versammelte die haijin um sich, die sich vorwiegend mit der traditionellen Haiku Form beschäftigten, und pflegte intensiv diese Form der Dichtkunst.²⁰

Ich möchte zwei repräsentative haijin nennen, die als Heimat-haijin bezeichnet werden können: Ushijima Tōroku (1872 – 1952) und Aoki Kakkō (1864 – 1948). Sie versuchten, die eigentümliche Heimat- und Landschaftsbezogenheit in den Mittelpunkt des Haiku zu stellen. Der junge Tōroku siedelte sich in Nagayama-mura (heute ein Teil der Stadt Asahikawa) an. Bald beschäftigte er sich begeistert mit dem Haiku und gründete im Jahre 1897 die haishi Shirayuki (Der weiße Schnee), die erste haishi in Hokkaidō überhaupt. Außerdem war er später als Auswähler der Haiku für die Haiku-Spalte der Otaru shimbun tätig und bildete in dieser Eigenschaft viele Heimat-haishi aus.

Die erste Blüte
des Löwenzahns – wie friert sie
dort auf dem Sande !

Besucht mich ein Gast,
zünde ich warm an in mir
festliche Lichter.

die Hototogisu-Gruppe, die bis heute die größte Haiku-Gruppe in Japan ist, ihre zentrale Bedeutng. Auch Japan als Staat wuchs ab 1868 gewaltig heran und führte eine straffe Verwaltung ein. In organisatorischen Dingen, so scheint es, entwickelten sich beide parallel.

- 20 Uhoshi' sche Haiku-Sammlung: Kankin yoroku (Geistiger Zusatzgewinn bei der Sutra-Rezitation). Haijin im Geiste Uhoshis sind Watanabe Shukan (1889–1933) und Sase Shishun (1872–1935) .

Der himmlische Fluß –
schimmernd wie ein Wasserfall
stürzt er herunter.

Shukan

Fällt im März noch Schnee,
ist es gleich kälter als im
kalten Februar.

Shishun

Im Jahre 1921 gründete er eine haishi Shigure (Der Herbstregen), die als erste richtige Haiku-Zeitschrift auf Hokkaidō gilt. Tōroku übernahm Bashōs orthodoxen Geist und versuchte gleichzeitig, das der Landschaft entsprechende Haiku zu schreiben. Die haishi Shigure trug später einen anderen Titel: Ashikabi (Der Schilfsproß) und wird sogar jetzt noch als älteste Haiku-Zeitschrift publiziert.²²

Aoki Kakkō, der von frühester Kindheit an in der Haiku-Atmosphäre aufgewachsen war, erfaßte intensiv das Wesen des Haiku. 1890 kam er nach Hokkaidō und wurde Angestellter der Hokkai shimbun in Hakodate. Später wurde er Auswähler die Haiku-Spalte der Hokkai taimusu (gegenwärtig Hokkaidō Shimbun). Er war überhaupt der erste anerkannte Auswähler für diese Zeitung.

Zu den Geräuschen,
mit denen der Tag beginnt,
paßt auch das Wasser.

Einer zerhackt Eis
mit der Axt — von der Klinge
sprühn Eis und Funken.

Angeregt von der Gründung der haishi Shigure durch Tōroku, publizierte Kakkō

Variation:

Fällt noch Schnee im März,
Kälter gleich ist es als im
kalten Februar.

- 21 Tōroku und Kakkō entfalteten zwar ihre literarischen Tätigkeiten unter dem Einfluß der Hototogisu, lehnte aber deren strenge Geschlossenheit ab.
- 22 In den Jahren von 1910 bis 1920, als Ushijima Tōroku als Auswähler der Haiku-Spalte der Otaru shimbun fungierte, war Aoki Kakkō in Sapporo als Auswähler der Haiku-Spalte der Hokkai taimusu (Hokkai Times) tätig. Tōrokus Nachlaß: Ushijima Tōroku kushū (Haiku-Sammlung des Ushijima Tōroku). Ein bedeutender Schüler Tōrokus war Hasebe Kojōshi (1887–1972) :

Beim Herrichten des
Wagens fällt ein Öltropfen
auf den Erdboden.

Kojōshi betreute die regelmäßige Herausgabe der haishi Shigure. Er leitete auch

auch die haishi Gyōun (Die Wolke in der Morgendämmerung). Das war 1926.²³ Diese Zeitschrift brachte viele Haiku, die unbefangen die Natur im Norden besangen. Die Zeitschrift spiegelt den Kakkō'schen Geist wider, der die Eigentümlichkeit des Dichters achtet. Nach dem Tode Kakkōs im Jahre 1949 ging die haishi ein.

Während sich im Zweiten Weltkrieg die staatliche Kontrolle der kulturellen Betätigung verschärfte, entstand im ganzen Land eine neue Bewegung, die sogenannte Neuentstandene Haiku Bewegung (Shinkō haiku undō), welche die „Befreiung des lyrischen Gefühls“ und die Erneuerung des Haiku zum Ziel hatte. Es war ein literarischer Aufstand gegen die Hototogisu-Gruppe.²⁴ Hokkaidō brachte auch viele haijin hervor, die sich leidenschaftlich mit dieser Bewegung befassen.²⁵

die Ashikabi. Die beiden Zeitschriften Shigure und Ashikabi erwarben sich Verdienste auch um die Theorie der Haiku-Dichtung.

- 23 Kakkō war mit Usuda Arō (1879 – 1951) befreundet, der in den Zwanziger und Dreißiger Jahren mitten zwischen der Hototogisu und der Hekigodō'schen Shinkeikō bzw. Jiyūritsu stand.

Viele Mitglieder der Gyōun beteiligten sich gleichzeitig an der Arō'schen haishi Shakunage (Der Rhododendron). Arō reiste zweimal durch Hokkaidō, 1924 und 1936. Im Jahre 1936 wurde der Shakunage-Bund auf Hokkaidō gegründet. Der Bund gab eine haishi Hōkō (Das Nordlicht) heraus, deren Schriftleiter Takeda Tōkō (1892 – 1974) war. Die Kakkō'sche Haiku-Sammlung publizierte Izumiya Bugetsu.

- 24 Mizuhara Shūōshi (1892 – 1981) und Yamaguchi Seishi (1901 –), führende Mitglieder der Hototogisu, erschlossen sich allmählich der Idee, das Schwergewicht beim Verfassen eines Haiku auf den Dichtvorgang zu legen. Sie waren aus der Hototogisu ausgetreten und von der jungen Generation mit Freude und Begeisterung aufgenommen worden. Shūōshi bevorzugte die Gegenständlichkeit; Seishi erweiterte die Thematik durch die Schilderung des modernen Stadtlebens. Beide wollten sie ein Haiku in traditioneller Form mit Jahreszeitwort (yūki-teikei) beibehalten, während Yoshioka Zenzidō (1889 – 1961) sich zur traditionellen Form ohne Jahreszeitwort (muki-teikei) bekannte.

- 25 Innerhalb der Shinkō haiku undō entstand bald eine Erneuerungsbewegung, die von Nakamura Kusatao (1905 – 1983) in Hototogisu, von Katō Shūson (1905 –) und Ishida Hakyō (1913 – 1969) in Ashibi (haishi ab 1929 unter der Litung von

Diese Bewegung, die sich bei Kriegsende, teils vom Staat gezwungen, selbst auflösen mußte, strahlte immerhin noch auf die Haiku-Welt der Nachkriegszeit aus.

Die allgemeine Haiku-Welt vor der Kapitulation im Jahre 1945 bestand aus zwei Gruppen: der traditionellen und der zur Heimatdichtung tendierenden.²⁶ Es ist wahrhaftig schade, daß die Ushoshi'sche Gruppe ihre Entwicklung infolge des Kriegs abbrechen mußte, gerade als sie ihre Werke auf eine neue Grundlage stellen wollte.²⁷ Sie beabsichtigte, bei der Betrachtung eines Gegenstands noch einen Schritt tiefer in dessen Wesen einzudringen. In der dichterischen Arbeit der Heimatgruppe von Tōroku und Kakkō scheint uns eher das Heimatbewußt-

Shūōshi: Die Lavendelheide) und von Shinohara Bon (1910–1975) in Shakunage propagiert wurde. Diese vier wurden Gruppe der Menschenforschung (Ningen tantyū ha) genannt. Die Gruppe wollte die Lebensäußerungen des Menschen zum zentralen Thema des Haiku erheben. Der radikalste Kritiker der Hototogisu, Matsubara Jizōson (1879–1973) leitete die haishi Ku to hyōron (Haiku und Kritik). Die führende Gruppe der muki teikei, Haiku-Gruppe der Kaiserlichen Kyōto-Universität (Kyōdai haiku) wurde 1940 von der Geheimpolizei verhaftet. Sie war von der Kriegsregierung als gefährlich eingestuft worden, weil sie die japanische Kulturtradition zerstöre.

Am Ende der Entwicklungslinie von Hekigodō über Seisensui bis Issekiro (S. Anm. 18) stand die haishi Das Haiku-Leben (haiku seikatsu), die das proletarische Haiku pflegte. Takano Sojū (1893–1976) arbeitete als hervorragender haijin innerhalb der Hototogisu-Gruppe.

Im Jahre 1938 gründete Takahashi Sadatoshi (1913 –) die haishi Purizumu (Das Prisma), welche die Richtung der Shinkō haiku undō auf Hokkaidō vertrat. Sadatoshi kehrte jedoch an seinem Lebensabend wieder zum yūki-teikei zurück. In Hakodate entstand die Zeitschrift Tsubo (Der Krug, ab 1940), welche der Richtung des muki teikei anhing.

- 26 Im Jahre 1942 wurde der Verein Haiku-Dichter Hokkaidōs (Hokkaidō haikusakka kyōkai) gegründet. Sein Präsident war Ishida Ushoshi; als Berater fungierte Aoki Kakkō; der ständige Vorsitzende war Hasebe Kojōshi. Diese Organisation der haijin zeigt, daß beide Gruppe unter einer Zielrichtung zusammengeschlossen waren. Im selben Jahr gab in Deutschland Paul Lüht „Frühling Schwerter Frauen“ (Berlin 1942) heraus. In diesem Band sind die Gedichte japanischer Dichter von den Anfängen bis zu Shiki, Hekigodō und Kyōshi vereinigt.

- 27 Im Jahre 1944 mußten die haishi Ishikari und andere ihr Erscheinen einstellen, da

sein im Vordergrund zu stehen, als daß es gelungen wäre, die typischen Eigenheiten der Insellandschaft in ihrer ganzen Vielfalt zu erfassen und im Haiku darzustellen.

Wie die anderen Literaturgattungen lebte in der Nachkriegszeit auch das Haiku wieder auf. Unzählige Zeitschriften erschienen wieder oder wurden neu gegründet und gaben der neu gewonnenen Freiheit des Volkes Ausdruck.²⁸

Die Idee der Freiheit und Demokratisierung erfaßte auch die haijin und fand vielfältigen Ausdruck in ihren Haiku-Versen. Das Schreiben von Haiku erfreute sich in zunehmendem Maße allgemeiner Beliebtheit und wurde zum Volkssport. Das ist eine markante Reform.²⁹ In dieser Situation entstand besonders auf Hok-

es an Papier fehlte. Einige haishi wurden im Untergrund publiziert, um der staatlichen Konontrolle zu entgehen.

- 28 Nach Kimura Toshio wurden schon 1945 12 haishi gegründet, es folgten 1946 32, 1947 27, 1948 23, 1949 19, 1950 15 und 1951 13 haishi. Auf Hokkaidō etablierten sich also in sechs Jahren 141 haishi, die als literarische Zeitschriften angesehen werden können.
- 29 Inzwischen wurde in der gesamten Haiku-Welt Japans eine rege Diskussion geführt, die eine Neugestaltung des Nachkriegshaiku zum Ziel hatte. 1946 wurde der neue Bund der Haiku-Dichter (Shin haikujin renmei) gegründet. Dieser Bund besteht also aus solchen haijin, die in den letzten Kriegsjahren aus politischen Gründen verfolgt und verhaftet worden waren. 1947 wurde der gegenwärtige Haiku-Verein (Gendai haiku kyōkai) gegründet. Er hat die Existenzsicherung der haijin zum Ziel. 1961 wurde der Verein der Haiku-Dichter (Haijin kyōkai) gegründet. Er stellt sich die Aufgabe, zur Erhaltung der echten Tradition beizutragen. Ein von außerhalb der Haiku-Welt erfolgter wichtiger Impuls zur Diskussion um das Wesentliche der Haiku-Dichtung war ein Essay von Kuwabara Takeo im Jahre 1946: Dainigeijutsuron (Haiku als zweite Kunst). Kuwabara kritisierte die Weltabgewandtheit der haijin. Dagegen erhoben sich die Stimmen von Yamaguchi Seishi, Mizuhara Shūōshi, Nakamura Kusatao und Katō Shūson u.a. Auch ein Essay von Yamamoto Kenkichi (1907–), Literaturkritiker ist zu erwähnen: „aisatsu to kokkei“ (Frage und Antwort und Humor -Einführung in die Welt Bashōs). Yamamoto führte auf die wesentlichen des Haiku hin: Aisatsu*, Humor, Jahreszeit, Ausklang der Verben und Hilfsverben, die seit der renku-Periode vollzähig weiter zu überliefern seien. Kaneko Tōta (1919–) schrieb über die Sozialbezogenheit beim Gestalten eines Haiku. Aisatsu*: Frage und Antwort; inhaltlich bedeutet es aber auch eine überraschte Entdeckung, die man empfängt, beim zweimaligen Lesen eines Haiku.

kaidō wieder der Plan, die Besonderheiten der nördlichen Landschaft in das Haiku aufzunehmen.³⁰

Nach dem Durcheinander der Nachkriegszeit betrat aber dramatisch ein haijin die Bühne der Hokkaidō Haiku-Landschaft. Es war Hosoya Genji (1906–1970). Als Arbeiter in Tōkyō hatte er bereits vor dem Weltkrieg zwei Bände Haiku herausgegeben. Er war der erste Arbeiter, der als haijin seinen eigenen Haiku-Stil erreichte.³¹ In Tōkyō ausgebombt, gehörte er bei Kriegsende einer der ersten Pioniergruppen an, die nach Hokkaidō kamen. Er wohnte in Toyokoro, einem Dorf im nördlichsten Teil der Insel. Angeregt von der Fülle der Stoffe, die das harte Leben im unfruchtbaren, neuzuerschließenden Land bot, gab er Gedicht-

30 Der erste Präsident des Hokkaidō Haiku Vereins (Hokkaidō Haiku kyōkai), Samejima Kōgyoshi (1888–1981), einer der führenden Arzt-haijin in der Hototogisu-Gruppe, schrieb 1956 im Vorwort zur ersten Anthologie des Hokkaidō Haiku Vereins, daß die in dem Band vereinigten Haiku einen für Hokkaidō typischen Wesensgehalt widerspiegeln, der nicht leicht zu bestimmen sei. Es ist offensichtlich, daß Kōgyoshi als maßgebender haijin der Hototogisu-Gruppe mit ihrer strengen ästhetischen Auffassung die Eigentümlichkeiten der Landschaft Hokkaidōs erkannt hat. S. Anm. 19, 42, u. 43.

31 Sieh. Anm. 24; Genji war Schüler von Jizōson. Im Jahre 1936 trat er der haishi Ku to hyōron bei. Genji war damals Dreher. Er gab im Selbstverlag die Gedichtbände Tetsu (Das Eisen, 1938) und Jinchū (Mitten im Staub, 1940) heraus. 1941 wurde er von der Geheimpolizei verhaftet. Er verarbeitete häufig Erlebnisse aus der Fabrik in seinen Haiku:

Beim Turnen in der
Fabrik tritt meinen Schatten
der Vorarbeiter.

Nach Beerdigung
des Schlossers schlag ich
das glühende Eisen.

Hier sei ein hervorragender haijin aus dem Norden angegeben, Kita Kōsei (1923 –), der Haiku aus der Arbeitswelt eines Zimmermanns schreibt. Er ist selbst Zimmermann:

Wird er geschliffen,
sprüht es hell im Bottich von
seltsamen Sternen.

band Sakintai (Die Zone des Goldsands 1949) heraus. Dieser Band machte Genji mit einem Schlag zum Bannerträger der Haiku-Reformation des Nachkriegs-Hokkaidō.

Voller Hoffnung bis
ans Ende der Welt gelangt –
doch ringsum nur Schnee.

Hintern um Hintern
nebeneinandergereicht –
im Schnee die Pferde.

Der Schnee fällt schon früh –
sprachlos seh ich vor mir die
Fußstapfen verwehn.

Bald verzog er in die Stadt Sunagawa und gründete dort die haishi Hyōgentai (Die Zone des Eisfelds), eine Gruppe, die für das Arbeiter-Haiku eintrat.³² Dabei schuf er sehr kühn ein avantgardistisches Haiku, das außerhalb der bisherigen Haiku-Vorstellung steht. Dies gilt zu Recht als glänzende Tat. Genji litt jedoch darunter, daß das Bildhafte, das in der Anordnung der Worte im Gedicht aufblitzen soll, in seiner Themenstellung nicht schwebend genug wirkte. Sein Haiku schien in der Folgezeit einer etwas gekünstelten Anordnung der Worte zuzuneigen.

Parallel zum Geiji'shen Haiku, das viele Anhänger fand, bildete sich eine andere neue Richtung, die heute noch in der Entwicklung begriffen ist. Sie ver-

32 Im Jahre 1953 veranstaltete die Hyōgentai einen Wettbewerb für Bergarbeiter. Die Hyōgentai und der Kulturbund Bergarbeiter auf Hokkaidō (Hokkaidō tankō bunka renmei), der 1948 gegründet wurde, kooperierten miteinander. Viele Bergarbeiter-haijin aus dem gesamten Hokkaidō-Gebiet nahmen daran teil. Das Ishikari-Becken liegt in dieser Gegend (sieh. Geleitwort). Genji gab außer den angegebenen drei Haiku-Bänden noch einige weitere Gedichtbände und zwei theoretische Bücher heraus.

tritt die Auffassung, daß in das Haiku auch das Gefühl gehört, das einen bei der Naturbetrachtung zutiefst innen im Herzen erfaßt. Die Gruppe nennt sich Neue Traditionelle Gruppe (Shin dentō ha). Folgende haijin sind zu nennen: Itō Tōgyo (1898 – 1963) mit haishi Kankai (Fische unter dem Eis); Saitō Gen (1914 – 1980) mit haishi Tsubo (Der Krug); Doki Rentarō (1920 – 1977) mit haishi Akashiya (Die Akazie); Takahashi Sadatoshi (1913 –) mit haishi Mizuwa (Der Wasserring).

Itō Tōgyo leitete schon im Jahre 1925 die haishi Kankai. Damals lebte er auf der Insel Karafuto (ostrov sakhalin). Nach der Kapitulation und nach seiner Umsiedlung in die Stadt Asahikawa erschien diese Zeitschrift erneut. Tōgyo war ein Anhänger des großen haijin Iida Dakotsu (1885 – 1962)³³, der in der Präfektur Yamanashi wirkte. Zwei Haiku Tōgyos:

Wo die Vögel ziehn,
hoch über die Wolken muß
ein Weg hinführen.

Leben in allem –
auch wenn Schnee fällt, lebt jedes
Ding mit aller Kraft.

Der eindrucksvolle Stil und das hohe Niveau seiner Haiku führte ihm viele Anhänger zu. Nach seinem Tod ging die haishi Kankai leider ein.

Während seiner Studienzeit trat Saitō Gen in die Haiku-Welt ein. Damals herrschte unter den frischgebackenen Haiku-Dichtern die Idee der Shinkō haiku undō vor. Später lernte Gen Ishida Hakyō (1913–1969) in der Gruppe Ningen

33 Dakotsu gehörte anfänglich der Hototogisu-Gruppe an. Er gründete 1917 die haishi Unmo (Der Glimmer; ab 1915 bis 1917 Kirara) und suchte seinen ureigensten Weg. Heute wird die Unmo von seinem Sohn, Ryūta (1920–), geleitet und verzeichnet auf Hokkaidō etwa 600 Anhänger. Im Jahre 1963 ging die haishi Kankai ein. Die letzte Nummer war die Nr. 342. Seit 1970 nahmen die bisherigen Mitglieder der Kankai an der haishi Kita no kumo (Die Wolke im Norden) teil.

tankyū ha kennen. Von der Hakyo'schn haishi Tsuru (Der Kranich) übernahm Gen deren akademischen Haiku-Stil. Dann zeigte sich, was er konnte:

An schönen Tagen
werden meine Augen heil,
seh ich den Sommer.

Wie mit dem kalten
Wind verwoben das Schilpen
der kleinen Spatzen.

Welch süßer Schlummer
nach der Entbindung — und wenn
der Sturm* ums Haus tobt !

*Sturm: Schneesturm

Nach seiner Rückkehr nach Hakodate gründete er die haishi Tsubo. Diese Zeitschrift stand zuerst unter dem Einfluß der Shinkeikō haiku, löste sich aber allmählich von ihr und widmete sich schließlich Haiku, die am meisten dem herkömmlichen Haiku mit seiner hohen Wortspannung entsprechen.³⁴

Von der haishi Seigen (Der große Himmel) Hino Sōjōs (1901 — 1955) geprägt, trat Doki Rentarō in die Haiku-Welt ein. Im Jahre 1946 gründete er in seiner Heimat Shintotsugawa die haishi Akashiya.³⁵

34 Nach dem Tod Gens 1980 wurde Kondō Jun'ichi (1931 —) Geschäftsführer der Zeitschrift. Etwa 1000 Exemplare wurden gedruckt. Bald 200 Nummer erreicht - bei jährlich 6 Bänden seit der Gründung im Jahre 1940.

Wenn die Todesstunde schlägt —
wie Wasser zu Eis gefriert,
wie Dunst sich lagert.

Gen

35 Sie erreicht bald die Nummer 410. Leitung: Okazawa Kōshi, der von dem schon vom Tode gezeichneten Rentarō die Redaktion übernahm. Rentarō war lange Jahre als Auswähler für die Haiku-Spalte der Hokkaidō shimbun tätig. Von ihm stammen die Gedichtbände „Akikazecho“ (Heft des Herbstwinds) und „Tōboku no uta“ (Das Lied des Winterbaums) u.a.

Die haishi wurde in dem Bestreben herausgegeben, in der Nachkriegsgeneration wieder ein Gespür für Lyrik zu wecken. Dies führte zur Einbeziehung des Alltagslebens in das Haiku. Die haishi war erfolgreich. Viele haijin wurden gewonnen.

In Blüte das Feld –
hier bei den Kräutern kann ich
ungestört weinen.

Das Kinderfüßchen
im Pantoffel – wie eine
Magnolienblüte.

Eine Nachdichtungsvariation:

Fußwärme steigt hoch
aus dem Kinderpantoffel –
die Magnolie blüht.

Kastanien fallen –
ich übe mich im Schweigen,
dem Fallen lauschend.

In seiner Jugend war Takahashi Sadatoshi sehr am Haiku interessiert. Zuerst gehört er der Hototogisu an, dann trat er der haishi Amanogawa (Der silberne Bach; Die Milchstraße) von Yoshioka Zenjidō bei, welche die Shinkō haiku undō Richtung vertrat. Bei dieser haishi eignete er sich die charakteristische herbe Ausdrucksweise an. Im Jahre 1938 gründete er seine eigene haishi, die Purizumu.

Tanabata Fest* im Dorf
hierher führt die Straße,
hier hält der Zug.

*ein Sternfest im Sommer

Wie das blinzelnde
Auge des Huhns scheint im Herbst
alles zu tränen.

Eine Nachdichtungsvariation:

Wie das Auge des
Huhns scheint jetzt im Herbst
alles tränenverschleiert.

Das Schlößchen verschneit –
nächstens über den Teppich
purzelt die Ratte.

Nach dem Krieg gründete er die haishi Mizuwa.³⁶ Seine zarten Haiku atmen die Frische von Blüten und sind durch und durch lyrisch. Er war Vorbild für viele begabte haijin. Im Jahre 1969 gründete er eine weitere haishi, die Kōki (Die breite Bahn), in der er Haiku verschiedenster Stilrichtungen veröffentlichte.³⁷

Im Gegensatz zur Shin dentō ha steht die Hototogisu-Gruppe seit Shiki immer noch in voller Blüte.

Tōgasa Kachō (1892 – 1971) gehörte zu den Bedeutendsten nach Ishida Uhoshi, der 1950 als Hototogisu-haijin starb. Alle traditionellen Gruppen ordneten Kachō unter.

Glutender Herbsttag –
von der brandroten Farbe
eines Fuchsschwanzes.*

*Amaranthus tricolor Joseph's coat;
das Ursprungsland: das tropische Asien.

Der Falke fliegt hin

36 Im Jahre 1951 stellte Mizuwa ihr Erscheinen ein.

37 Kōki mit 380 Exemplaren (Nr. 44 im Juni 1982).

über Wälder wie über
ein wogendes Meer.

Kachō, ein Arzt-haijin, kam im Jahre 1934 nach Hokkaidō und widmete sich fortan dem Haiku. 1946 gründete er in Kitami die haishi Akan (benannt nach einem See in der Mitte Hokkaidōs). Die meisten haijin auf Hokkaidō gehörten in der Vor- und Nachkriegszeit zur traditionellen Hototogisu-Gruppe, so auch die Akan. Die Hototogisu bewahrt unerschüttert ihre Stärke. Nach dem Tode Kachōs stellte Akan leider ihr Erscheinen ein.³⁸

Jede der Haiku-Gruppen besitzt eine führende Persönlichkeit (sensei), die sich selbst bereits einen literarischen Namen gemacht hat und kenntnisreich und befähigt die Zeitschrift leitet. Die Gruppenmitglieder werden vom sensei ausgebildet, und oft entsteht unter ihnen ein starkes Zusammengehörigkeitsgefühl. Es gibt aber auch negative Auswirkungen, besonders in sich nach außen abschirmenden Gruppen: die Überzeugung, als einzige den richtigen Standpunkt zu vertreten. Die Demokratisierung in der Nachkriegszeit erfaßte auch die Haiku-Welt: Sie begann ihre Abkapselung zu überwinden. Seit etwa 1955 versuchten die haishi Nire ha (Die Gruppe Elm)³⁹, Tsubute (Der Wurfstein)⁴⁰ und Gamma (γ)⁴¹ und über 30 andere haishi das sensei –Auswähler– System aufzugeben. Jedoch verschwanden alle diese haishi Mitte der 60er Jahre. An Stelle dieses radikalen Experiments wollte man einen anderen Weg einschlagen. Eine neue Bewegung

38 Gedichtband von Kachō: Togasa Kachō kushū. Er war Auswähler für die Haiku-Spalte der Hokkai taimusu.

39 Die haishi Nire ha wurde 1955 gegründet, parallel dazu wurde der Freundeskreis für Meinungsaustausch unter den Haiku-Dichtern auf Hokkaidō (Hokkaidō haiku sakka konwakai) von Gen, Rentarō, Sadatoshi und Jun'ichi u.a. gegründet.

40 Die haishi wurde 1955 von Kita Kōsei u.a. gegründet. Bis 1964 zählt man zehn Nummer. Viele ihrer Mitglieder gaben eigene Gedichtbände heraus, die der heimischen Landschaft huldigten.

41 Im Jahre 1960 wurde die haishi Gamma von Kusamina Hakueishi und Nakajima Ryū gegründet. Sie bestand zehn Jahre. Die haishi Shin haijin renmei (Der neue Bund der Haiku-Dichter) unterstützte und erforschte das realistische Kurzgedicht.

entstand mit dem Ziel, die getrennten Haiku-Gruppe unter einem Dach zu vereinen. So wurde im Jahre 1955 der Haiku-Verein auf Hokkaidō (Hokkaidō haiku kyōkai) gegründet.

Dessen erster Präsident war Samejima Kōgyoshi.^{42u.43}

Das Wirken des Hokkaidō haiku kyōkai besteht hauptsächlich in der Herausgabe des Haiku-Almanachs für seine über 1000 Mitglieder und in der Verleihung eines Preises an junge Haiku-Dichter. Auch ist geplant, die Geschichte des Haiku auf Hokkaidō zu schreiben oder einen Haiku-Kalender zu veröffentlichen.

In diesen 36 Jahren nach dem Zweiten Weltkrieg gedieh das Haiku wie zuvor, gedeiht es auch heute noch mehr als zuvor.⁴⁴

Der traditionellen Hototogisu-Gruppe gehören folgende haishi und deren Leiter (: sensei) an: Ishikari mit Ōtsuka Chichiji (1912 —)⁴⁵; Haikai (Das Haiku-

42 Die zunehmende Zahl der Teilnehmer am „hokkaidō haiku nenkan“ (Almanach der Haiku Hokkaidōs) wird am folgenden ersichtlich: Almanach 1 (1956) : Anzahl der haijin, die mit eigenen Haiku beitrugen: 383; 2 (1952) : 236 ; 3 (1959) : 222; 4 (1961) : 268; 5 (1962) : 296; 6 (1965) : 208; 7 (1966) : 244; 8 (1967) : 244; 9 (1968) : 316; 10 (1969) : 316; 11 (1970) : 346; 12 (1971) : 423; 13 (1972) : 455; 14 (1973) : 475; 15 (1974) : 519; 16 (1975) : 575; 17 (1976) : 704; 18 (1977) : 768; 19 (1978) : 776; 20 (1979) : 808; 21 (1980) : 828; 22 (1981) : 1,028; 23 (1982) : 1,096; 24 (1983) : 1,136; 25 (1984) : 1,138.

Im Jahre 1981 erschienen auf Hokkaidō 23 Anthologien, 36 Gedichtbände und unzählige Gedichtheftchen. Seit dem Tod des vormaligen Präsidenten des Hokkaidō haiku kyōkai, Samejima Kōgyoshi, arbeitet interimweise Yamagishi Kyorō.

43 Samejima Kōgyoshi (s. Anm. 30) gehörte seit 1929 der Hototogisu-Gruppe an. Aufgrund seiner Unparteilichkeit und seines Gerechtigkeitsempfindens fand der Haiku-Verein auf Hokkaidō guten Kontakt zu den verschiedenartigsten dichterischen Richtungen. Dank der ideellen Unterstützung des Vereins konnte ebenfalls Sakanishi Hachirō in Zusammenarbeit mit über 50 japanischen und deutschen Dichtern die „Anthologie der Deutschen Haiku“ (Sapporo 1979) herausgeben.

Kōgyoshi veröffentlichte zwei schöne eigene Gedichtbände.

Bewölkter Morgen –
auf der Wiese die Rinder
schlafen noch alle.

44 S. II. Teil.

45 Sie wird in der Stadt Asahikawa herausgegeben. Bis November 1983 267 Num-

Meer) mit Fujita Kyokuzan (1903 –)⁴⁶; Hikabu (Die Purpurrübe) mit Satō Kōsei (1911 –)⁴⁷. Hinzukommen 6 Wichtige Zeitschriften.

mern. Gründung 1952.

Die Sonnenblumen –
während der Dämmerung noch
seh ich ihr Kreisen. Chichiji

Die Sonnenblumen –
in der Dämmerung noch drehn
sie sich mir im Kopf.

Treibende Schollen
Eises – dort noch wie zögernd,
hier schon voll in Fahrt. Satō Bokusui

Zurück auf dem Feld
blieb ein Rettich – runzig schon
und ganz verschrumpelt. Ōkago Rosetsu

46 Sitz in Asahikawa. Bald ist Nr. 160 erreicht. Gründung 1968.

In diesen Abend,
in diesen Frühling möchte
ich mich auflösen. Kyokuzan

47 Sitz in Sapporo. Bald ist Nr. 450 erreicht. 1946 gegründet, wurde sie im Jahre 1948
in Otaru fortgeführt und besteht seit 1978 in Sapporo.

Die Magnolie blüht –
ihr Weiß hat sich verspätet –
verspäteter Schnee. Kōsei

Überall blüht er,
der Löwenzahn, verwehrt mir
den Gang um das Haus. Shimada Itsuho

Wie vom Nebelhorn
eines Schiffes widerhallt
es mächtig in mir. Yoshioka Shūhan'ei

• Ein Wort, das sich auf Hokkaidō auf Nebel bezieht, dürfte zu
einem kigo gehören, der auf jede Jahreszeit, außer auf Winter,
paßt. (Nach Bericht meines Kollegen Herrn Tanada Ichirō, der
aus der Stadt Kushiro stammt.)

Klarer Herbsthimmel –
die Felswand als sonst –
da kommt kein Echo. Mizumi Yūyūshi

Zur Avantgarde zählen : Hyōgentai mit Kawabata Rinta (1919 –)⁴⁸, Ryū (Das Körnchen) mit Yamada Ryokukō (1917 –)⁴⁹ usw. Die in diesen Gruppen vereinigten haijin halten sich oft nicht an das kigo.

Andere haishi stehen zwischen der traditionellen Hototogisu und der Avant-

-
- 48 Sitz in Sapporo, bis jetzt 380 Nummern. Mitgliederzahl 500.

Was da liegt und schläft,
Bein und Hand, wie zerstückelt,
soll ein Bauer sein.

Rinta

Zutiefst aus dem Grund
der verlassenen Grube
summt eine Fliege.

Kawabuchi Masuo

Beethovens Neunte –
der einzige Lichtblick im
dunklen Dezember.*

Nakazai Kenji

* In diesem Haiku spiegelt sich eine neue Japanische Tradition wider: Seit dem Ende des Zweiten Weltkriegs ist es üblich, zum Jahresende überall in Japan Ludwig van Beethovens Neunte aufzuführen. Schätzungsweise wird die Neunte allein im Dezember etwa 80 mal in Städten jeder Größe aufgeführt. Zur Aufführung der Neunten in Deutschland (BRD und DDR) und Japan anlässlich des Jahreswechsels schrieb Sakanishi einen Artikel für das Feuilleton der Hokkaidō shimbun und der Shinano mainichi shimbun (1980).

„Die Neunte“ gehört zum Winter-kigo!

- 49 Sitz in Sunagawa.

Dort auf der Wiese
allem Anschein nach Pferd,
das in Ruhe grast.

Ryokukō (1912 –), gebürtig in Sapporo, ist Ingenieur für Maschinenbau und arbeitet in einer Fabrik der Tōyō Kōatsu Co. Nebenher leitet er die haishi Kobushi (Die Faust), die seit 1946 für die Arbeiter-haijin der Fabrik herausgegeben wird. Aus dieser Zeitschrift entwickelte sich später unter der tatkräftigen Mitarbeiter von Hosoya Genji die große Zeitschrift Hyōgentai. Ryū wurde von Ryokukō 1965 gegründet, am Ende 1983 Nr. 58.

- 50 Sitz in Sapporo, über 650 Nummern, Gründung 1937.

Wie kahl die Eiche
ohne Laub – wenn wenigstens
entwas Schnee fiel!

Kyorō

garde : Ashikabi mit Yamagishi Kyorō (1910 –)⁵⁰; Akashiya mit Okazawa Kōshi (1922 –)⁵¹; Tsubo mit Kanaya Nobuo (1914 –)⁵²; Juhyō (Der bereifte Baum) mit Shionoya Shūfū (1922 –)⁵³; Ezoniū (benannt nach einem

Der Lachs kehrt zurück –
die Berggipfel spiegeln sich
weiß verschneit im Fluß.

Hira Haruo

51 Sitz in Sapporo, bald Nr. 410.

Die Schule vorbei!
Auf der Insel zu bleiben,
das ist mein Schicksal

Shimizu Keigetsu*

Eisstarr noch der See –
doch der Ishikari-Fluß
fängt an sich zu regen.

Matsukura Yuzuru

Ein Hund im Zentrum
des Atombombenangriffs –
ein Häufchen Asche.

Kōshi

Das ganze Leben
auf der Insel verbracht – Tang
schneidend bis zuletzt.

Keigetsu**

* u. ** Keigetsu: tätig als buddhistischer Mönch auf der Insel Rishiri.

52 Sieh. Anm.34. Kondō Jun'ichi, Professor für japanische Literatur, gilt als vielversprechender Dichter. Diese haishi hat eine Auflage von 1000 Exemplaren monatlich.

Die Götter selbst sind's,
die aus den Sternen strahlen
hoch über dem Berg.*

Jun'ichi

* Frühlingsberg

Ohne Unterschied
trifft der Kuhschwanz – trifft er
Mücke und Menschen.

Minoshima Isamu

53 Sitz in Asahikawa.

Heute wähle ich
mir eine Krawatte aus,
die zum Frühling paßt.

Yamakawa Shirō

Ferne ein Bauer –
zu seinen Füßen eine
Wolke von Schafen.

Shūfū

Pflanzennamen auf Hokkaidō und im Ostsibirien-Gebiet: Angelica ursiana Maxim) mit Saitō Seika (1916 –)⁵⁴; Seijo (Die blaue Frau : eine Frost-, Schneegottheit) mit Shinmyō Shimei (1928 –)⁵⁵; Dō (Der Weg) mit Kita Kōsei (1923 –)⁵⁶; Kita no kumo mit Katsumata Mokufūu (1914 –)⁵⁷ usw.⁵⁸, die sich alle Ausdrucksweise der Shin dentō ha bedienen.

-
- 54 Die haishi, die das Heimat-Haiku pflegt, besteht seit 1946, Dez. 1984 Nr. 438.
 Einsam im Sandsturm
 ein Grab auf dem Kap – bald wird
 es zugeweht sein. Saitō Seika
- Mittags leuchtet das
 blühende Kartoffelfeld
 wie tausend Sterne. Nitta Asako
- 55 Sitz in Asahikawa, Gründung 1963, bisher 260 Nummern.
 Ein Hörrohr der Halm –
 wie er in mich hineinhorcht,
 in mich Tropfen Tau! Shimei
- Beschneite Zweige –
 manchmal löst stäubend sich Schnee –
 wie ein Vorspiel ist's! Ichijō Shūhō
- 56 Die Tsubute genannte haishi wurde im Jahre 1956 gegründet (sieh. Anm. 44). 1966 wurde sie in Tobira (Die Tür) umbenannt, 1967 in Dō. Sitz in Sapporo. Über 200 Nummern.
 Eine Kostbarkeit
 ist jeder Sonnenstrahl auf
 der Hand im Norden. Kōsei
- Ihre Schuldigkeit
 hat sie getan – im Schneefeld
 die Vogelscheuche. Fujita Rijin
- 57 Sitz in Sapporo, über 150 Nummern, Gründung 1970.
 In den Rücken fällt
 er mir, verstellt mir den Weg –
 solch ein Wind im Mai. Kikata Asako
- Alle spüren sie,
 Rind und Pferd, ob fern, ob nah,
 den kühlen Sommer. Mokufūu
- 58 Hier sei die haishi Nire (Die Ulme) mit Kimura Toshio (1923 –) genannt. Gründung 1978.

In seiner Form gleicht Haiku von Kyōto demjenigen Sapporos.⁵⁹ Beide unterscheiden sich jedoch im Inhalt, den die haijin heimatbezogen darzustellen vermögen. Die jeweils typische Landschaft, Geschichte und Mentalität der Be-

Über dem Hafen
ein Feuerwerk – Berghänge
rings, jählings erhellt.

Kurahara Jun

Im Herbst die Hecken
gerodet – ungeschützt steht
die Herde im Wind.

Toshio

Eine Lawine
streifte den Baum – an dieser
Seite kein Ast mehr.

Toshio

Anzugeben ist noch eine weitere haishi: Megi (Der keimende Baum) mit Takasaki Ikushū (1922–), Sitz in Muroran. Schon ist die Nummer 100 erreicht. Hier sei berichtet, daß der Düsseldorfer Dichter Harald K. Hüsmann (1933–) war am 3. 7. 1981 bei einer Haiku-Versammlung in Muroran unter Leitung von Ikushū anwesend war; dabei fungierte Sakanishi als Interpret.

Kein einziges Blatt
am Baum hält still – wie denn auch
bei solch jungem Laub!

Ikushū

Ich möchte noch die jüngste haishi erwähnen: Setsurei (Der höchste Gipfel des Schneegebirges). Die haishi wurde von Professor Yokomichi Shūsen im Jahre 1979 gegründet.

Nichts ist lautloser
als treibendes Eis kurz vor
Sonnenuntergang.

Shūsen

- 59 Daher gibt es viele Hokkaidō-haijin, die eine direkte Verbindung zu den auf Honshū (die Hauptinsel Japans) bestehenden haishi haben. Von über 20 haishi auf Honshū sind auf Hokkaidō wohnende und Haiku schreibende haijin Mitglieder. Einige Beispiele dafür: Kawa (Der Fluß): früher 120 Mitglieder aus Hokkaidō; Aki (Der Herbst): 70; Hototogisu: 200; Suimei (Klares Wasser): 50; Wakaba (Die grünen Blätter): 100; Kiseitsu (Die Jahreszeit): über 60; die übrigen haishi auf Honshū nehmen durchschnittlich 30 bis 40 Mitglieder aus Hokkaidō auf.

Ein bekannter haijin in der Gruppe Aki ist Shima Kojin (1925–) :

In den Augen der
Kuh, die Wasser trinkt, spiegelt
sich die Teichrose.

wohner in das Haiku einfließen zu lassen, ist die fortwährende Aufgabe, der sich ein haijin unterzieht.⁶⁰

Eine Schülerin Kojins ist Kasai Shuko (1933—) :

Die Birnen verblühen –
der Name des toten Sohns*
kehrt wieder in den Wolken...

* Kasai Shin, als Student gestorben.

- 60 Die „Anthologie Der Deutschen Haiku“ (sieh. Anm. 43) bietet Anlaß, die Unterschiede und Gemeinsamkeiten des japanischen und des deutschen Haiku anzuzeigen. In diese Anthologie sind viele aus Hokkaidō stammende Haiku vergleichsweise aufgenommen worden, deren Thematik derjenigen der deutschen ähnlich ist. Die klimatischen Bedingungen der Insel Hokkaidō sind denjenigen in den deutschsprachigen Ländern sehr ähnlich.

+ + + +

Es sei mir erlaubt, an dieser Stelle zu vermerken, daß ich die Ehre hatte, während der letzten zehn Jahre 13 Persönlichkeiten aus den deutschsprachigen Ländern bei mir zu Besuch zu haben, die sich mit Haiku beschäftigen. Ihre Namen seien mit Dank angegeben:

Elisabeth Brüning, München

Erika Schwalm, Frankfurt

Doris Flück-Horisberger, Bern

Doris Götting, Köln

Frank Fiedler, Leipzig

Günther Klinge, München, in Begleitung des

Japanischen Germanisten und haijin

Katō Keiji

Harald K. Hülsmann mit seiner Ehefrau Erika, Düsseldorf

Horst Hammitzsch mit seiner Lebensgefährtin Frau Lydia Brüll, Ennigerloh

Wolfgang und Maria Magdalena Durben, Beckingen/Saar

II. Blüte im Alltag der Gegenwart

Die im I. Teil behandelten und sich auf die Gegenwart beziehenden Haiku sind im folgenden nicht mehr angegeben. Für die Auswahl zeichnet H. Sakanishi verantwortlich.

Bei den im folgenden angegebenen 9 Gebieten sind jeweils die heute in den Städten nach dem Almanach 1981, 1982, 1983 und 1984 bestehenden Haiku-Gruppen, -Gesellschaften oder -Vereine grob aufgelistet. Daran kann die Größe der jeweiligen Gruppen abgemessen werden.

Auf Hokkaidō ist das Haiku in den über 30 Grund- und Mittelschulen ein besonderes Unterrichtsfach, das in ganz Japan als vorbildliches Modell Geltung erlangen sollte.

Im Gebiet von Oshima und Hiyama⁶²

Auf einem Baumstumpf**
liegt ein vergessenes Buch –
Sommerferien!

Yamamoto Chisato
(Kikonai; Isaribi und Tsubo)*

Weit in den Sommer
blickt er hinaus, der Vogel***
aus Porzellan.

Shimizu Hōdō
(Fukushima; Dō)

Am Baumstamm,** der liegt,
wie er fiel, erkenne ich,
daß es nun Herbst ist.

Kanazuka Hisa
(Yakumo; Ashikabi)

* Unter dem Dichternamen werden in Klammern der Wohnort des Dichters und die Zeitschrift bzw. die Gruppe mit Sitz auf Hokkaidō, welcher der Dichter angehört, angegeben.

** Der die Stadt Kikonai symbolisierende Baum ist die japanische Zeder, während derjenige für die Stadt Yakumo katsura (jap.) der *cercidiphyllum japonicum* ist.

*** Nach Bericht des Dichters an den Herausgeber ist der Vogel eine Taube.

Stoppelfelder* rings.

Der heimkehrt – in die Kindheit

kehrt er zurück.

Tamura Tōsui

(Matsumae; Ashikabi)

Spatzengeschilder

bei Sonnenaufgang** –

kein einziger Spatz zu sehn.

Kanaya Nobuo

(Oshamambe; Tsubo)

Eine Schneeflocke

groß und naß – Buddhas Hymne***

singt eine junge Witwe.

Shinada Sōchiku

(Mori; Akashiya)

Einen anderen schmähend,

soff ich mich krank mit Reiswein –

welch bitterer Winter!

Nakamura Kodo

(Kamiiso; Kamiiso haidan)

* Hier die Reisfelder im Spätherbst; seit etwa Mitte des 13. Jahrhunderts ist der Ort Matsumae von den Japanern bewirtschaftet.

** Sonnenaufgang im Winter; der Spatz im Winter im Urheiku ist ein kigo.

*** Hymne auf Jap.: wasan. Die Witwe trägt ein schwarzes Kleid.

62 Oshamambe: 2 ; Yakumo: 1 (seit 1919); Mori: 1 ; Sunahara: 1 ; Nanai: 1 ; Hakodate: 17; Kamiiso: 1 (seit 1928); Kikonai: 3 (seit 1921 gab es 1 Gruppe); Fukushima: 1 ; Matsumae: 1 (seit etwa 1760) Taisei: 1 ;Kaminokuni: 1 ; Esashi: 1 ; Kumaishi: 1 ; Okushiri: 1 .

Alles und jedes
muß durch das Meeresgebraus –
Schneeflöckchen im Sturm.

Sekigawa Shōzō
(Assabu; Dō)

Im Gebiet von Iburi und Shiribeshi⁶³

Mit Kinderschrittchen
geh ich dem Enkel voran
durch den Frühjahrsschlam.

Andō Kaimu
(Toyoura)

Die sonnige Tiefe
des Frühlings mißt er aus,
der Yōteizan-Berg.*

Sugawara Koshū
(Rusutsu; Dō)

* Der Yōteizan-Berg (1893 m.; ein tätiger Vulkan) wird von den Bewohnern „Ezo-Fuji“ genannt, d. h. er ist ein Berg gleich dem Fuji-Berg in Hokkaidō. Der Stadtname sollte aus einem Wort der Ainusprache ru-sut stammen, die einen unteren Ort zum Paß bedeutet.

Apfelblüten im Wind –
dahinter das grüne
Gebirge bewegt sich.

Shioda Setsuko
(Ōtaki)

Für den einzigen
Pflüger auf dem Acker*
steigt die Lerche empor.

Hoshi Seiichi
(Hayakita; Seijo)

Am Strand die wilden
Blumen** – sie blühen in der
Farbe des Meers.

Saitō Midori
(Iwanai; Akashiya)

Der Kernfrage nicht achtend
fliegt er weiter, der Samen
des Löwenzahns.

Kinoshita Roseki
(Tomakomai)

* Der Spargel gehört einer der Hauptprodukte der Stadt Hayakita.

** Lathyrus maritimus, auf Engl.: beach-pea.

Wie zart die Hand des Kindes –
und doch so quirlich,
ja ein Feuerwerk!

Tabata Nobuko
(Suttsu; Akashiya)

Die mit dem blauen
Sommerkleid* – hat sie einen
fernen Geliebten?

Matsuda Koto
(Kimobetsu; Akashiya)

Der Sommer zu kühl –
um zwanzig Tage zurück
das Wachstum auf dem Reisfeld.**

Takada Kiyotaka
(Mukawa; Sarurun)

Kälte im Sommer –
die Pappeln sehn hinüber
zur Eisenhütte.

Irie Katsuto
(Muroran; Hyōgentai und Nire)

* Hier ein Sommerkimono und zwar yukata, den man gerne nach dem Baden am frühen Nachmittag trägt. Mit der Verbreitung des geselligen Tanzes am Abend beim buddhistischen Totenfest im August (bon odori) seit dem 15. Jahrhundert hat yukata seine große Beliebtheit gefunden; er gilt aber nicht als Gesellschaftsanzug.

** Hauptprodukt der Stadt Mukawa ist Reis; 80% des Ackerbodens ist das Reisfeld. Im Sommer des Jahres 1980 war es sehr kühl, so daß die Ernte des Reises gering war.

Sichtbar im klaren Mondlicht
die über den Herbsthimmel
gewölbte Zeit.

Fukuda Mokugyū

(Date; Date haiku kai)

Immer wieder und wieder
fliegen die Möwen
an gegen den Wintersturm.

Konno Hiroto

(Noboribetsu)*

Wachträumend geh ich
über winterliches Feld –
sind da nicht Panzer?

Satō Shikō

(Yoichi; Yoichi haiku kai)

Sylvesterabend –
was je ich getan,
es bleibt nicht ungeschehn.

Sakaki Sōshin

(Shimamaki; Araiso ginsha)

* Eine kleine Stadt mit einem lokalen Fischereihafen.

Der Stadname dürfte aus einem Wort der Ainusprache nuper-pet stammen, das einen Fluß mit Wundertätigkeit bedeutet.

63 Toyoura: 1 ; Suttsu: 1 (eine damalige Zeitung berichtete über die Haiku-Tätigkeit der Bürger im Jahre 1897); Shimamaki: 1 (es gibt ein Haiku-Dokument aus dem Jahre 1845); Kimobetsu: 1 ; Iwanai: 1 ; Kyōwa: 1 ; Rusutsu: 1 (seit 1905); Yoichi: 3 (seit etwa 1860 beschäftigten sich die Leute mit Haiku); Mukawa: 1 ; Noboribetsu: 8 ; Date: 1 (seit etwa 1920); Ōtaki: 1 ; Oiwake: 1 ; Hayakita: 1 .

Im Gebiet von Sorachi⁶⁴

Im Birkenwipfel,
in seinem Wehn, spürt man den
Willen des Frühlings.

Takikawa Keika
(Urausu; Akashiya)

Unreife Mandarine* –
schon bevor man hineinbeißt,
macht man ein saures Gesicht.

Matsukura Yuzuru
(Shintotsugawa; Akashiya)

Unter Wasser die Felder,
von Blitzen erhellt –
keine Aussicht auf Ernte.

Katsumata Yoshio
(Fukagawa)**

* Citrus bigaradia.

** Als Überschwemmungsgebiet bekannt; die Stadtname Fukagawa sollte eine Übertragung aus einem Wort der Ainusprache sein, das bedeutet einen Ort, wo das Wasser tief und rein fließt.

Die Vogelscheuchen –
heute sehn sie einander
in Galauniform.

Ishiguro Hakushū
(Takikawa; Akashiya)

Im Säulen des
herbstlichen Baums die Stimme
des toten Freundes.

Nakamura Kōjin
(Hokuryū; Dō)

In dieser Schlucht,
wo das Leben in den Tod übergeht,
fällt und fällt Schnee.

Satō Haruo
(Ashibetsu; Akashiya)

All die schönen
kugelrunden Samenkörnchen –
Samen des Kummers.

Numata Sue
(Bibai; Setsurei)

64 In den 50er Jahren gab es in der Stadt Ashibetsu 11 Haike-Gruppen, bestehend aus Bergarbeiter-haijin (sieh. Anm. 32). Jetzt sind es 3 ; Fukagawa: 1 ; Naie: 1 ; Shintotsugawa: 1 ; Bibai: 1 (seit etwa 1940); Urausu: 1 (seit etwa 1900); Kuriyama: 2 ; Takikawa: 2 ; Hokuryū: 1 (seit etwa 1900).

Am Fuß des Asama-Bergs.*
der tief in Wolken steht,
welken Maulbeerblätter.

Shimadachi Shishū
(Kuriyama; Seijo und Ashikabi)

Im Gebiet von Kamikawa⁶⁵

Bis spät in die Nacht hinein
verbrenne ich Gras
auf dem kahlen Feld.**

Taura Musen
(Kamifurano)

Erster Frühlingswind—
alle Finger fangen an,
sich fleißig zu regen.

Miyamoto Haruo
(Shibetsu)

* Der Asamaberg (2542 m.) ist ein aktiver Vulkan in Mitteljapan. Nach dem Bericht des Dichters an den Herausgeber bereiste der haijin diese Gegend. Von Maulbeerblättern ernährt sich das Seidenwurm.

** Einer der Hauptprodukte der Stadt Kamifurano gehört der Lavendel.

Schultern und Gesicht
wie ein duftender Lufthauch—
das ist ein Säugling.

Gotō Kentarō
(Asahikawa; Kōki)

Die Schwiegertochter—
wie eine Sonnenblume,
strahlend und guter Hoffnung.

Yamauchi Mitsue
(Nakagawa; Ashikabi und Juhyō)

In der Stadt Otaru*

Herbstausstellung—
einsam ein Bild des Kanals,
des Wahrzeichens der Stadt.

Nagashima Hiroshi
(Kembuchi; Seijo)

Vom verfaulten Baum
fällt Nebelreif nieder
auf eine Wildgans.

Fukaya Yūdai
(Asahikawa; Sekka)

* Eine alte Hafenstadt, ehemals mit einem schönen Kanal, der im Zuge der Stadtentwicklung zugeschüttet wurde. Der Stadname stammt aus einem Wort der Ainu-Sprache ot-ru-nai, das einen Fluß mit dem fließenden Sand bedeutet.

Höchste Zeit, den Reis
zu ernten*— schon mischt Schnee sich
in den Herbstregen.

Baba Ichijakushi
(Higashikawa; Ashikabi und Juhyō)

Sterne im Winter—
alles auf Erden darf nun
ohne Schatten sein.

Ishikawa Kyokuhō
(Bifuka; früher Piuka)

Alle Schneemänner
neigen sich den Augen zu—
Sonnenuntergang.

Oda Kin'ichi
(Asahikawa; Kōki)

Der Fluß atmet Frost—
jeder Hauch wird zu einer
weißen Blüte am Baum.

Kitami; Teika
(Pippu; Juhyō)**

* 93% des Ackerfelds der Stadt Higashikawa gehört dem Reisfeld.

** Der Stadtname könnte aus einer Ortsbenennung der Ainu-sprache pipi-pet od. pi-oppu stammen, die einen Fluß mit viel Steinen bedeutet.

65 Asahikawa: 8 ; Furano: 3 ; Kamifurano: 2 ; Minamifurano: 1 ; Shimekappu: 1 ; Nakafurano: 1 ; Kembuchi: 1 ; Wassamu: 1 ; Higashikawa u. Higashikagura: 1 ; Bifuka: 1 ; Otoi-neppu: vor 30 Jahren 1 ; Nakagawa: 1 ; Pippu: 1 ; Shibetsu: 1 ; (seit etwa 1917).

Im Gebiet von Hidaka und Tokachi⁶⁶

Das lange Schweigen
entschuldigend schreibe ich nun
eine Neujahrskarte.*

Ōta Setsuen

(Hombetsu; Ashikabi und Kabanome)

Erster Schmetterling
aus nördlichem Land—
wie er ungestüm atmet!

Furuzumi Dakotsu

(Chūru; Ashikabi)

Die Lerchen steigen—
auf der Tokachi–Ebene**
bleibt es anhaltend schön.

Itō Shunsui

(Shimizu; Seijo und Kabanome)

* Neujahr gilt in der japanischen Haiku-Tradition als eigene Jahreszeit vor Frühling, Sommer, Herbst und Winter. Eine Neujahrskarte in Japan entspricht etwa einer Weihnachtskarte in den christlichen Ländern.

** Tokachi-Ebene: 80% der Oberfläche der Erde ist mit dem vulkanischen Aschenboden bedeckt; 55 tausend Bauernbevölkerung; die Hauptprodukte sind Weizen, Zuckerrüben, Kartoffel und Bohnen.

Der Blinde hört das Feuer
prasseln, macht man ihm ein Bild
vom Atombombenangriff.*

Eine Variation:

Der Blinde hört das Prasseln
des Feuers, erzählt man ihm
vom Atombombenangriff.

Ôtsuka Hakuga

(Ikeda; Nire, Tsubo und Ashikabi)

Klarer Herbsttag–
den einhertrottenden Kühen
macht der Bus Platz.

Nakaya Hanjō

(Otofuke)**

Erster Herbstregen–
alle Leute bewegen sich
heute im Laufschrift.

Suda Toshio

(Makubetsu; Kabanome)

* Hier handelt es sich um die Opfer des Atombombenangriffs auf Hiroshima und Nagasaki im August 1945. Das Wort Atombombenangriff und diesem verwandte Begriffe gehören zu einem den Sommer symbolisierenden Jahreszeitwort (kigo).

** Die kleine Stadt Otofuke hat 10 tausend Rinder.

Die dem Meer zugewandten
Bäume zeigen sich schmallend
schon herbstlich gefärbt.

Uchiyama Fujō
(Obihiro; Kabanome)

Die Schäfchenwolken
scheinen zu stehen – mittendrin
ruhend der Bauer.

Miyake Sōmoku
(Ikeda; Ashikabi und Nire)

Kühler Nachtwind –
unter der Straßenleuchte
ein schneller Abschied.

Nagayama Enshi
(Urakawa; Akashiya)

66 Shizunai: 1 ; Urakawa: 1 ; (seit etwa 1900); Samani: 1 ; Erimo: 1 ; Bihoro: 1 ; Obihiro: 5 ; Ikeda: 2 ; Taiki: 2 ; Ashoro: 1 ; Shimizu: 1 ; Urahoro: 1 ; Shintoku: 1 ; Shikaoi: 5 ; Makubetsu: 1 ; Sarabetsu: 1 ; Chūrui: 1 ; Hombetsu: 1 (seit etwa 1900); Otofuke: 2 (seit etwa 1900); Ikeda: 2 ; Außerdem ist anzugeben, daß in den 19 Gemeinden im Tokachi-Gebiet einschließlich der oben angegebenen jeweils ein eigenes jährliches Bulletin der Haikubetätigung der Bürger veröffentlicht wird.

Im Gebiet von Nemuro und Kushiro⁶⁷

Wie sich das Treibeis entfernt,*
so entschwindet auch
der Lebensfrühling.

Suzuki Seikō
(Kushiro; Ezoniu)

Wie fernes Donnern hört
man von Sachalin** her
das Treibeis gehn.

Imada Ippo
(Shiranuka)

Im Frühling vertreibt
alle Sorgen die Liebe
im Mädchenherzen.

Nihei Yasuo
(Bekkai; Ezoniu)

Auf den Sterbebildern
die Bombenopfer
bleiben ewig jung.

Miwa Shizuko
(Shibecha; Hishinomi)

* das Treibeis gehört dem kigo für den Frühling.

** ostrov sakhalin.

Schaukelnde Kinder—
wie einen Ball kicken sie
den Herbsthimmel hoch.

Azuma Shiraho
(Akan; Kurumi kai)

Schwärme von Lachs,*
hineindrängend in den
mütterlichen Fluß.

Takaoka Shūkō
(Kushiro; Nire)

Ein Dorschgesicht**—
ein Gesicht eben
des Ochtskischen Meers.

Fujino Isshū
(Rausu; Ishikari)

Sonnenuntergang—
der Widerschein der Sonne
eine große Eissäule.

Tachibana Hakuyō
(Nemuro; Kabanome)

* Oncorhynchus keta salmon; eine Erscheinung im September und Oktober. Lachs:
auf Jap.: sake; in der Ainu-Sprache: shakipe.

** Gadus macrocephalus; die Fischzeit von Dez. bis März.

Starker Schneeregen—,
mittags schon brauchen sie Licht,
die Straßenhändler.

Yonezawa Sôsui

(Shari; Shari sakyû ginsha und Kita no kumo)

Auf der besonnten Seite
des verschneiten Berges
schon offen der Imbißstand.

Nishino Hôen

(Tsurui; Ezoniu)

Auf der besonnten
Stelle im Schnee die erste
Kranichversammlung.*

Kinoshita Shun'ei

(Teshikaga; Hyôgentai)

Arbeitslosenzeit**—
wie ausgestorben
die Straße jetzt im Winter.

Taura Koshû

(Hamanaka; Kabanome)

* Grus Japonensis (der weiße Kranich mit rotem Kamm).

** Die Anzahl der Arbeitslosen im Jahr 1980 in Japan betrug 1180 tausend; 1983: 1560 tausend.

67 Shiranuka: 1 ; Akan: 1 ; Tsurui: 1 ; Akkeshi: seit 1936 bis 1978 1 ; Hamanaka: 1 ; Teshikaga: 1 ; Shibecha: 1 ; Nemuro: 1 ; Bekkai: 1 (seit 1950); Nakashibetsu: 1 ; Rausu: 1 (seit 1947).

Im Gebiet von Abashiri und Sōya entlang des Ochotskischen Meers⁶⁸

Dahinholpernd das Treibeis*–
ich kann mich gar nicht
satt genug sehn.

Horikawa Tanshū
(Shokotsu; Ashikabi)

Die Eisplatte birst–
den klaffenden Riß entlang
wandert Gedonner.

Hoshi Shiyōshi
(Tsubetsu; Seijo)

Wie das Treibeis
das Land verläßt, so auch der Schnee,
der auf ihm liegt.

Noto Yūhō
(Abashiri; Tsubo)

Unverkennbar–
unter dem Schnee die roten
Keime sind gewachsen.

Hirano Saika
(Kitami; Ashikabi)

* Das Treibeis des Ochotskischen Meers bedeckt den Strand z. B. der Stadt Abashiri alljährlich von Ende Januar bis Ende März.

Vor dem dichten Grün
die Rinderherden schimmern
wie Perlmutter auf.

Ichizaki Ryōshōshi
(Kamiyūbetsu; Ashikabi)

Kühler Sommer—
meine Frau und ich, schweigend
stehn wir am Reisfeld.

Odajima Hiroshi
(Memambetsu; Hyōgentai und Ashikabi)

Im Untergehn
berührt die Sonne die Erde—
zwei Inseln,* die sich anziehen.

Ishikawa Shūgetsu
(Wakkanai; Dō und Nire)

Ein Hin- und Hergelaufe —
zu beiden Seiten des Wegs
das Zirpen verstummt.

Mimura Suiyō
(Koshimizu; Koshimizu ginsha)

* Rishiri und Rebun, die westlich der Meerenge Sōya zwischen Hokkaidō und Sakhalin in der Nähe der Stadt Wakkanai liegen; Rishiri: hohes Land in der Ainusprache, während Rebun (shiri): flaches Land.

Der Chrysantheme,
ihrem Eifer zu blühen,
stehn Sonne bei und leichter Wind.

Watanabe Tōsui
(Ikutahara; Tsubo)

Plötzlich durchzuckt es
den gefangenen Lachs—
wie wild will er zurück.

Seino Reiko
(Engaru; Ashikabi)

Vom Eismeer der Wind—
wie mit Nadeln sticht er
in die Augäpfel.

Nakadai Yasushi
(Tokoro; Tsubo)

68 Mombetsu: 5 (im Jahre 1919 gab es eine Gruppe); Abashiri: 1 ; Kamiyūbetsu: 1 ; Engaru: 1 ; Kitami: 4 ; Koshimizu: 1 ; Ikutahara: 1 ; Kiyosato: 1 ; Memambetsu: 1 (seit 1937); Yūbetsu: 1 (seit 1946); Wakkanai: 1 (seit 1927); Shari: 1 ; Koshimizu: 1 (seit 1950); Tokoro: 1 ; Takinoue: 1 ; Oketo: 1 ; Tsubetsu: 1 (seit 1910); Saroma: 1 ; Maruseppu: 1 ; Bihoro: 1 ; Rubeshibe: 1 ; Kiyosato: 1 (seit 1947).

Im Gebiet von Rumoi⁶⁹

Was da im Spiegel
sich spiegelt: das andere Ich—
ein Aprilscherz!

Koinuma Sakotsu
(Mashike; Ashikabi)

Immerzu nach Norden
fließt der Fluß— gleichmütig
sehn es die Rinder.*

Matsuhashi Eizō
(Rumoi)

Ganz hoch die Wolken**—
einen Traum erzählt
an meiner Seite der Enkel.

Sakaguchi Junyū
(Haboro; Ashikabi)

* Rinder im Sommer.

** Der Wolkengipfel gehört dem Sommer-kigo.

Erster Schneefall—
zur Zufluchtstätte
wird nun der Kuhstall.

Takahashi Shitsuko
(Horonobe; Seijo)*

Die Figur aus Schnee,**
die man abträgt— schweigend hält sie
die Hände hin.

Matsuda Teikarō
(Rumoi; Seijo)

* Der Stadtname Horonobe sollte aus einem Wort der Ainu-Sprache poro-nup stammen, das ein großes Flachland bedeutet. 97% des Stadtverwaltungsbezirks gehört der Weide; 10 tausend Rinder.

** In mehreren Städten auf Hokkidō wird das Schneefest veranstaltet; weltbekannt ist dasjenige in Sapporo.

69 Shosanbetsu: 1 ; Embetsu: 1 ; Rumoi: 10 Gruppen, die bis 1951 bestanden, wurden zu einer Gesellschaft vereinigt, also 1 ; Mashike: 3 ; bis 1962 bestehende Gruppen wurde zu 1 vereinigt; Horonobe: 2 ; Hahoro: 1 ; Tomamae: 1 ; Teshio: 2 .

Im Gebiet von Ishikari mit Sapporo⁷⁰

Erstes Morgenrot*–
von Dorf zu Dorf die frischen
Spurren von Karren.

Takuma Rokusen
(Sapporo; Dō)

Erstes Telefongespräch
im neuen Jahr–
ein Ansporn für weitere.

Asamizu Mitsue**
(unbekannt)

Ein Tauwetter jäh–
Himmel und Erde fallen
in sich zusammen.

Sasaki Shikō
(Sapporo; Ashikabi)

* Erstes Morgenrot gehört dem kigo für das Neujahr.

** aus: Anthologie Der Deutschen Haiku, S 217.

Melkzeit ist– durch Schlüsselloch
der Stalltüre ergießt sich
Frühlingslicht wie ein Milchstraße.

Shimada Mayako*
(Sapporo)

So wie jetzt
ging ich schon lange nicht mehr mit meiner Frau**
am Fluß hin.***

Kanazaki Kajō
(Sapporo; Suisei)

Pflaumenblütenfall–****
eine Blüte fällt auf die
Augen des trächtigen Pferds.

Kikuchi Tekisui
(Sapporo; Mizubashō)

Die Salweide–
Kühe antreiben wird man
mit ihren Zweigen.

Takeda Tetsuo
(Ishikari; Nire)

* aus: Anthologie Der Deutschen Haiku, S. 217.

** Die Silbenzahl beim Lesen des Urgedichts: 3 : 11 : 3.

*** Der Fluß: Toyohiragawa, dessen ursprünglicher Name Sapporo (in Ainu-Sprache: satoporo-pet; ein getrockneter großer Fluß).

**** Pflaume: prunus domestica.

Wie die Brinen blühn–
zu Fuß möchte ich den Fluß
überqueren heut!

Tsujiwaki Keiichi
(Sapporo; Ryū)

Frühling. Vom Hügel herab
fährt ein Zug– geradewegs
aus dem Bilderbuch.

Minami Riichi
(Sapporo; Ryū)

Mit Grün wachse ich zu,
ich abgebaute
Grube trauere.*

Sasaki Raboku
(Sapporo;Seijo)

Im Sommer– die Frau
auf dem Plakat zeigt ihre
perlweißen Zähne.

Niizuma Hiroshi
(Sapporo)

* Nach der Abbaubringung des Kohlenbergwerks im Gebiet von Yūbari im Sommer 1983.

An seinem Körper*
kann man die Rippen zählen–
ein geschlagener Mann!

Ichimura Masayuki
(Chitose; Akashiya)

Kraftvoll geschwommen.
Nun bin ich erschöpft– Tropfen
am ganzen Körper.

Kasamatsu Hisako
(Sapporo; Tsubo)

Ein Donnern in den Wolken
wie ein Wassefall
stürzte der Gletscher nieder.**

Ide Ayao
(Sapporo)

Der leere Stuhl–
ins Schattendunkel
sich zu setzen, verlockt er.

Miura Shūhō
(Eniwa; Ashikabi)

* Der nackte Körper gehört dem Sommer-kigo.

** Gedichtet in der Schweiz 1984.

Die Rückseite so herbstlich
bunt wie die Vorderseite—
gefallne Blätter.

Hira Haruo
(Sapporo; Kitanokumo)

Wie hoch der Himmel!
Des Vortragenden Stimme
geht an mir vorbei.

Tanaka Sōmon
(Sapporo; Ashikabi und Akashiya)

Geräusch des Go-Spiels
leis und klar in der Stille—
und Chrysanthemenduft.

Suzuki Saichi
(Sapporo)

Ich gehe über Laub—
wie über Vergangenes
und Zukünftiges.

Tsutsumi Byakuu
(Sapporo; Kitanokumo)

Für welche Kranken
ist der nächste Stock bestimmt—
der Mond am Mittag?

Suzuki Mitsuhiko
(Sapporo; Hyōgentai)

Gefängnisruine—

sind nicht im Nebel leise

Seufzer vernehmbar?

Nakagoshi Kashō

(Sapporo; Hokugun)

Das Blut in der Plastikflasche

tropft langsam wie Blätter

vom herbstlichen Baum.

Okamoto Masatoshi*

(Sapporo; Kita no kumo)

Regen im Spätherbst—

was bei Sonnenuntergang

erblickt der Grabstein?

Nakajima Ryū

(Sapporo; Dōhyō und Hokugun)

Morgendämmerung—

das Reh, vor dem ich stoppe,

schaut erschrocken drein.

Nagata Kōichirō

(Sapporo; Azusa)

Unterm Baum, auf den Schnee fällt,

Reiswein

süßend und trinkend.

Suzuki Kyōzō

(Sapporo; Kōki)

* aus: Tagebuch eines Arztes (v. Paul Lüth, DVA Stuttgart 1983, Seite 243).

Abgeerntete

Reisfelder– endliche Ruhe

in Blüten aus Reif.

Aikawa Ikuyō

(Ebetsu; Akashiya)

Ein leerer Liftsessel kommt an,

um den sich noch der

Bergnebel windet.

Sonoda Musōka

(Sapporo; Kōki)

Bohrend mit einem

Bohrer– in der Kalten Nacht

bin ich ganz allein.

Saikawa Nobio

(Sapporo; Hyōgentai)

Stolz leben und in

Ruhe sterben– das ist mein

Winter, der jetzt kommt.

Hangai Mieko

(Sapporo)

Armseliges Schilf,

das der zugefrorne Sumpf

frierend festhält.

Minamoto Onihiko

(Sapporo; Dō)

Die nach Mohrrüben
duftende Luft auf dem Markt
lockt Käuferinnen herbei.

Yomo Mariko
(Sapporo)

Einen Hut gekauft
für den Winter– nicht wissend,
ob ich ihn erleb.

Terada Kyōko*
(Sapporo)

Ihre Gesichter
in den Schnee drückend sterben
die Chrysanthemen.

Nagata Kōichirō
(Sapporo; Azusa)

Am Vordach der Eiszapfen
noch dick– von den Mißernten
die Schuld noch nicht abgezahlt.

Nishino Kōzaburō
(Sapporo; Akashiya)

Chräle hör ich klingen,**
schau ich mir einen alten
Wiener Stadtplan an.

Kubota Kaoru
(Sapporo)

* Deise begabte Dichterin verstarb bald am Krebs.

** Der Choral (jap. seika) gehört dem kigo für den Winter.

Mit dem Ohr am Winterbaum,
aus der Unterwelt
hören wir ein Lied.*

Yamakage Hakuchō**
(Sapporo)

* Die Stimme des Buddhas.

** aus: Anthologie Der Deutschen Haiku, Seite 311.

70 Eniwa: 1; Chitose: 3 (in den Jahren 1910—1920 gab es 1 Gruppe); Sapporo: über 20.

Das vorliegende Essay des ersten Teils wird von Kimura auf Jap. geschrieben.

Das Essay wird von Sakanishi ins Deutsch übersetzt; die Anmerkungen dazu werden auch von Sakanishi geschrieben.

Das gesamtmanuskript auf Deutsch wird von Großmeier überarbeitet; die Nachdichtungen werden auch von ihm geschrieben.

(昭和60年 5 月 21 日 受理)

Body composition and three indices of physical fitness in freshmen: exercise is of no effect ?

Kôji Taniguchi, Ichiji Seino, and Hidetoshi Konari.

Abstract

Grip strength, back strength, standing trunk flexion and skinfold thickness were measured on 314 freshmen (mean 18.6 years). Body composition was estimated by the method of measuring skinfold thickness. The subjects were asked whether they had belonged to athletic clubs in junior and/or senior high schools or not, and they were divided into four groups with regard to their answers.

Of the groups, group A is composed of 94 students who belonged to athletic clubs both in junior and senior high schools and group B is composed of 117 students who did not. The values of groups A and B were compared.

The results were as follows:

- 1) The mean value of fat storage rate (% fat) of all subjects was 21% and 44 per cent of them were judged to be obese.
- 2) The % fat of group A was smaller than that of group B.
- 3) Group A indicated significantly bigger Lean Body Mass (LBM) and LBM/Height-index than group B ($P < 0.01$).
- 4) The grip strength and back strength of group A were significantly better than those of group B ($P < 0.01$).
- 5) There was no statistical difference in standing trunk flexion between groups A and B.

From these results, it seems that exercise in adolescence keeps % fat small, promotes the development of muscle and enhances muscular strength.

The development of materialistic civilization have caused the shortage of physical activities. The shortage of physical activities is apt to induce obesity^{1), 2)} and various diseases.^{3), 4)} How should we judge obesity ? The method of judging obesity from the index of height and weight have been widely used: Rohrer index, Ponderal index, Kaup index, etc.^{5), 6)} Suppose there are two persons of the same height and weight: one leads an active life, the other does

not. Can we conclude that there is no difference in body between the two persons ?

Generally speaking, endurance runners have smaller adipose tissue and weight lifters have bigger muscular tissue than inactive persons.^{7), 8)} Judging obesity by the indices of anthropometry could be misleading. That is the reason why we apply the conception of "body composition". Body composition can be divided into Lean Body Mass and adipose tissue.^{9), 10), 11)} Body composition can not be directly measured *in vivo*, and so it is indirectly estimated various methods.^{10), 12) - 17)} Of the methods, the method of measuring skinfold thickness is widely applied because of its simplicity.^{6), 18), 19), 20)}

There are many papers on the relation of physical activities to body composition.^{7), 8), 21) - 24)} What about body composition in Japanese freshmen ? Masaki²⁵⁾ reported that the values of back strength and standing trunk flexion in Japanese pupils were decreasing. What about those in Japanese freshmen ?

The purpose of this paper is to estimate body composition in Japanese freshmen, and to examine the effect of exercise on body composition and three indices of physical fitness.

Methods

Subjects

Three hundred and fourteen freshmen in Muroran Institute of Technology participated in this study as subjects. They ranged in age from 18 to 21 years.

Body composition (% fat, LBM)

Skinfold thickness was measured with "Eikenshiki skinfold caliper".²⁶⁾ % fat was estimated by the modified method of Nagamine¹⁸⁾ and that of Brožek *et al.*²⁷⁾ LBM was calculated by using % fat derived from the methods described above: $LBM = (1 - \% \text{ fat}/100) \times \text{Weight}$. LBM represents muscular mass.¹¹⁾ LBM/Height-index represents the development of muscle.¹¹⁾ % weight was calculated

Body composition and three indices of physical fitness in freshmen : exercise is of no effect ?

on the basis of the standard weight in the hand book published from the Ministry of Welfare.²⁸⁾

Results

Physical characteristics and measurements of subjects are presented in table1. We compared our results with statistical data.^{29), 30)} Our subjects were similar to those in the data in height, but significantly heavier in weight. Back strength and standing trunk flexion were inferior to those in the data, but grip strength was better. Skinfold thickness in tricep showed no significant difference, but that of subscapular showed significant difference.

Table 1 Physical characteristics and measurements of subjects. N=314

	Height (cm)	Weight (kg)	Rohrer index	% weight	S.T. tricep	S.T. subs.	S.T. sum
m	170.6	63.6	128.3	107.4	13.6	17.1	30.7
SD.	5.45	8.98**	18.12	14.35	7.22	9.45**	16.00**
	% fat	LBM	LBM/Height	Grip S.	Back-S.	Standing T.F.	
m	21.0	49.8	29.1	48.4	92.6	13.2	
SD.	7.87	5.02	2.46	7.16**	19.62**	5.99**	

S.T.: skinfold thickness. sum: tricep + subscapular.

* and ** show the significance at 5% and 1% level, respectively.

Nagamine⁶⁾ and Huenemann, R. L., *et al.*²⁾ recommend 20% fat as the criterion of obesity. In this study, 44 percent of all subjects were considered to be obese. LBM and LBM/Height-index showed smaller values than those of other reports.^{31) ~ 34)}

Table 2 Comparison of the values between groups A and B.

		Height (cm)	Weight (kg)	Rohrer index	% weight	S.T. tricep	S.T. subs.	S.T. sum.
A: n=94	m	171.4	64.9	129.2	108.7	13.6	16.2	29.8
	S.D	5.22	7.96	17.03	13.14	7.08	8.61	14.99
B: n=117	m	169.5	62.3	127.9	106.4	14.5	18.4	32.9
	S.D	5.17**	9.17*	18.63	15.18	7.79	10.35	17.5
		% fat	LBM	LBM/Height	Grip S.	Back S	Standing T.F.	
A: n=94	m	20.4	51.3	29.9	49.2	95.9	13.7	
	S.D	7.37	4.80	2.30	6.87	18.36	6.51	
B: n=117	m	22.3	47.8	28.2	46.4	87.2	12.6	
	S.D	8.66	4.65**	2.35**	7.08**	20.35**	5.76	

Table 2 shows comparison of group A with group B. Height and weight showed significant difference ($P<0.01$, $P<0.05$). Skinfold thickness and % fat in group B showed large values. Muscular strengths were better in group A. LBM and LBM/Height-index were better in group A, too.

Table 3 shows the distribution of the degree of obesity from the viewpoints of % weight and % fat, Thirty per cent of subjects were judged to be obese with regard to % fat, but they could not be judged to be obese with regard to % weight. This tendency can be seen more in group B than in group A.

Body composition and three indices of physical fitness in freshmen : exercise is of no effect ?

Table 3 Distribution of the degree of obesity from the viewpoints of % weight and % fat

% weight		non-obesity				obesity
% fat		~90	91~100	101~110	111~120	121~
non-obesity	~14	4	12	5	1	
		7	15	4		
		19	40	15	1	
	15~19		11	14	7	
		4	21	4	2	
		6	43	37	14	
obesity	20~24		2	11	5	1
			4	14	6	1
			7	36	18	5
	25~29			1	5	6
				7	6	1
				8	15	11
	30~				3	6
					7	14
					12	27

above column; numbers of group A.

middle column; numbers of group B.

under column; numbers of all subjects.

Consideration

The shortage of physical activities may replace a part of muscle with adipose.³⁵⁾ In this study, mean values of Rohrer index and % weight show no obesity, but those of % fat show obesity. Consequently we might say that many students wear excessive adipose coats.¹⁾ In other words, there may be many students lacking in sufficient muscular mass. This tendency is apt to be seen in group B.

Although Masaki²⁵⁾ reported that muscular strength was decreasing, we con-

sider this tendency as an excessive adiposity or lack of sufficient muscular mass. The moderns seem to have inactive life-styles. We expect that the majority of our subjects who have little experience of walking a long distance and exerting all their powers will have undeveloped muscles. This seems to be supported by the comparison between groups A and B: in group A, % fat was smaller, muscular strengths were better, LBM and LBM/Height-index were higher. We think that these are the effect of exercise in adolescence.

Although we have gained such conclusion as above, we concern about the results in group A. % fat of group A was higher than that of other reports. In addition LBM and LBM/Height-index were smaller than those in other reports.^{32), 38)} The values of group A were similar to those of inactive American young men.³⁹⁾ We must consider that the inactive life of students preparing for entrance examination had a great influence on our subjects.

Finally, we intend to increase the subjects of our investigation. We will get more information on body composition as well as on exact physical activities and make training programs for individuals.

(昭和60年5月21日 受理)

References

- 1) Stefanik, P. A., *et al.*, "Caloric intake in relation to energy output of obese and non-obese adolescent boys," *Am. J. Clin. Nutrition*, 7 : 55-62, 1959.
- 2) Huenemann, R. L., *et al.*, "Adolescent food practices associated with obesity," *Fed. Proc.*, 25 : 4-10, 1966.
- 3) Keys, A., *et al.*, "Coronary heart disease: overweight and obesity as risk factors," *Ann. Int. Med.*, 77 : 15-27, 1972.
- 4) クラウス・ラーブ (広田公一・石川亘訳), 運動不足病, ベースボール・マガジン社, 1977. Pp. 230. (Kraus, H. and Raab, W., *Hypokinetic disease: diseases produced by lack of exercise*, Thomas Co.: Springfield, 1961.)
- 5) Keys, A. *et al.*, "Indices of relative weight and obesity," *J. Chron. Dis.*, 25 : 329-43, 1972.
- 6) 長嶺晋吉「肥満の判定法」*医学のあゆみ*, 101 : 404-09, 1977.

- 7) Boileau, R. A. *et al.*, "Body composition changes in adult men during selected weight training and jogging programs," *The Research Quarterly*, 44 : 158—68, 1963.
- 8) Pollock, M. L., *et al.*, "Body composition of elite class distance runners," *Ann. N. Y. Acad. Sci.*, 301 : 361—70, 1977.
- 9) Behnke, A. R., *et al.*, "The specific gravity of healthy men: body weight $\div$ volume as an index of obesity," *J. A. M. A.*, 118 : 495—98, 1942.
- 10) Pace, N. and Rathbun, E. N., "Studies on body composition III . The body water and chemically combined nitrogen content in relation to fat content," *J. Biol. Chem.*, 158 : 685—91, 1945.
- 11) Behnke, A. R., *et al.*, "Lean body mass: Its clinical significance and estimation from excess fat and total body water determinations," *A. M. A. Arch. Intern. Med.*, 91 : 585—601, 1953.
- 12) Ward, A., *et al.*, "A comparison of body fat determined by underwater weighing and volume displacement," *Am. J. Physiol.*, 234 : E 94—E 96, 1978.
- 13) Kyriakopoulos, V., *et al.*, "The radiological assessment of body fat," *Clin. Radiol.*, 30 : 477—79, 1979.
- 14) Forbes, G. B. and Hursh, J. B., "Age and sex trends in lean body mass calculated from K^{40} measurements: with a note on the theoretical basis for the procedure," *Ann. N. Y. Acad. Sci.*, 110 : 255—63, 1963.
- 15) Lesser, G. T., *et al.*, "Determination of total body fat by absorption of an inert gas: measurements and results in normal human subjects," *J. Clin. Invest.*, 39 : 1791—1806, 1960.
- 16) Pollock, M. L., *et al.*, "Prediction of body density in young and middle-aged men," *J. Appl. Physiol.*, 40 : 300—04, 1976.
- 17) Wilmore, J. H., *et al.*, "Validity of skinfold and girth assessment for predicting alterations in body composition," *J. Appl. Physiol.*, 29 : 313—17, 1970.
- 18) Brožek, J., *et al.*, "Skinfold distributions in middle-aged American men: a contribution to norms of leanness—fatness," *Ann. N. Y. Acad. Sci.*, 110 : 492—502, 1963.
- 19) Durnin, J. V. G. A. and Rahaman, M. M., "The assessment of the amount of fat in the human body from measurements of skinfold thickness," *Br. J. Nutr.*, 21 : 681—89, 1967.
- 20) Lohman, T. G., "Skinfolds and body density and their relation to body fatness: a review," *Human Biol.*, 53 : 181—225, 1981.
- 21) 長嶺晋吉他「スポーツマンと非スポーツマンの体構成 (Body Composition) の比較に関する研究」*栄養学雑誌*, 24 : 3—8, 1965.
- 22) Lewis, S., *et al.*, "Prediction of body composition in habitually active middle-aged

- men," *J. Appl. Physiol.*, 39 : 221-25, 1975.
- 23) Moore, C. E., *et al.*, "The relationship of exercise and diet on high-density lipoprotein cholesterol levels in women," *Metab.*, 32 : 189-96, 1983.
- 24) Pařízková, *et al.*, "Body composition, aerobic capacity, and density of muscle capillaries in young and old men," *J. Appl. Physiol.*, 31 : 323-25, 1971.
- 25) 正木健雄, 子どもの体力, 大月書店, 1979. Pp 214.
- 26) 長嶺晋吉「皮厚の測り方と意義」 臨床医, 2 : 538-40, 1976.
- 27) Brožek, J., *et al.*, "Densitometric analysis of body composition: revision of some quantitative assumptions," *Ann. N. Y. Acad. Sci.*, 110 : 113-40, 1963.
- 28) 長嶺晋吉, 「肥満の判定法」, 鈴木慎次郎・野村茂 (編), 生活と肥満, 医歯薬出版, 1981. pp 50-51.
- 29) 厚生省栄養課編, 国民栄養の現状, 第一出版, 1983. Pp 173.
- 30) 東京都立大学身体適性学研究室編, 日本人の体力標準値, 第3版, 不昧堂出版, 1980. Pp458.
- 31) 池田修他「福岡市とその近郊の中学生及び大学生 (年齢12. 13歳及び18. 19歳) の体組成と有酸素能力の関係」 人類学雑誌, 86 : 363-66, 1978.
- 32) 北川薫他「最大酸素摂取量の規定因子としての除脂肪体重の検討」 体力科学, 23 : 96-100, 1974.
- 33) 今野道勝他「福岡市近郊の成人男女の栄養・運動・身体組成について」 健康科学, 3 : 97-104, 1981.
- 34) 北川薫「成人男女の身体組成とその国際比較」 中京体育学研究, 18 : 51-56, 1977.
- 35) Sandler, H., "Use of bed rest studies to simulate the problems of human existence in a space flight environment," Ames. Res. Center, NASA, USA. (cited by Ikegami: 運動処方, 朝倉書店, 1982. p39)
- 36) Komiya, S., and Kikkawa, K., "Change in body composition of Japanese children and adolescents during the last 16 years," *J. Health Science*, 1 : 15-26, 1979.
- 37) Komiya, S. and Kikkawa, K., "Hand-grip strength and standing long jump of Japanese children of two different cohorts in relation to their body composition," *J. Health Science*, 2 : 49-56, 1980.
- 38) 増田卓二・吉水浩「日常生活における身体活動レベルと最大酸素摂取量 ($\dot{V}O_2\text{max}$) の関係 (ネパール人を対象とした研究調査報告)」 久留米大学論叢, 28 : 61-65, 1979.
- 39) Womersley, J. *et al.*, "Influence of muscular development, obesity, and age on the fat-free mass of adults," *J. Appl. Physiol.*, 41 : 223-29, 1976.

前思春期ヒステリー症例の心理治療過程と 家族画の変化

清 水 信 介

Psychotherapeutic Process of a Preadolescent Hysterical Case and the Change of Kinetic Family Drawings

Nobusuke Shimizu

Abstract

In this paper, the author reports on the psychotherapeutic process of a preadolescent girl with hysterical symptoms who was ten years old. She was suffering from hysterical symptom of inhaling air strongly at intervals of two or three seconds incessantly. Also she had difficulty in ascending stairs or slope. Nonverbal psychotherapeutic approach was applied to her once a week for eight months in conjunction with mother counseling. And she showed an essential advance.

I は じ め に

心理療法における非言語的技法の利用は近年ますます広まりつつあり、種々の技法が開発されている。殊に、自己の内的体験を言葉によって表現することを十分になし得ない児童や思春期のケースの治療においては、遊戯療法、箱庭療法、描画療法などの非言語的接近が大きな力を発揮する。また、精神病圏の症例に対する心理療法(精神療法)的接近においても、注意深い考慮の下に非言語的技法が適用されるならば、それらが有効な治療戦略となることが知られている。

筆者は、最近、児童期、思春期のクライアントと接する機会が増え非言語的接近法を用いることが多くなったが、青年や成人のケースでも言語的交流が困

難な、あるいは言語的表現を苦手とするクライアントなどに対して箱庭、描画、粘土造形などによるイメージ表現を中心とする方法を試みている。それらの経験の一部については、以前に口頭発表の形であるが報告している。⁷⁾⁸⁾

ここに報告するのは、ヒステリー症状を呈する前思春期の少女に行った非言語的技法を主体とする心理療法の記録である。本事例では、箱庭、自由画、相互スクリブル、粘土造形、動的家族画などを治療の流れに応じて適宜用い多面的な方法でクライアントのイメージ表現を促進するという接近がなされている。これは山中(1979)⁹⁾¹⁰⁾が提唱する多次元表現療法の考えに負うたものである。以下では、29回にわたる治療面接の経過を報告し、症状形成の背後にある家族力動、治療関係、治療過程におけるイメージの変遷などについて考察する。

Ⅱ 事 例 概 要

〔クライアント〕 M子 10歳 小学5年生

〔主訴〕 2,3秒間隔で休みなく息を強く吸い込む症状。また、階段や坂を上るのに困難がある。

〔家族構成〕 父親39歳、母親36歳、弟8歳(小3)と本人の4人家族。3年前に父親が地方へ単身赴任し、以来週に一度家族の下へ帰る生活を続けている。父親は温和で生真面目な性格で、職場ではおとなしいがよく働く人という評価を受けている。父親は、子供の頃自分の父親が職業柄(検事)忙しく接触が少なかったためもあって、子煩悩で子供とはよく遊ぶが、子供を叱ることはあまりない。時に「ママ、叱って」とその役割を母親に求めるところもあり、その分母親が怒るということにもなっているという。母親の言によると、M子も弟も父親に対しては怖さがないという。母親は女性的な柔らかさに欠けたギスギスした感じの人である。神経質、心配性であるが、勝気で感情の激しい面も持っている。弟は、身体が大きいが内向的でおとなしい男の子である。

〔生育歴、現症歴〕 満期出産。陣痛開始から出産までに4日位かかり、仮死状態で生まれた。2日間哺育器の中に置かれたが、その後は母乳で育ち特記

すべき問題はなかった。M子が1歳6ヵ月の時に弟が生まれた。弟の誕生後は、父親がM子を母親は弟をというように分担する形になっていった。母親は「お姉ちゃんなんだから」とM子の躰に厳しく、排泄訓練などで失敗すると叩いたりしたので、M子はいつもびくびくしていたという。また、母親は何かにつけ弟の方をたてて育ててきた。

M子は常におとなしく活発さのない子であった。保育所でも自分から友達をつくっていくことが出来ず、保母にも寄っていくことがなかった。弟とのことで嫉妬することはあったが、親に逆らうことはなかった。

小学2年生になる時、父親が地方へ転勤。家族全員で移ったが、病身で独り暮らしの父方祖母の世話、M子が転校先でいじめられ登校を嫌がったこと、母親が田舎の生活に耐えられなかったことなどの事情から、その年の夏休みには母子3人だけM市へ戻ることになった。3年生になる頃から、M子は母親に「Qちゃん(弟)ばかり可愛いんでしょう」と言い、弟に当たったりするようになる。学校の作文にも「母さんは弟だけが可愛い……」と書いたりしていた。

4年生になると、M子の家庭が大きく揺れる出来事が2つ続いた。父親の職場で直属の上司が横領事件を起こし、父親自身は事件に関与していなかったが、事件発覚に関連して彼の生真面目さが上層部の不興を買い左遷されることになった。父親は一時転職を思っ1ヵ月程職場に出ず自宅にいたが、同僚に「ここで辞めたら貴方の負けになる」と説得され配転先に移った。さらに、8月下旬に父方祖母が他界し、その直後から遺産相続をめぐる父親の姉妹との間でもめ、翌年1月頃まで半年位にわたって激しいやりとりが繰り返された。父親の姉は言いたい放題に言い、それに対して勝気な母親はM子らの前で派手に応酬することが何度かあったという。

4年生も終りの2月上旬のある夕方、M子は自宅で過呼吸発作を起こす。以後いくつかの病院を受診したが、過呼吸症候群は最初の1週間位だけで、その後は前述の症状に固定する。3月上旬にM病院小児科に入院。しかし、症状に変化なく、3月末主治医から心理療法の依頼があり、筆者の下へ来談することになった。

〔治療期間〕 5年生の4月上旬から12月上旬までの8ヵ月間、29回の面接を行った。これと併行して、やはり筆者が14回の母親面接を行った。

Ⅲ 治 療 過 程

ここでは、M子との面接を中心に、治療過程を4期に分けて報告する。

第1期 (第1回面接～第5回面接)

これは導入段階からM子の葛藤・問題が表現されるまでの時期である。主治医からの依頼があった数日後に母親のみ来談し、現病歴、生育歴などを聴取した。母親は痩せ型で目の大きな女性で、はきはきと喋るが、神経質で緊張の強い感じの人であった。

〔第1回面接〕 (4月7日)

母親と2人で来談(以後第11回まで同じ)。階下から「ハアーッ、ハアーッ」と喘ぐような声が聞こえ始めたが、面接室がある2階までなかなか上がって来ないので私が迎えに出てみると、M子は2階まであと2段位のところにいた。私が手を貸して面接室へ入る。M子はひっきりなしに「ハアーッ」と強く息を吸い込む。私も切なくなるほどである。症状が始まった頃のことなどを少し聞く。彼女は問いかけに対してはきちんと答えるが、自発的に発言することはなく、私と視線を合わせることもあまりなかった。＜自由画＞に誘うと、画用紙の左半分領域

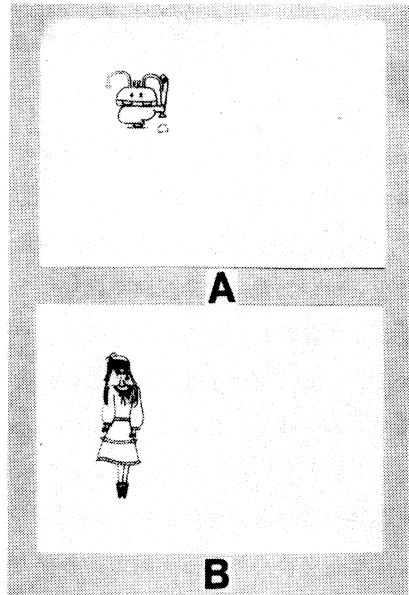


図-1 バイキン君/可愛い人

だけに鉛筆画で小さく「左バッテリーボックスに構えるバイキン君」を描く(図-1 A)。描画から彼女の内向的で引込み思案なあり方が窺われたが、こちら

に向かってバットを構えるバイキン君を見て私は彼女と交流することへの手応えを感じた。この後、M子が砂箱の方を見ているので<箱庭>に誘ってみると、ためらいなくとりかかる。数分で作り、《遊び場》と説明する(図-2)。中央に丸テーブルと2つの椅子。周辺に滑り台、ブランコ、シーソー、家、木などが置かれている。人間も動物もない静的で寂しい感じの作品である。

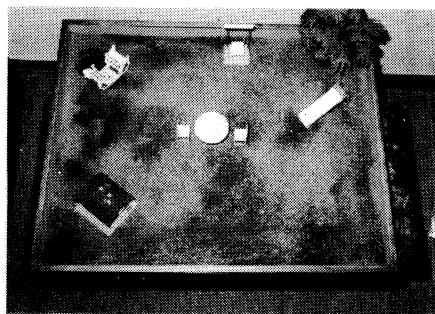


図-2 遊び場

面接の終盤20分ほどは<交互色彩分割法>⁶⁾を試みる。言語的な交流を性急に求めることは控えて、非言語的な次元で2人が交流する経験を持てればと考えてのことである。彼女は比較的自由に空間分割の線を引き、彩色の際に金色、銀色や暖色系の色も用いていた。

〔第2回面接〕 (4月14日)

箱庭に誘うが、M子は微笑して首を横に振る。粘土をやろうということになる。お互いに粘土をこねながら、好きな学科、嫌いな学科のことや、前日ペットショップで手のり文鳥を買って貰ったことなどについて話し合う。<相互粘土>では、M子が「白鳥」、私は「白兎」を作った。

母親の話では、4月8日にM病院を退院し、医師に登校をすすめられたが、身体のだるさがありまだ行かせていない。M子自身は、体育の時間だと級友が運動しているので息を吸う音が目立たないから、体育の時間だけ行きたいと言っているという。

〔第3回面接〕 (4月21日)

階段を上がって来る時から息の吸い方がこれまでより幾分軽くなっている感じを受ける。今週は登校して2時間位つとめて帰って来た。

<自由画>では、やはり用紙の左半分の領域に鉛筆画でM子と同年の「可愛

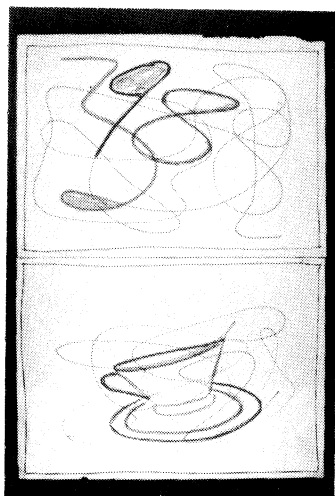


図-3 る・9・8 / ティーカップ

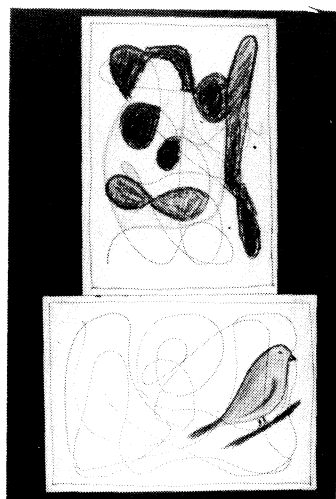


図-4 怒鳴っている女の人 / 鶯
る。

い人」を描く(図-1B)。この回、＜相互スクリブル＞を導入し、枠あり(以下、枠⊕と表示)で2回試みる。その手続は、まず私が用紙に枠づけし、なぐり描きをする。そして、描線へのイメージの投影の仕方を例示する。その後、彼女が私の枠づけした紙になぐり描きし、私も彼女が枠づけした紙になぐり描きをする。それらを交換して互いにイメージを投影し、彩色して仕上げるのである。

1回目のスクリブルでは、M子は「る・9・8」の文字を投影。それは描線をなぞっただけのようなもので、彼女の自由さの少ないあり方を反映しているように思われた。私の方は、彼女の受け皿になろうという気持ちで「ティーカップ」を投影した(図-3)。すると、2回目は、彼女が「怒鳴っている女の人」を表現する。私は「鶯」であった(図-4)。怒鳴っている女性は彼女の母親イメージではないかと考えた。

〔第4回面接〕 (4月28日)

今週は全部の授業に出ているという。＜箱庭＞を作り、《動物がいる》と説明する(図-5)。中央に丸テーブルとロッキングチェアが置かれ、下辺中央に一軒の家がある。駝鳥、チンパンジー、犬、鶏が登場す

＜スクリブル＞(枠⊕, 2回)では、1回目、M子は「喧嘩して大声で話してい

る35歳位の女の人」，私が「白鳥」であった。その女性はM子の母親の顔によく似ていた。喧嘩して大声で話しているということから，私は母親と伯母の口論のことを連想する。2回目は，彼女が「学校でお話している12歳位の少女」，私は「寝呆け顔で歩いている犬」を投影した(図-6)。

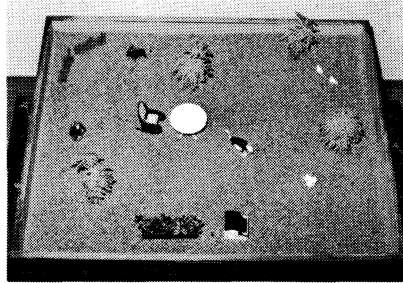


図-5 動物がいる

母親の報告では，M子は来談を楽しみにしており，症状も軽くなってきたという。

〔第5回面接〕 (5月4日)

＜箱庭＞は「庭の広い家」。砂箱全体が右上隅にある家の庭という構成である。中央に丸テーブルと2つの椅子。左下にブランコ，シーソーが置かれ，白い犬が1匹いる。初回に左下隅にあった家が今回は最も現実的な領域である右上隅に移っているのが注目された。

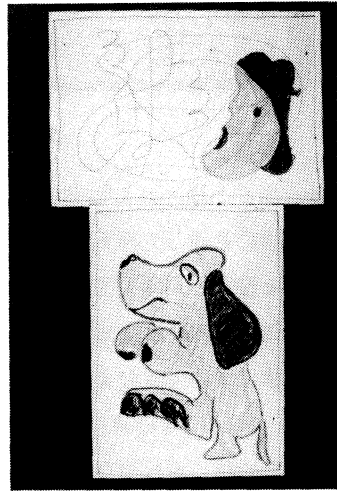
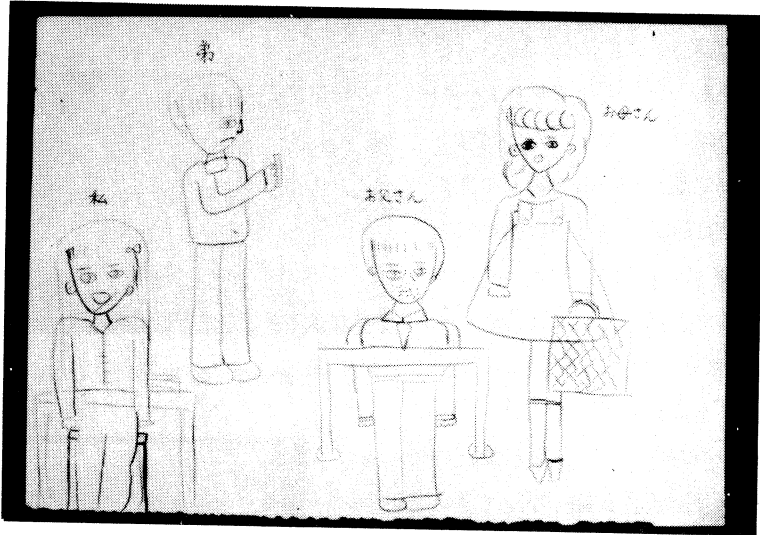


図-6 お話している12才位の少女／
寝呆け顔で歩いている犬

＜スクリブル＞(枠⊕, 2回)では，1回目M子は「のろまな子鼠」，私は「パンダ」。

2回目は，彼女が「朝起きてあくびしている小学4年の女の子」を投影し，私は「天狗」であった。

この回，＜動的家族画>²⁾を導入すると，弟，父親，母親，自分の順で描く(図-7)。彼女の説明によると，《弟は教室で問題を当てられて困った顔をしている。お父さんは会社で名前呼ばれて緊張して立っている。お母さんはお使いに行くところ。私は学校でお喋りしている》のだという。その家族画は多くの興味深い特徴を含んでいたが，中でも家族内での父親とM子の位置が低い



図一 7 動的家族画(1)

こと、黒々と描かれた母親の眼、それとは対照的に父親とM子の瞳がないこと、父娘に共通して押えつけるかのように机が描かれていること、M子の左口元に走る線などが印象的であった。絵はM子が認知している家族状況や症状形成の背後にある葛藤を雄弁に語っているように思われた。この時点で、私は彼女の症状について次のような仮説を立てた。すなわち、息を強く吸い込む症状は、第一義的には母親に向かおうとする攻撃性を呑み込もうとするものであり、また同時に退行的な様式で甘え願望を満そうとするものでもあるのではないかと考えた。

第2期 (第6回面接～第14回面接)

この時期に入ると、治療の退行が徐々に起こり、M子は少しずつ母親に甘えを表現するようになり、さらに父母に対して攻撃性を向け反抗するようになっていく。

〔第6回面接〕 (5月12日)

<箱庭>を作り、《動物がいて、遊ぶものがあるって楽しそう》と説明する(図-8)。駱駝が登場し、これまでの動物よりも少し大きなものになってい

る。

＜スクリブル＞（枠⊕）でM子は「笑っている5歳位の女兒」を投影し、私は「ミッキーマウス」であった（図-9）。人物像の年齢が低下し、退行の兆しが窺える。

母親面接での報告によると、M子は母と2人で面接に来ることを喜んでおり、弟がついて来るのを好まない。来談の道すがら母親がM子と手をつなごうとすると、彼女は照れるが喜ぶという。この頃、彼女は母親が買物に行くのにもついて行きたがったり、夜弟が寝た後も母親と起きていて一緒に何かをしたい素振りをみせるようになる。

〔第7回面接〕（5月19日）

＜箱庭＞は、＜教会。退屈したら遊べるようになっている＞と説明する（図-10）。右上隅にアーチ型の門、左下寄りに教会。庭にはシーソーなどの遊具がある。前回の箱庭において左側領域にあった滑り台、丸テーブル、ロッキングチェアが右側へ反転している点が注目された。

＜自由画＞では、「起きたばかりの雌兎」を描く（図-11A）。やはり左半分の領域に描かれているが、今回はピンク、赤、黄色のクレヨンで描かれている。

この後、＜スクリブル＞を枠ありで2回行う。1回目、M子は「仔犬」、私

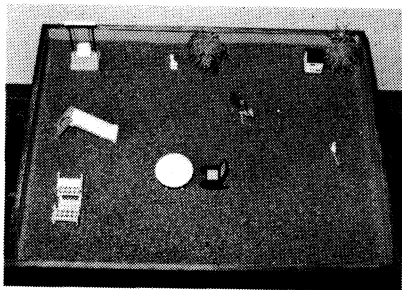


図-8 動物、遊具

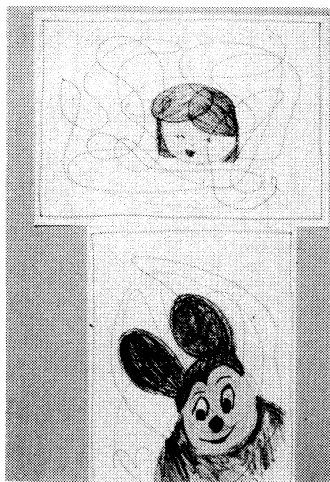


図-9 5才の女兒／ミッキーマウス

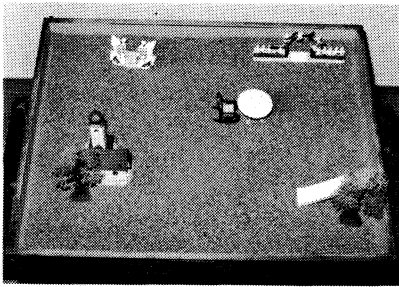


図-10 教会

にいと、ケラケラ笑い、「私の犬も鼠みたい」と言って笑う。

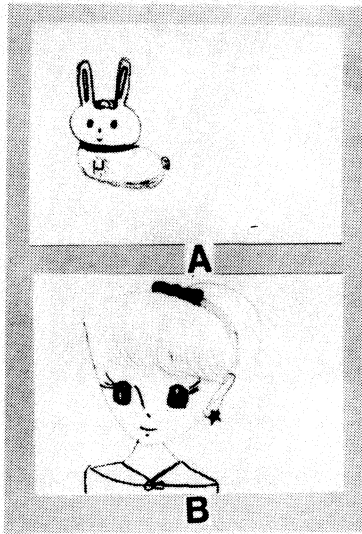


図-11 起きたばかりの雌兎/
可愛い優しい人

になった。気づかずして階段を上れていて、友達にそのことを指摘され自分でもびっくりしたと語る。

<自由画>は「18歳位の可愛い優しい人」(図-11B)。赤，黄，橙，黒色な

は少女漫画の主人公「キャンディ」。2回目は、彼女が「飴の容器(袋)になった人形」，私は「話をしているペンギンと鳩」を投影した。スクリブルの際，M子は打ちとけた態度を示す。少女キャンディの眼の表現に苦心する私に，M子は少女漫画風の眼の描き方を教えてくれる。私がうまく描けず

面接の終り近くに，私が「M子ちゃんの方で何か聞きたいこととか話したいことはないかな」と水を向けると，初めて彼女の方から通学仲間N子とのもめごとについて語る。N子は独占的な子で，以前からM子に自分以外の人間と一緒に帰るなど言っていた。ところが，一週間位前にM子は級友のU子と一緒に帰ってしまった。N子はU子と仲良くしたことを怒り，千回謝らないと許さないとと言って責めたてるとい

〔第8回面接〕 (5月28日)

これまで階段を上るのが大変だったが，一昨日辺りから普通に上れるよう

どのクレヨンを用いて初めて画用紙のほぼ中央に人物を描く。

＜箱庭＞では「商店街、住宅地と公園」を作る。これまでの作品では家や教会の庭という構成であったが、今回初めて町並みとなり空間的広がりが出て来る。

母親はN子が執拗にM子を非難してくることを心配して、どうしたものかと治療者に電話してくる。しかし、今回M子話を聞くと、「私ばかり悪くないし、Nちゃんが勝手に怒っているんだから謝らない。Nちゃん、私謝らないよ。」と返事を書く」と自分の気持ちをしっかりと述べる。治療者は彼女の意向を尊重し、もうしばらく見守ることにしようと母親にも伝える。

〔第9回面接〕（6月2日）

階段を駆け上がって来る。3日前から息を吸い込む症状が失くなったという。終始笑顔である。N子に対しても「1回謝って許してくれるなら謝ってもいいけど、私はNちゃん以外の人とも帰るよ」と自分の気持をはっきり伝えた由。＜箱庭＞は「牛を飼っている家と馬を飼っている家」で、初めて人間(男性)が2人登場し、養い育てるという母性性を象徴するテーマが示される。

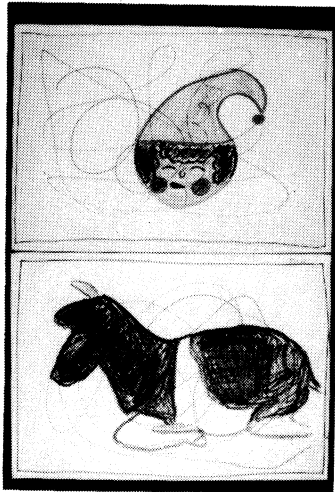


図-12 元気者の小人 / 牡牛

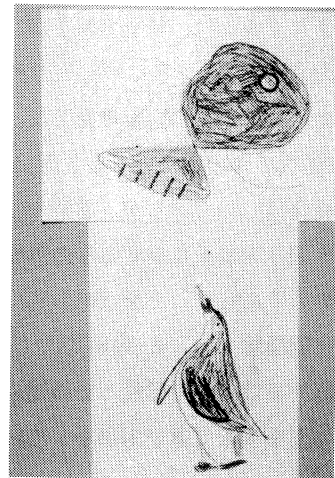


図-13 鯛焼き / 餌を食べるペンギン

<スクリブル>では、枠⊕(内面志向的)⁵⁾で、M子が「笑っている元気者の小人」、私は「牡牛」であった(図-12)。枠なし(枠⊖)で試みると、彼女は「鯛焼き」で、私が「餌を食べているペンギン」であった(図-13)。小人は彼女の内界に生じてきた新しい動きを示すものであろうか。他方、外面的、外界志向的(枠⊖)⁵⁾には口愛的テーマ、甘え欲求の表現がみられ、私もそれに応えるようなイメージ表現をしている。

母親は、M子が1週間位前から朝早く独りで起きてマラソンを始めたこと、彼女が最近自分の意見をはっきり言うようになってきたことなどを報告する。また、症状がなくなったので工大へ行けなくなるのではないかとM子が心配しているという。治療者はもう少し通った方がよい旨伝える。

〔第10回面接〕 (6月9日)

<箱庭>では「田舎の駅」を作る(図-14)。右上隅の駅では人が汽車に乗ろうとしている。汽車はこれから駅を出発して左上隅にあるトンネルの中に入っていく。箱庭作品から、今後さらに治療的退行が進展し、無意識の深みへの下降、内面の探求がなされることが予想された。

<スクリブル>は、枠⊕でM子が「怒っているお爺さん鼠」、私はゆっくり進んでいこうとの気持ちから「亀」を投影した。枠⊖では、彼女は「海の底にいる魚2匹」を表現する。私は「牡羊」であるが、前回の牡牛と共にこの辺りのM子に対する私の態度が父親的なものであったことを反映している。

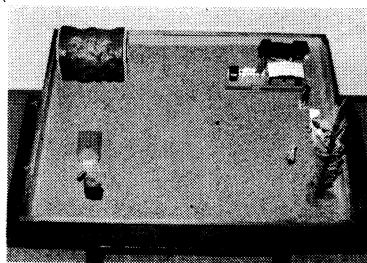


図-14 田舎の駅

〔第11回面接〕 (6月16日)

<箱庭>では「私の学校とその周辺」という作品を作る。校庭では人が1人バケツに土を入れて運び工事をしている。彼女の内面で工事が始まったようである。

<スクリブル>は、枠⊕でM子が「台の上でボールを操るイルカ」、私は「修

道尼」(図-15)。枠⊖では、彼女が「素敵な水鳥」で、私は治療のステップを一段上がる感を持っていたので「小さい滝を上る魚」を投影した(図-15)。



図-15 ボールを操るイルカ / 修道尼

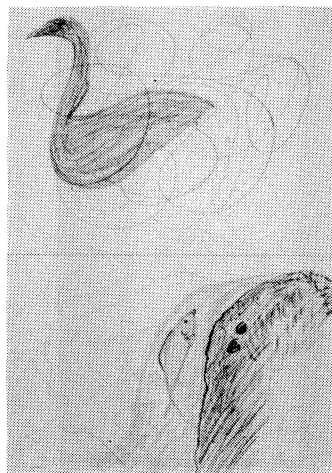


図-16 素敵な水鳥 / 滝を上る魚

〔第12回面接〕 (6月23日)

休暇で帰宅中の父親と2人で来談。＜箱庭＞で「5歳の女の子の部屋」を作る。部屋にはピアノ、机、ベッドがあり、テーブルの側に女の子が一人坐わっている。

久しぶりに試みた＜粘土＞では、彼女は人間と兎のご飯だと言って「目玉焼きと人参」を作る。私は「植木鉢に双葉の芽を出した植物」を作った。

〔第13回面接〕 (7月7日)

母親と来談。＜箱庭＞は「小人の家に遊びに来た子供たち」(図-17)。M子の説明によると、≪5人の小人の家に子供たちが遊びに来て、小人が吹く笛に合わせて踊ったり遊んだりしている。ベッドには赤ん坊が寝ている≫とのことである。今回の作品では初めてブランコ、シーソー、滑り台に人が乗っている。

<スクリブル> (枠④, 2回)では, 1回目M子は「3歳位の外人の女の子」, 私は「歌っている河馬の坊や」であった(図-18)。2回目は, 彼女が「ジュース」を, 私は「体操している男子中学生」を投影した(図-19)。前回, 今回と

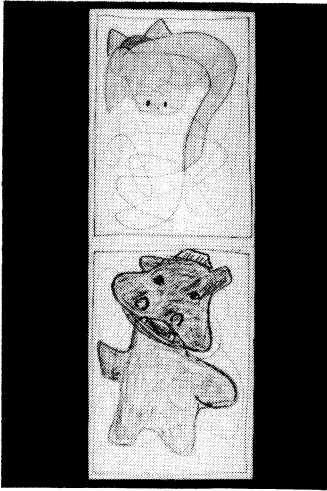


図-18 3才位の女の子 / 河馬の坊や

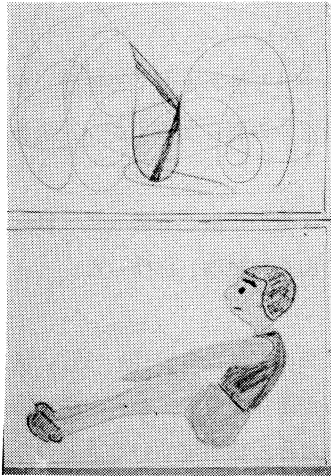


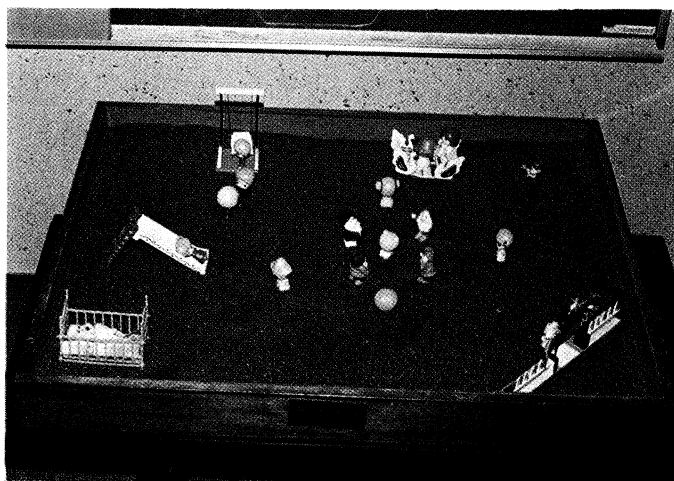
図-19 ジュース /
体操している男子中学生

イメージ表現において年令退行と口愛的テーマが出現し, 甘え欲求の高まりが窺える。

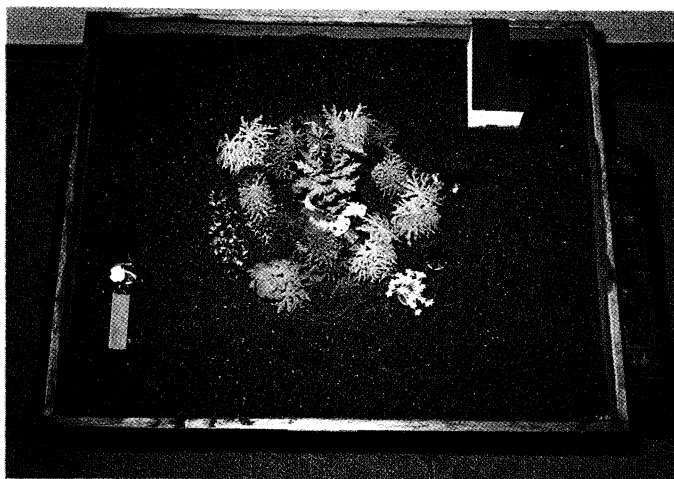
そうしたイメージ表現からみて家庭でのM子の行動が変化している可能性が考えられ, それによる親の戸惑いも予想されたので, 第13回面接の数日後の母親面接において家でのM子の様子について聞いてみる。すると, きょうだい喧嘩がすごいという。ちょっとぶつかったという位のことでも弟を叩いたりする。父母が注意すると反抗してくる。母親の言うことがすぐに癪にさわるという感じである。他面, 母親が買物に出ようとするときすぐついて来て, 置いて行くとすぐふくれるという。母親は強まってくるM子の甘えと反抗に戸惑いを強く示す。そこで, この辺りから第20回面接頃までは親面接の頻度を週1回に増やし, 父母の受けとめがスムーズに行くようにサポートすることに努めた。

〔第14回面接〕 (7月14日)

母親と2人で来談。<箱庭>は「木の根元に横たわる5人の子供」(図-20)。最初に砂箱の中央にポプラの木を1本置いて作り始める。《学校の裏山で, 5人の子が木



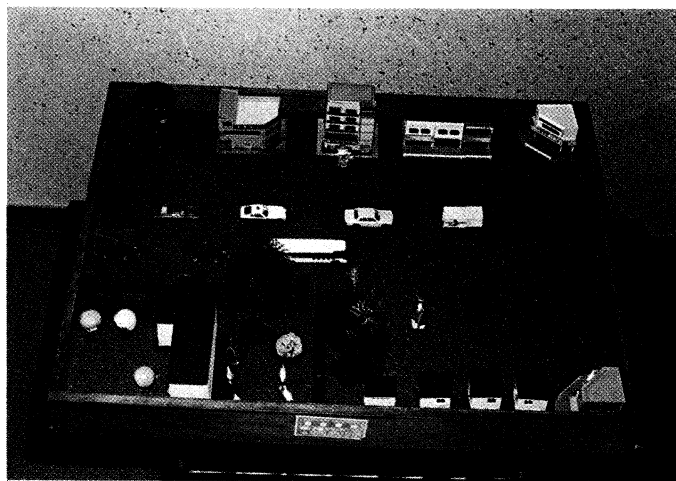
図一17 小人の家に遊びに来た子供たち



図一20 木の根元に横たわる5人の子供



図一21 王子様とお姫様の結婚



図一23 町

の根元に頭を寄せて横になり休んでいる。ベンチ(左下)には散歩に来た女の子が坐っている」との説明である。

箱庭の後、M子の方からきょうだい喧嘩のことを語る。弟の方が悪いのにすぐ泣く。そのため自分が母親に叱られることがある。私は年下の弟に負けるのが悔しいと言う。

<スクリブル>は、枠⊕で、M子が「あくびしている鼠」、私は「ベティさん」。枠⊖では、彼女は「子供の試験の成績が悪かったので怒っているお母さん」を投影する。外界志向的な表現では否定的母親像が示される。しかも、第3回、4回の「怒鳴っている女の人」、「人と喧嘩して大声で話している女の人」に比べると、今回のそれは子供を怒るお母さんというようにより直接的である。私が投影したのは漫画ジャングル大帝の主人公「レオ」であった。

母親の報告によると、M子の弟に対する攻撃と父母(特に母親)への反抗はさらに強まり、母親が弟ばかり依怙贖罪するといって頻繁に抗議する。母親に対して絶対に譲らず、余所の人がいる前でも泣いて母親に向かって行ったりする。父母も弟もM子の行動の変化に大いに困惑した時期であった。

第3期 (第15回面接～第22回面接)

この時期には、第2期から進展して来た新たな統合へ向かう動きがピークに達し、M子の内面において母親との和解が生じ、超自我の緩和、改変が行われて、人格がより高次の統合性を持つものへと変容を遂げる。

〔第15回面接〕 (7月21日)

母親と来談。<箱庭>では、「王子様とお姫様の結婚」という作品を作る(図一21)。右側の城の王子様と左側の城のお姫様が結婚し、(神父の人影がなかった)ので修道尼が祝福している。2つの世界の統合のテーマを含むマンダラ表現である。

<スクリブル>では、M子は「焼餅焼いて大きい口開けて怒っている女の子」を表現する。まさに彼女が母親、弟との関係において抱いてきた怒りが直接表現された感じである。しかも、女の子の年齢はM子の現実の年齢のところへ戻っている。私は前回のファリクなイメージを受けて「草を食べている子

犀」を投影した(図-22)。

M子の変貌ぶりに父親が困惑していると母親から聞いていたので、第15回面接の3日後に父親と面接する。父親は「症状が失くなって喜んでいますが、弟と喧嘩する時にきかなくて……。それだけは先生に治してもらいたいと思って。M子には女の子らしく育ててほしい」と語る。治療者はM子の現在の状態の意味と今後の見通しについて説明し、父親も一応納得する。

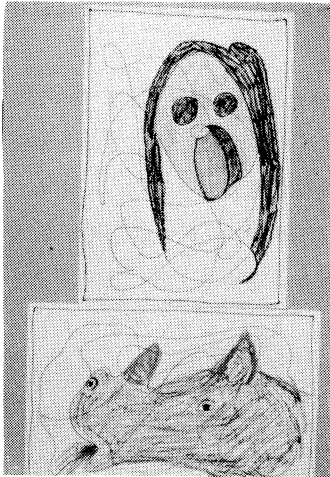


図-22 焼餅焼いて怒っている女の子/
草を食べている子犀

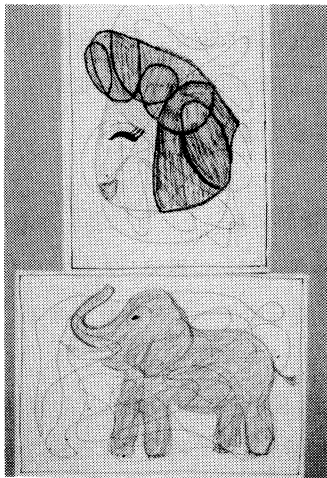


図-24 笑っているお母さん/
歩いている象

〔第16回面接〕 (7月28日)

母親、弟と3人で来談し、復路はM子独りで帰る。＜箱庭＞は「町」(図-23)。町並みで、ダンプカー、バスなど車はすべて右方向へ走っている。第14回に右上隅にあり、今回左下隅に反転した学校では、鶏、家鴨などを飼っている。現実的な状況となり、大きなエネルギーが無意識から意識の方向に動き出すが、この動きから区分されるかのように学校領域が柵で囲まれている。

＜スクリブル＞(枠⊕, 2回)では、1回目M子は「笑っているお母さん」を投影し、初めて肯定的母親像が示される。私は箱庭作品からの連想で「鼻を上げて歩いている象」(図-24)。しかし、2回目には、彼女が「ヒヨコ」で自己の柔弱な面をも表現する。私は「ハンバーガー」であった。

〔第17回面接〕 (8月4日)

母子3人で来談。2,3日前家族でP海岸へキャンプに行き楽しかったと語る。＜箱庭＞は「昔」。左上と右上に藁葺屋根の家があり、どちらも馬と鶏を飼っている。下辺に沿って人が馬に乗り往来している。前回の箱庭の学校領域にひき続いて養育のテーマも含まれている。

＜スクリブル＞で、M子は自分と同年の「優しい外人の少女」を投影する。優しい少女というあり方が自分から遠くなりつつあるということであろうか。私の方は「スペースシャトル」であった。

外的行動では、この頃から弟や父母に対する攻撃、反抗が大分和らいでくる。

〔第18回面接〕 （8月18日）

母親に用事が出来たため往路はM子独りで来る。日焼けして元気そうである。＜箱庭＞は「保健管理センター」。面接室が所在する保健管理センターの周りを第16回の箱庭で用いた柵で囲んでいる。センターの脇の道を2台の車が左方向に走っている。

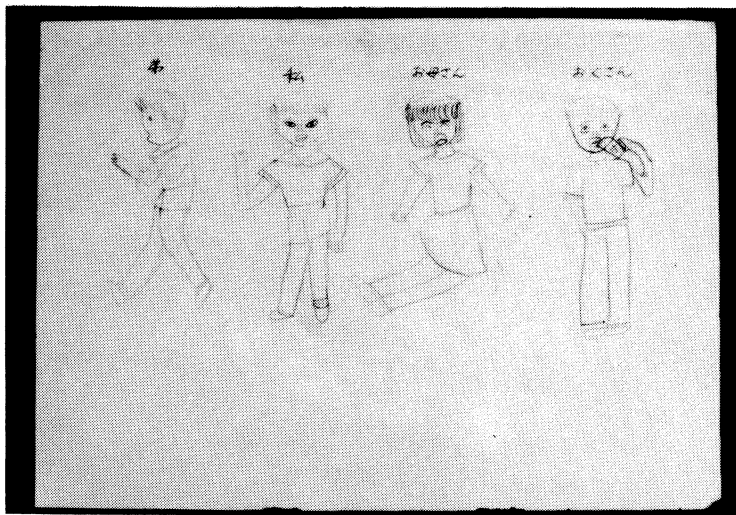


図-25 動的家族画(2)

この回＜動的家族画＞を指示すると、家族4人を同じ水準に並べ、弟、自

分、母親、父親の順で描く(図-25)。《弟は駆けっこして走っている。私は弟と喧嘩して弟を叩こうとしている。お母さんは坐わって笑っている。お父さんはビールを飲んでいる》と説明する。笑っている母親がM子の近くに描かれたのが印象的である。M子は目を光らせて弟にこぶしを上げており、弟はそれから逃げるかのように走っている。

この頃、母親は夫も単身生活では可哀想であると感じ始め、やはり家族が揃って生活すべきではないかと考えている。母親がそのことを子供たちに話すと、M子は「転校したくない気持もあるけど、お父さんが可哀想だから行こう」と言う。彼女は「もしも学校変わったら人間変わってみよう。今までは人からいじめられたけど、今度は人をいじめるような子になってみたい。でも……私には出来ないな」とも語ったという。

〔第19回面接〕 (8月25日)

M子独りで来談。「今日は独りで来たかった。お母さんがついてくるのが嫌ではないが、自分で来たかった」と語る。

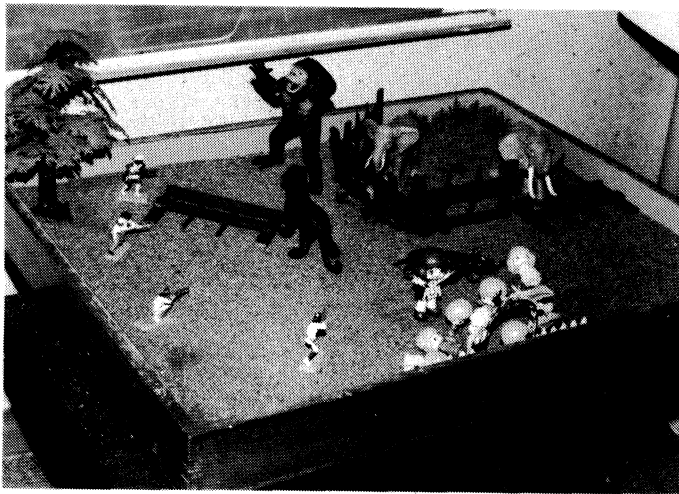


図-26 柵が毀れて逃げだした動物たち

＜箱庭＞は「柵が毀れて逃げ出した動物たち」(図-26)。M子の説明による

と、《管理人がいない小さい動物園で、古いので柵が緩んでいたが、男の子が悪戯して柵を倒した。そこへ象も寄って来て柵を倒した。動物(ゴリラ, 黒豹, 犀など)が逃げ出して、幼稚園の先生と子供が逃げようとしている。この女の子は犀に突かれて倒れたが、死んではない。犀は鉄砲で撃たれて死んだ》とのことである。第16回, 18回の箱庭作品で用いられた柵と同じものが使われるが、今回は柵が打ち毀されるのが中心テーマである。

<スクリブル>では、彼女が「体操している小学6年の女の子」を表現し、私は「岩の上にとまっている鷹」であった(図-27)。

〔第20回面接〕 (9月1日)

母子3人で来談。<箱庭>は「家の中。4つの部屋」。左下が女の子の部屋で、左上に男の子の部屋があり、後者の方が少し大きいとのことである。右上に茶の間、右下は台所。



図-28 昔と今

天国で、動物などの人形の中に人が入ってお祭りのパレードをしている。左は

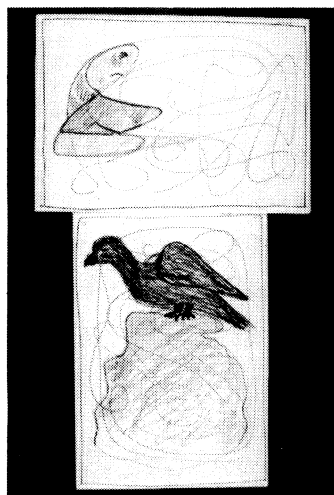


図-27 体操している少女 / 岩にとまる鷹

〔第21回面接〕 (9月8日)

母親と2人で来談(以後最終回まで同じ)。<箱庭>は「昔と今」(図-28)。右辺から $\frac{2}{3}$ の領域が「今」、左辺側 $\frac{1}{3}$ が「昔」で、その2つが柵などで区分されることなく1つの枠の中に納められ統合された感じである。彼女の説明によると、《右の町は、今歩行者

昔で、働いてのんびりしている」とのことである。

この後、＜粘土＞を試みる。M子は、「天然記念物の植物」を作り、《これが種で、ここは芽が出て、これは白い花が咲いた》と3つの段階の説明をする。彼女の内面で何かとても大切なものが芽ばえ花開いてきたようである。私は「ボートを漕ぐ少年」を作る。

面接の終りに迎えに来た母親が入室すると、M子は母親が坐わったすぐ側に移動し、身体を寄せるようにして坐わる。嬉しそうな顔をしている。そういうM子に母親がにこにこ笑顔を向けているのが印象的であった。

〔第22回面接〕（9月15日）

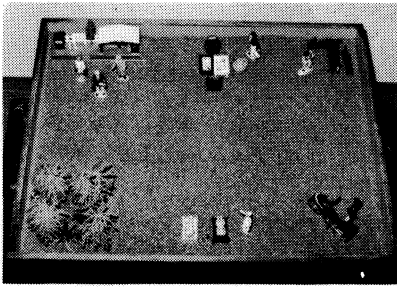


図-29 6つの場面

＜箱庭＞は、右上隅から始め、右下隅、左上隅、左下隅、下辺中央、上辺中央の6領域に、その順で「6つの場面」を作る(図-29)。それらは、①牧場。馬を飼い、男がスコップで作業している。②男がバイクに乗ろうとしている。③人が駅から下りてくる。

④男が森を探検している。森の中にはサソリや蜘蛛がいる。⑤病院で赤ん坊が生まれた。側に看護婦がいる。⑥レストランでウェイターがいる》である。これまでの治療過程での体験をおさらいした作品のようにも思われる。

＜スクリブル＞では、枠⊕でM子が「膨らんで人の顔みたいになった餅」、私は「侍大将」であった(図-30)。枠⊖では、彼女は「きれいな変わった鳥」を表現する。赤、黄、緑、青色で美しく彩色されたその鳥は、まだ子供だが人間の言葉を話せる悪戯者だという。私は「昼寝している河馬のお父さん」であった(図-31)。

数日後の母親面接で、私は母親の顔が柔和になったという印象を受ける。先日M子がテレビドラマを見ていて「優しいお母さんだ。こんなお母さんだと良い」と言ったので、母親が冗談めかして「ママは怖い？優しい？」と尋ねてみ

た。M子は「すごく優しい時もあるけど、怖かった」と答え、「今もやっぱり何だか遠慮する」とも言ったという。また、M子は母親が熱を出した時水枕を作って看病し、涙を流しながら「お母さん頼りにしているのだから」と言ったとも語る。

また、このところM子は非常に楽しがって学校に行っており、母親は彼女がどうしてこんなに学校が好きになったのかとさえ思うという。

第4期 (第23回面接～第29回面接)

終結までの時期である。この時期M子は家族の中で新しい関係を得て安定し、学校生活においても積極的となる。また、内面的には終結に向けての準備をも示しながら終結を迎える。

〔第23回面接〕 (9月22日)

今回は箱庭には向かわず、その日にあった体育祭のことなどについて語る。その後、＜スクリブル＞をする。枠⊕で、M子は「笑っている男の絵描き」を投影し、私は「白い若駒」であった。枠⊖では、M子が「草の葉から雫が水溜りへ落ちるのを面白がって見ている男の子」、私は「はねている子羊」を表現した。

〔第24回面接〕 (9月29日)

＜箱庭＞は「お菓子を食べた後遊んでいる姉、弟、妹の3人きょうだい」(図-32)。姉(7歳)は右上のトンネルから出て来て走り去って行く汽車を見てい

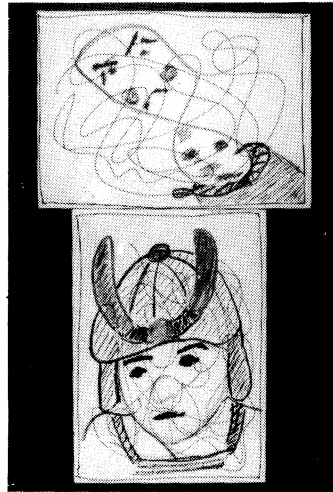


図-30 膨らんだ餅 / 侍大将

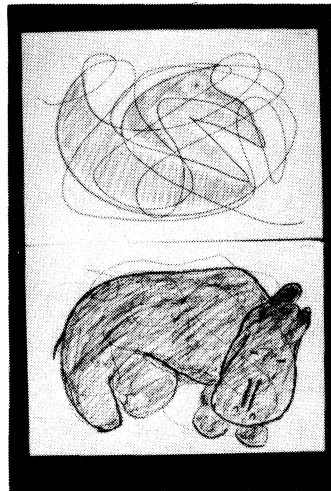


図-31 きれいな変わった鳥 / 昼寝している河馬のお父さん

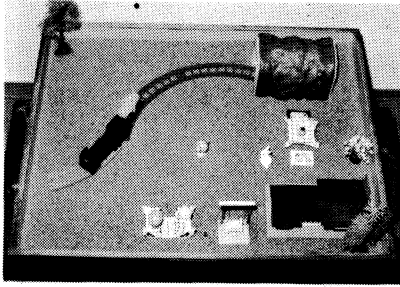


図-32 遊んでいる3人のきょうだい

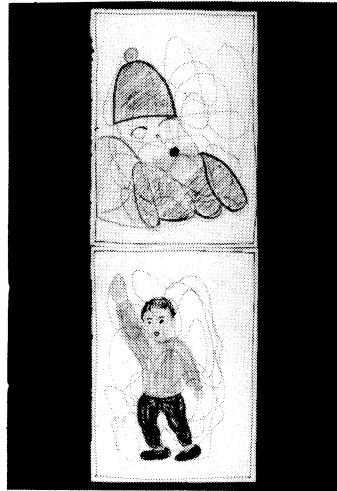


図-33 サンタクロース / 男の子

る。人物の年齢が再びM子の現実の年齢よりも下がっている点が注目された。

<スクリブル>は、枠④でM子が「サンタクロース」で、私が「オーイ、と手を振ってやってくる男の子」であった(図-33)。枠③では、彼女が「飴をなめている蟻の男の子」、私が「水面に浮かんでのんびりしているネッシー」であった。

面接の終りに、私は面接の間隔をあけることを話題にし、彼女の考えを聞く。M子は「どっちでもいい」と言うが、今ひとつはっきりしない感じなので、次回にどうするか決めることにする。

母親の報告では、この頃M子は弟に嫉妬しなくなり、きょうだい喧嘩も少なくなっていてきたという。

【第25回面接】 (10月6日)

<箱庭>は「牛を飼う家の女の子」。5歳位の女の子が本を読みながら搾りたての牛乳を飲んでいる。側にその子の祖母(母方)がいる。この作品でも、女の子の年齢が低く、食物摂取のテーマが示されている。

＜動的家族画＞を描き、《私は学校で鬼ごっこして友達つかまえている。お父さんは一緒に遊んでくれていて笑っている。弟は寝ている。お母さんは食器洗ってしまうところ》と説明する(図-34B)。現実行動と対応して、家族画の中のM子は学校で友達と元気に遊んでいる。弟が寝ているのは、もはや弟の存在が気にならなくなっているということであろうか。

＜スクリブル＞(枠⊕)では、M子が「女の子の蒲団の上に置かれた熊のぬいぐるみ」を投影し、私は「ポパイ」であった。

この回にM子の了承を得たので、次回から2週に1回のペースで面接することにする。

〔第26回面接〕 (10月20日)

学校で遊んでいるうちに面接に来る日だということを忘れていたということ。で15分ほど遅刻。2週間間隔があいたが調子は変わらないと語る。＜スクリブル＞では、M子が「餌に逃げられてしょんぼりしている蛇の子」を投影する。私は「お祭りで花で飾った牛」であった(図-35)。

久しぶりに試みた＜自由画＞では、自分が飼っている文鳥の四態《水浴びしている：立っている：坐っている：手に乗っている》を描く(図-34A)。この自由画は、治療の初期のものに比べると彼女のあり方がはるかに自由度を増していることを示唆している。

母親の話では、M子は以前とは別人のように生き生きとして学校へ行っているという。夕方まで学校におり友達と騒ぎながら帰ってくる。不良ばい言葉を使ったりして気になる面もあるが、それでいいのかなとも思う。今までになかったことなので母親としては嬉しいと語る。M子は「お父さんが転職したら、今度こそ皆で一緒に住もう。私はどこの学校でもきかなくやっていける」と言

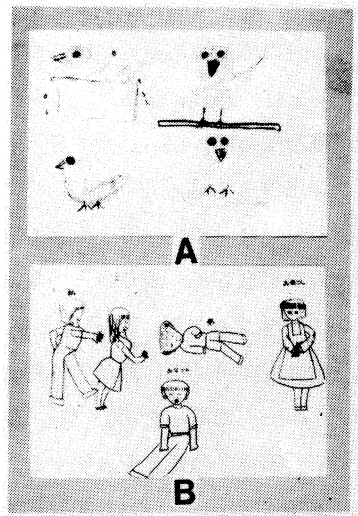


図-34 文鳥の四態／動的家族画(3)

っているという。また、最近M子は体つきが変わり胸も膨らんできて、考え方も大人ぽくなってきたという。父親は、M子が昔のように自分にべたべたしなくなったので、寂しがっている由。母親は「今度のM子のことで大きい勉強をした」と感慨深げに語る。

〔第27回面接〕 (11月6日)

ドンドンと力強くドアをノックして入室し、元気そうである。＜箱庭＞は「町のお祭り」(図-36)。教会の庭の真中に町の人がお金を出し合って沢山の食べ物を用意され、周りに人が集っている。

＜スクリブル＞で、M子は「空を飛ぶ鷹」を地上から見上げた姿で表現する。私は彼女が見事に飛び立ったと思い感動した。私が投影したのはコリー犬「ラッシー」であった(図-37)。終結のことを話題にすると、彼女は「あと2日来て」と自分の意志を表明する。

〔第28回面接〕 (11月20日)

この回＜動的家族画＞に誘うと、自分、母、弟、父の順で描く(図-38)。《家族でトランプしている。弟に変な札が出たので、他の皆が笑っている》との説明である。言わば家族マンドラのようなその絵は、彼女が家族の中で安定した位置を獲得し家族の関係も変化したことを端的に示している。

面接の終りに、M子は治療者に手紙とプレゼントをくれる。手紙には、治療者との交流で嬉しかった経験がいくつか記されており、《なんだか、ここに来てからうれしいことばかりでした。こんなにうれしかったことはありませんでした。でも、あと1日で終わってしまうのは、今までで一番かなしいです》と謝意と別れの悲しみが述べられていた。手紙の中では、なぜか治療者の名前から水の子がすべて落ちていて「清先生」になっていた。可愛いリボンがついた箱の中には大き目の＜ティーカップ＞が1個入っていた。

〔第29回面接〕 (12月8日)

最終回。髪を短くカットしている。真新しいセーターの胸には、髪に赤いリボンをつけ目を伏せた少女が大きく描かれている。私には、その少女がお澄ましをしているようにも寂しそうであるようにも見えた。退室時、M子は二度、

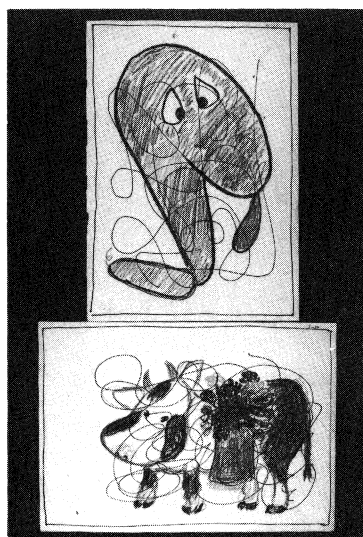


図-35 餌に逃げられてしょんぼりしている蛇の子 /
お祭りで花で飾った牛

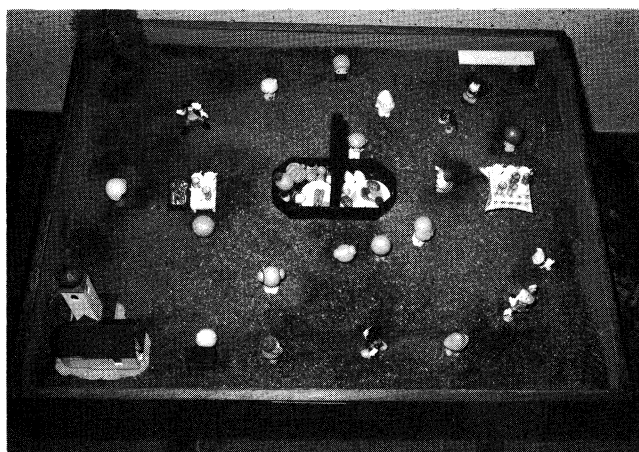


図-36 町のお祭り

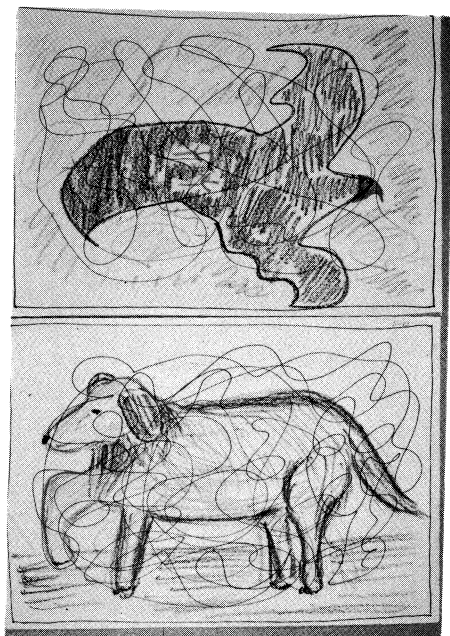


図-37 空を飛ぶ鷹 / ラッシー

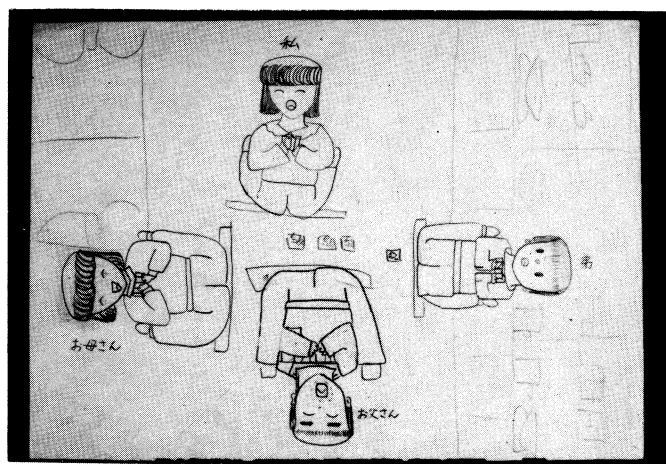


図-38 動的家族画(4)

三度と礼を言って去って行った。

その後母親から連絡があり、翌年春から家族全員が一緒に生活することになった旨報告があった。

Ⅳ 考 察

1. 家族力動と症状の意味

本事例では、家族関係を検討する資料として、父母から聴取した家族歴、生活歴のほかにクライアントが描いた動的家族画(Burns ら 1971)²⁾の情報を利用出来る。動的家族画は、クライアントが知覚している家族の人間関係、各成員の特徴、本人の家族への態度などを知る手がかりを与えてくれるものである。

以下では、家族画の分析を中心にして症状形成の背後にある家族力動と症状の意味について考察する。

第5回面接でM子が描いた動的家族画は多くのことを象徴的に物語っている。絵を見てまず感じられるのは、家族成員それぞれが困惑や緊張感を漂わせていることである。その中で、父親が会社で名前を呼ばれて緊張して立っている姿は、職場の上司の不正行為発覚に端を発して父親を襲った苦境を反映しているのであろう。

絵の中の家族成員の相対的な高さ(位置)に着目すると、母親と弟が上位に描かれ、父親とM子はそれよりも下位にある。これはそのまま家庭内での順位(pecking order)を示していると考えられる。また、母親と弟には瞳があるが、M子と父親には瞳が欠如している。しかも、母親の瞳は黒々と描かれている。家庭内での父親の位置は低く、まさに母親が「目」を光らせている。印象であり、母親主導的な家庭状況が窺える。なお、父親とM子のところには彼らを押えつけるものであるかのように机が描かれているが、これは両者共に超自我による規制枠の強いことを示唆している。父親に同一化して育ったM子は父親の超自我の強さ——左遷事件からもその一端が窺えよう——を受けついでいるのであろう。

また、家族画におけるM子と母親の距離は一番遠く、母親との間で心理的な距離があることも示されている。母親はM子の嫉に厳しく弟だけを可愛がる傾向が強く、M子はそれへの不満を持っていた。2年生になる時に父親の転勤があり、彼女はそれまでべっりの関係にあった父親と離れて母、弟と3人で過ごすことが多くなった。M子の愛情欲求はますます充足されなくなり、不満は一層強まっていったと思われる。彼女はそうした不満、怒りのいくらかを弟に当たるという形で出していたが、それらを母親に向かって直接表現することは出来なかった。彼女はそれまで親に一度も反抗したことがない子であった。心の中で母親に対して怒りや攻撃的感情を経験したり、あるいは甘えたい願望を抱いていたりしても、厳しい超自我にもとづく内的禁止と怖い母親(彼女の怖い母親像は、伯母と激しく口論する母を目撃することによって一層強化されたのかもしれない)から叱責、拒否されるのではないかという現実不安のために、それらを表わせなかったのであろう。こうした解釈を支持する指標を家族画においても見い出すことが出来る。切断されるような形で描かれた母親の腕からは母親に対する攻撃性を読み取れる。母親が持つ買物籠にみられる“X”は、Burnsら(1972)²⁾の解釈仮説によれば衝動コントロールをめぐる葛藤を示すサインである。また、M子の左口元に走る線は表現することへの禁止を連想させる。

以上のことから、M子の息を強く吸い込む症状は、母親に向かおうとする攻撃性、甘え願望と超自我との間の葛藤に対する自我による妥協、防衛として形成されてきたものと考えられる。すなわち、この症状は一方では母親に向かう攻撃性を呑み込み防衛しようとするものであり、同時に退行的な様式で甘え願望を満たそうとするものであったと思われる。

また、M子はそれまで親に逆らったことがない子であり、真の自我の発達に必要な「反抗」のステップを乗り越えていなかった。階段や坂を上る際に喘いでスムーズに上れない症状は、彼女が成長の次のステップを上り切れないでいることを身体言語で象徴的に表現しているものと考えられる。

2. 治療過程の検討

1) イメージの変遷過程

本事例の心理治療は非言語的技法によるイメージ表現を主体にして行われている。ここでは、治療過程における箱庭や描画などのイメージの変遷について考察する。

初回面接における自由画は、M子の内向的で消極的なあり方を示しているが、同時に《こちらに向かってバットを構えるバイキン君》は治療者に対する応答姿勢を感じさせるものでもあった。箱庭作品においても、彼女の引込み思案なあり方、沈滞した内的世界が窺われる。内的な動きを荷うものはほとんど登場しておらず、わずかにブランコ、シーソーによって微細な内的な揺れが暗示されているだけである。また、自己像を示すとも考えられる家は左下隅、すなわち外界から最も遠い領域に置かれている。

第3回の自由画も初回のそれと類似の傾向を示しているが、治療者がスクリブルで“あなたの受け皿になってあげよう”との気持をこめて《ティーカップ》を投影すると、彼女はまるでそれを感じたかのように否定的母親像を思わせるイメージ表現を繰り返し、第5回には動的家族画によって自己の葛藤・問題を開示する。この間、箱庭表現では、4回から動物が登場するようになり彼女の内界は少しずつ生気を帯びてくる。また、初回に左下隅にあった家が移動し始め、4回の下辺中央を経て、5、6回には最も現実的な領域である右上隅に位置する。外界とのかかわりが少しずつ変化していることが窺える。前述のように、M子の家族画は極めて象徴的に多くのことを語っていたが、これは彼女が外界に対して徐々に自己表現的になり始めているところでタイミング良く実施されたためもあると思われる。第6回のスクリブルには《5歳位の女兒》が登場し退行の兆しが窺える。現実行動でも、M子は母親に対して甘えたい素振りを見せるようになってくる。

第7回の箱庭では「反転」現象が生じている。「領域の反転」は統合への動きを示すテーマとして箱庭解釈上重視されるものである。⁴⁾また、右上隅にアーチ型の門が置かれ、外界との交流の通路が開いた感じである。自由画にも《目覚めたばかりの雌兎》が登場する。しかも、それは色彩を用いて描かれて

おり、感情的要素が加わったものになっている。続く8回の箱庭作品では町並みとなりより広い世界に開かれる。これと軌を一にして、自由画でも初めて用紙の中央に人物像が描かれる。この辺りの外的行動では、通学仲間N子の要求に背いて他の級友と帰ってしまい、その後のN子とのめごとにも自己主張的に対処している。また、階段を普通に上れるようになっている。

第9回の箱庭作品には、馬、牛の飼育という母性性のテーマが出現している。養育のテーマは内的エネルギーの蓄積、強化を示唆するものである。スクリブルで登場した《元気者の小人》は、彼女の無意識の深みから出現してきた新しい動き、発達していない心理機能を、おそらくは肯定的創造的アニムス（女性の中の男性的側面）を象徴するものであると思われる。ユング心理学的立場からのおとぎ話研究によれば、例えば「白雪姫」、「森の中の3人の小人」などの話で女性の主人公を助ける小人は肯定的アニムスを象徴するものと解される¹⁾。肯定的なアニムスは行動力、主導性、創造的な精神の力などの特性を表わすが、M子の元気者の小人もそうした特性を荷うものであり、心の内奥でアクティブな動きが生じてきていることを示唆しているものと思われる。（小人のイメージは第13回の箱庭作品につながっていくが、それだけでなく第19回の箱庭において柵の打ち毀しのきっかけをつくるトリックスター的な男の子、それ以後の回のスクリブルに登場する男性像や鳥のイメージとも関連があると思われる）。このように、内面志向的なイメージ表現では深層で新たな動きが生じていることが窺われるが、他方より外界志向的な表現になると甘え欲求が示されている。これらは、この時点でのM子の心的状況を的確に表わしていると言えよう。この頃、外的行動では、彼女はマラソンを始め症状が消失している。

そして、10回目、箱庭で汽車が左上隅のトンネルに入るテーマが示され、それ以後に治療的退行が進展し心の深みでの探求が始まることが予示される。果して第11回には、彼女の内面で《工事》が始まる。12回の《5歳の女の子の部屋》、《目玉焼きと人参》を経て、13回にはさらに退行が深まる。箱庭の《小人の家》は、異次元の世界、つまり無意識のより深い層を表わすものであろう。心の深みに降下し、そこに住む小人と交わっている。また、そこには発展

の可能性を示すものとしての赤ん坊が寝ている。そして、第14回目、ファリックなイメージを荷うポプラの木の根元に頭をつけて休む5人の子供は、Kalf (1966)³⁾の言う「中心化(Zentrierung)」を表わしているのであろう。まさに、「心の中心なるもの」に心的エネルギーが集中する印象である。スクリブルでは以前よりも直接的な形で否定的な母親イメージが表現される。これらのイメージ表現と呼応して、この辺りの現実行動では父母への反抗、攻撃がクライマックスに達する。彼女は、これまで出来なかった反抗の体験を持ち確実に成長のステップを一段上り得たのである。

第15回目、箱庭で《王子様とお姫様の結婚》のテーマが示され、スクリブルでは《焼餅焼いて怒っている女の子》によって母親、弟との関係で経験してきた怒りが治療の場でも直接表現される。この箱庭作品は、二つの世界の統合のテーマを含むマンダラ表現であり、「心の全体性」を象徴するものである。M子の心の内部で自我と無意識のより高次の統合へ向かう働きが生じていることが感じられる。ここで、結婚を祝福するものとして修道尼が登場しているが、これは面接室に神父の人影がなかったという現実的理由によるだけでなく、彼女が新たな統合性を得るには母性的なものを特に必要としていることも関係していると思われる。また、修道尼で表わされているものには治療者から取り入れた部分も含まれている可能性がある。

第16回の箱庭では、現実に適応する方向で大きなエネルギーが流れ出す。自我が強化され新しい動きが生じてくるが、まだ未解決な部分もあることが区分された学校領域に示されている。スクリブルにおいても、肯定的な母親像の回復、内的な母親との和解が示唆されるが、他面《ヒヨコ》によって自己の柔弱な部分、十分育っていない部分があることが表現され、上述の箱庭表現における二相との対応をみせている。そして、この未解決部分は、第17回の箱庭の《昔》、すなわち古い自分へと発展し、ここから2つの目の展開過程が始まる。つぎの18回の箱庭では、車が左方向に走っており、心的エネルギーが再び退行していることが窺える。もう一段高く跳躍するための退行である。柵で囲まれた保健管理センターは、彼女を保護する治療空間、もしくは治療者との関

係を象徴するものと思われる。なお、この回に試みられた動的家族画でも、母親が肯定的なイメージで描かれ、しかもM子の側に位置づけられている。

そして、第19回目の箱庭では、トリックスター的な男の子と象によって柵が打ち毀される。これまで自分を規制してきた硬い柵を自分の手で打ち毀したのであろう。新しい自我を形成するには古い自我を一旦毀さなければならないが、それは攻撃性によってなされるものである。第16回で鶏、家鴨の飼育(学校領域)、17回には馬、鶏の飼育というように養育のテーマが続きエネルギーの強化が暗示されていたが、ここにおいてパワーアップし象、犀、黒豹、ゴリラという野性的で力強いものが登場し柵が毀される。また、犀と象は、第15、16回に治療者が表現したイメージでもあり、彼女が治療者から取り入れ自分のものとして血肉化した部分を表わしているとも考えられる。とすると、犀の死は、治療者を乗り越えるテーマを象徴的に示しているともみることが出来よう。続く第20回の《男の子の部屋、女の子の部屋》は、弟との関係を踏まえて家庭における自分の空間を確保したことを表現しているものと思われるが、同時にまた治療者との関係においても自分の領域を主張したと解することも可能かもしれない。

第21回の箱庭では、自分の《昔と今》、つまり古い自分と新しい自分が統合され、より高次の統合性を持つ人格に変化したことが示される。この回の《天然記念物の植物》、22回の《きれいな変わった鳥》は、M子の変容を成し遂げたことの象徴的表現であると思われる。ここに、彼女の心の変容過程は一段落し、《6つの場面》という形でそれまでの体験のおさらいがなされる。現実水準での母親との和解を思わせるやりとりが母親から報告されたのもこの頃であった。

第24回～26回のイメージ表現では、再び人物の年齢がM子の現実の年齢よりも下がり、食物摂取のテーマが出現している。これには、暖かく保護されたところから離れて現実の厳しさを受け容れていく過程、終結が遠くないことを予感しての悲しみの表現、別れの準備といったことが関係しているのではなかろうか。第24回の箱庭の《トンネルから出て来て走り去って行く汽車を見ている

女の子」のイメージは特にそうしたことを連想させる。(汽車がトンネルから出て来るのは、第10回の箱庭の汽車がトンネルに入るイメージと対応するものでもある)。この時期M子は学校生活において積極的となるが、すべてがOKということではなく、クラスの特定期間ととの問題にもぶつかっていた。また、治療者の中では、そろそろ終結のことを考え始めていたが、彼女も終結を予感していたのかもしれない。終結のことも含めた現実の厳しさや否定的な側面を、もう一度年令を下がってそれらも現実の一部として取り入れていくというテーマがそれらのイメージ表現の中に示されているように思われる。

他方、第25回の動的家族画と26回の自由画《文鳥の四態》は、次元は異なっているが、それぞれ彼女が以前よりも自由なあり方を獲得したことを表現しているようである。家族画は、弟とのことが気にならなくなり仲間との関係の方にエネルギーが向いていることを示唆している。

第27回の箱庭では、教会の庭の真中に御馳走が置かれ《祝祭》となる。やはり食物のテーマであるが、今回のそれは町の人のお金を出し合って用意したものであり、社会的連帯、共同性の中から得るエネルギーを意味するようである。そこには、彼女が前思春期の心の発達にとって大切な仲間との親密な関係を獲得しつつあることが反映されているのであろう。そして、この回、M子は鷹の姿を借りて自らの力で飛び立ったことを表現する。彼女は乗り越えるべき成長のステップを見事に越え飛び立つことが出来たのだ。同時にまた、最後の家族画が示すように、家族における好ましい関係と暖かさをも獲得することが出来たのである。

2) 治療関係

初回面接におけるM子は、自ら語ることなく治療者と視線を合わせることもない引込み思案な態度を強く示していた。治療者は、そうしたM子のあり方を尊重して、彼女の動きを阻害しないように受容的な態度で見守りながらかわっていった。具体的には非言語的手段を主体とする接近法をとった。殊に、相互スクリブルや相互粘土造形などの方法を用いることにより治療者自身もイメージ表現をして、彼女と非言語的な次元においてもコミュニケーション

をはかるように努めた。これらの相互法は、山中(1979)⁹⁾が述べているように、クライアントと治療者との間の不平等性を少なくし、クライアントの不安、防衛を緩和する上ですぐれた力を発揮する。また、この方法は、治療過程のそれぞれの時点で治療者がクライアントに対して意識的無意識的にどのようなかかわっていたのかを見返す際に有用な情報を与えてくれるものでもある。

治療過程の初期には、治療者は上述のようなM子の心の状態に波長を合わせて交流していくことを特に心がけた。そうした姿勢は、第4回頃までの粘土造形やスクリブルにおいて治療者が<白兔>、<鶯>、<白鳥>などのおとなしい動物や(彼女の志向性の強い^(註1))鳥のイメージを表現していることから窺えよう。また、第3回の<ティーカップ>の投影は、彼女のどのような表現でも受けてあげようとの気持ちにもとづくものであった。このような治療者のかかわり方が、徐々にM子の内的イメージの動きを賦活し自己表現を促すように作用したと思われる。既述のように、<ティーカップ>の表現を契機にして彼女のイメージ表現が深化し始める。

第4回頃からの数回における治療者のイメージ表現には、<寝呆け犬>、<パンダ>、<ミッキーマウス>、<キャンディ>など子供に馴染の深いものやおどけたイメージがよく登場している。この辺りでは、治療者も自己のうちの「子供の心」を働かせてかかわっていたように思われる。おそらく、彼女からすると、自分が望んでいるものが治療者から次々と出されてくることに喜びと不思議な感じを抱き、また自分の表現を共感的に受けとめてもらえるという感じを経験していたのではなかろうか。M子の心が少しずつ外に向かって自発的主体的な動きを示すようになる。他面、治療者とのそのような交流は治療的退行を促すようにも作用したと考えられる。

治療的退行が進展しM子の行動の変化が起こり始めると、治療者のあり方も少し変化している。それまでと同様に彼女の内的過程に目を向けながら、他方では外的状況に心を配って父母の受けとめ方などの調整をはかりつつ、M子の歩みを見ていこうとしている。こうした治療者のあり方の変化は、第9回からスクリブルを枠あり、枠なしの2枚法で行っていることにも反映している。ま

た、M子に対する態度に父親的なものも加わっている。例えば、N子とのめごとに関しても、M子自身の気持や考えを把握した上で、彼女の自主的な動きに委せ客観的に見守る役割をとっている。

さらに、この頃から、治療者とM子が相呼応するようなイメージを交わすようになっており、イメージレベルでの相互の共感、受けとめが深まった観がある。

第15回辺りから、M子がそれ以前に治療者によって示されたイメージと類似の、あるいは関連性の強いイメージを表現するということがしばしば生じている。＜第11回の修道尼→第15回の箱庭の修道尼＞、＜第13回の体操する男子中学生→第19回の体操する女の子＞、＜第15回の子犀、16回の象→第19回の箱庭の犀、象＞、＜第19回の岩にとまる鷹→第27回の空飛ぶ鷹＞などであるが、それらは治療者への「同一化」、「取り入れ」機制が働いていることを示唆するものである。このような現象が顕著に生じたのは、彼女が息を強く吸い込むという形で愛情を強く欲求していたためであると思われる。彼女は、治療関係の中で、特にスクリブルなどを介して、治療者との自由なやりとりを経験することが出来た。その中で彼女は治療者のものを時々取り入れて自分のものに血肉化していったものと考えられる。この自由なやりとりこそ、これまで家庭の中で得られなかったものであり、彼女が強く欲していたものである。おそらく治療者との交流において、彼女は生まれて初めて自分の話を聴いてもらい受けとめられたという感じを持ったのであろう。治療者への手紙の《なんだか、ここに来てからうれしいことばかりでした。こんなにうれしかったことはありませんでした……》という言葉は、その辺りの経験にふれているように思われる。

しかし、M子は治療者から与えられるものをただ取り入れるだけにとどまらず、第19回には「犀の射殺」という形をとって(治療者が父親的であると同時に母親像をも体現していたとすれば、象徴的な父親殺し、母親殺しを行って)、治療者を乗り越え、一層自我の自立性を高め変容を遂げていく。

そして、第28回、M子は治療者にコーヒー茶碗を1個贈る。＜ティーカップ＞は、治療者が最初のスクリブルで彼女への気持を表現するものとして投影し

たものである。そのプレゼントは、「先生、私の気持ちをみな受けてくれてありがとう。本当に良い受け皿をありがとう。今度は先生がこれで飲んで下さい^(註2)」との気持ちをこめた受け皿のお返しであるようにも思われ、治療者は強い感動をおぼえた。

(昭和60年5月21日 受理)

(註)

- 1) 本文では記載を省略したが、初回面接時に＜転生願望法＞を施行している。それによると、なりたい動物は小鳥で、その理由は「空を飛べるから」であり、なりたいくないものは蛇で「怖いから」という理由であった。
- 2) この贈り物の意味についての解釈は京都大学教育学部山中康裕助教授のご指摘に負っている。第28回面接を終えた時点で、山中助教授に本事例に関してのスーパービジョンをお願いし、上記の解釈をはじめとして多くの貴重なご示唆、ご指導をいただいた。そのことを記すと共に山中助教授に心からお礼を申し上げます。

参考文献

- 1) Birkhäuser-Oeri, S.: Die Mutter im Märchen. (Verlag Adolf Bonz, Stuttgart. 1976)
(氏原寛訳：おとぎ話における母 人文書院 東京 1985)
- 2) Burns, R. C. & Kaufman, S. H.: Actions, styles and symbols in kinetic family drawings: An interpretive manual. (New York: Brunner/Mazel, 1972) (加藤孝正他訳：子どもの家族画診断 黎明書房 東京 1975)
- 3) Kalff, D. M.: Sandspiel. (Zürich: Rasher Verlag. 1966) (河合隼雄監修 大原貢・山中康裕共訳：カルフ箱庭療法 誠信書房 東京 1972)
- 4) 河合隼雄編：箱庭療法入門 誠信書房 東京 (1969)
- 5) 中井久夫：枠づけ法覚え書 芸術療法 5, 15-19, (1974)
- 6) 中里 均：交互色彩分割法——その手技から精神医療における位置づけまで—— 芸術療法 9, 17-23, (1978)
- 7) 清水信介：登校拒否女子中学生の心理療法における描画イメージの変遷 (第62回北海道精神神経学会(1982年12月)で発表) 精神誌 86, 84, (1984)
- 8) 清水信介：対人恐怖の一心理療法例——治療過程における心像の変遷 (第64回北海道精神神経学会(1983年12月)で発表) 精神誌 86, 1020, (1984)
- 9) 山中康裕：児童精神療法としての心像分析について 徳田良仁編「芸術療法講座 1」 星和書店 東京 (1979)
- 10) Yamanaka, Y.: Multi-dimensional expression therapy and its application on a case of anorexia nervosa. 9th International Congress of the Psychopathology of Expression. Verona, Italy. 6. Oct. (1979)

学 術 研 究 発 表 集 録

文 科 編

(昭和59. 4. 1~60. 3. 31)

外 国 語

Kunihiko HASHI MOTO	On the Coreference of the Possessive—Re- flexive Suffix in Mongolian	English Ling- uistics Today. Kaitakusha.	1985.403— 419
---------------------------	---	--	------------------

保健管理センター

清 水 信 介	ある児童神経症者の心理療法過程と家族画 の変化	北海道精神神経 学会第66回例会	1984.12.16
---------	----------------------------	---------------------	------------

CONTENTS

Cultural Science

Nov., 1985

Whole No. 35

Egoism in Durkheim's <i>Le suicide</i> Teruo Utsunomiya	1
Geschichte der deutschen Volksdichtung. Übersetzung aus dem Buch: „Geschichte der deutschen Volksdichtung“ (Hrsg. v. Hermann Strobach, Akademie Verlag 1981, Berlin)..... Hachirō Sakanishi	29
Kriterien und Begriffe der deutschen Volksdichtung Übersetzung aus dem Buch: „Deutsche Volksdichtung. Eine Einführung“ (Hrsg. v. Hermann Strobach, Leipzig: Verlag Philipp Reclam jun. 1979) Hachirō Sakanishi	51
Sammeltätigkeit und Erforschung der deutschen Volksdichtung. Überset- zung aus dem Buch: „Deutsche Volksdichtung. Eine Einführung“ (Hrsg. v. Hermann Strobach, Leipzig: Verlag Philipp Reclam jun. 1979) Hachirō Sakanishi	61
Versuch der geschichtlichen und gegenwärtigen Übersicht des Haiku auf Hokkaidō JAPAN Hachirō Sakanishi, Toshio Kimura and Michael Großmeier	81
Body composition and three indices of physical fitness in freshmen: exer- cise is of no effect?..... Koji Taniguchi, Ichiji Seino and Hidetoshi Konari	141
Psychotherapeutic Process of a Preadolescent Hysteric Case and the Change of Kinetic Family Drawings Nobusuke Shimizu	149
Other Achievements in Studies for 1984 by Professor in this Institute.....	187

昭和60年11月26日 印 刷
昭和60年11月30日 発 行 (非売品)

編 集 兼 室 蘭 工 業 大 学
発 行 所

印 刷 所 室 蘭 印 刷 株 式 会 社
室 蘭 市 本 町 2 丁 目 5 番 1 号
T E L (0143)24—5 1 4 1